
魔術的生徒会

夙多史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術的生徒会

【Nコード】

N4731Q

【作者名】

夙多史

【あらすじ】

羽柴魁人は他人の中に謎の光が見える眼を持っている以外はどこにでもいる男子高校生だった。彼はメイザース学園入学後に出会った少女——神代紗耶に異常な光を見てしまう。以降、この眼に映る光について生まれて初めて知りたいと思い始めた魁人は、自らを魔術師と名乗る学園の生徒会と接触することになる。

プロローグ

深夜。夜行性の人々以外は寝静まったころの時間帯。

静寂に包まれた狭い路地裏で、三つの人影が蠢いていた。何かから隠れているように辺りを警戒し、誰もいないことを確認しても、人影たちはコソコソと小声で話し合っている。

「おい、本当に大丈夫なんだろうな」

「ああ、問題ねえよ。俺がいるんだ。サツと行ってパツとやっちゃまおうぜ」

「そうそう。本摩^{ほんま}は『魔法使い』なんだから、何も心配することはないわよ」

人影は三人とも高校生くらいの少年少女だった。全員が闇に溶けるような黒っぽい服装をし、各々が手にサングラスやヘルメットなどの顔が隠れる道具を持っている。まるで今からどこかに強盗しますよというような格好だが、実際にその通りだった。

「でもな、これから忍び込むとこつつたら、この那緑市^{なよりし}で一番でけえ銀行だぜ？ 絶対セキュリティとかやべえって」

二メートル近い大柄な少年がネガティブなことを言うのに対し、本摩と呼ばれた金髪をツンツンに逆立てた少年がポジティブに返す。「大丈夫だつつてんだろ。俺様の力がありゃあ、絶対成功する。」

ああ、間違いねえ」

「キャハッ！ 本摩つてばかあつくいい」

サングラスを片手で弄びながら、ニット帽を被った少女がふざけたように笑う。すると、大柄な少年の顔にも自信が満ちてきた。

「あ、ああ、そうだな。たとえ警察でも、本摩が本気出しゃあ一発で消し炭だ」

と、その本摩が口元で指を立てる。

「しっ……時間だ。顔隠して乗り込むぞ」

彼の指示に二人は無言で頷き、それぞれが手にしていたもので顔

を隠し始める。

その時、背後からジャリツという音が聞こえた。

「——ッ!？」

慌てて振り返る三人。そこには、彼らと同じくらいか少し年下の少女が立っていた。

腰よりも長く伸ばしたストレートの髪は夜闇より黒く、対照的な白い肌が浮かんで見える。服装は茶系のブレザーにチェック柄のスカート。そんな深夜の路地裏には到底似合わない高校の制服を着た少女が、小さな輪郭に収まる漆黒の大きな瞳で彼らを見据えている。

「何だよ、ビビらせやがって……」

警官かと思つた本摩は少々拍子抜け気味に呟いた。

「アレってメイザース学園の制服……ウチらと同じとこのじゃん」

「つーか、何でメイザースの奴がここにいんだよ。まさか、俺たちの話をどっかで聞いて、仲間に入れてもらいに來たつてわけじゃねえよな。おい、どうなんだ？」

冗談っぽく言いながら大柄な少年が現れた少女に歩み寄り、その大きな手で彼女の肩を掴もうとするが――

ゴスツ！ という鈍い音がした瞬間、彼は宙を飛んだ。

「がはっ!？」

背中から地面に叩きつけられ、大柄な少年は何が起こったのか理解できず、ただ頭に『?』を浮かべる。だが、後ろの二人は見ていた。二メートル近い巨漢を、あの少女は華奢な体とは思えない脚力で蹴り飛ばしたのだ。

「……何もんだ、てめえ」

黒髪の少女を睨みつけ、声のトーンを低くして問う本摩に、彼女

はただ一言で答える。

「生徒会よ」

.....。

言葉の意味が呑み込めず呆然とする三人。少女はさらに告げる。

「とりあえず、目覚めた力を使って銀行強盗なんて馬鹿なこと考えたあんたたち三人は、あたしら生徒会で処罰させてもらうから覚悟しなさい」

途端、三人は我に返る。黒髪の少女は自分たちの仲間になりに来たのではない。止めに来た、いや、潰しに来たのだ。そんな少女を、三人は完全に『敵』と認識する。

顔も見られた。敵は排除するしかない。

「どいてろ、俺がやる」

本摩は大柄な少年を下がらせると、ゆっくりと少女に近づきながら黒いジャケットのポケットに手を入れ、そこからライターを取り出す。そして、シュボッと火をつけた。

「あー、何か知らねえが、俺らの計画知ってるみてえだからよ。まあ、その、何だ……死ね！」

最後に凄みを利かせた一声を放つと、火のついたままのライターを宙空で円を描くように振る。と、どういうわけか夜闇に描かれた軌跡は消えずに残り、オレンジ色に輝く粒子が次第に円の周りから中心部に集っていく。

次の瞬間、集った粒子が白熱する火炎球となって射出された。それは砲弾のような勢いでまっすぐ飛行し、避ける暇など与えず黒髪の少女に直撃する。

爆破テロのごとく赤い閃光が迸り、爆音が轟き、熱波が押し寄せ、黒煙が上がる。深夜とはいえ、大通りに近いこの場所でこれだけのことが起きれば流石に騒ぎになるだろう。だが、あの少女に知られていた時点で今日の計画は失敗である。もう別に構わない。

火炎と爆煙のカーテンを眺めながら、本摩はもう生きてはいないだろう少女へ嘲るように言葉を投げかける。

「ハッ、一瞬で骨ごと灰になりやあ、てめえがここで死んだなんて誰も気づかねえよな。力のねえ馬鹿が正義の味方気どりでしゃしゃり出てくるからこうな——!?!」

刹那、炎の色が青く染まった。

何かやばいものにも引火したのだろうか？ だったら早く離れた方がいいのか？ そんな考えが頭の中を過ったが、そうではないことを彼はすぐに思い知る。

「突然魔力が開花した人って、みんなこんな馬鹿みたいな思考回路なのかしら？」

そんな声がした途端、炎が暴風に煽られたように一瞬で吹き飛んだ。そこには灰になったはずの少女が、火傷一つ負ってない姿のまま立っていた。

「な、何で……」

さらに彼女の右手には、一体どこから取り出したのか一振りの日本刀が握られていた。

それがただの日本刀でないことはすぐにわかった。なぜなら、その見事な反りの刀身に、先程の蒼い炎がオーラのように纏っていたからだ。

> i 2 0 4 4 6 — 2 7 1 7 <

蒼炎纏いし日本刀を携えた黒髪の少女が、目の前に敵として立ちはだかっている。明確な『死』の恐怖が急激に沸き起こり、本摩は震える足で後ずさる。

「くそっ！ こいつも俺と同じか」

「違うわ」

冷やかな視線を向け、黒髪の少女はきっぱりと断言する。

「魔力が開花したばかりのあんたと、この私を一緒にしないでよね」

日本刀の少女が一步踏み出す。

「あたしは魔術師で、あんたは魔力もろくに制御できないただの素人なんだから」

「ま、魔術師だあ？ てめえ、意味わかんねえことほざいてんじゃねえぞ！」

本摩はもう一度ライターで円を描き、彼女に向かって火炎弾を飛ばす。さっきよりも威力と熱量を上げているが、あの敵には通用しないだろうことは本摩が悟っていた。だから――

「おい！ てめえら、逃げ――」

――ようと振り返った本摩だが、そこで見た光景に絶句する。

自分の後ろには、一緒に銀行強盗を企てた仲間が二人いるはずだった。

だが、そこに見える人影は、一、二、三、……五人。

明らかに数がおかしい。しかも、そのうち地面に伏して苦しそうに呻いている影が二つ――自分の仲間の二人だ。

（何だよこれ……。え、嘘だろ？ おい、何でてめえら倒れてんだよ。あいつら何したんだよ。つーかコレどういう状況なんだよ？）

事態を把握できず混乱する本摩に、謎の人影の一人が交渉するように言ってくる。

「ねえ、本摩くん。別に痛いことはしないから、このまま大人しく捕まってくれないかな？」

どこかおっとりとした少女の声だった。

（こいつ何で俺の名……いやそれより、この声どつかで――）

その時、背後からカツカツと軽い靴音が響く。僅かに首を動かして振り向くと、案の定、黒髪日本刀の少女が無傷でそこにいた。

「月夜先輩、こいつも申しちゃった方が早いと思います」

「あははー、力ずくの解決は最後の手段よ、紗耶ちゃん。できるだけ穩便に済ませること。まあでも、紗耶ちゃんは今日が初仕事だし、だんだんと慣れてくればいいよ」

月夜と呼ばれた人影が諭すように言うと、黒髪の少女――紗耶は

小さく舌打ちする。本摩は『サヤ』という名前こそ知らないが、『ツクヨミ』という名字には心当たりがあった。だが、今はそんなことを考えている場合ではない。

（こんなところで捕まっていたまるかよ！）

逃げなければ。たとえ仲間を見捨てようとも。しかし実際問題、前は三人、後ろは日本刀、左右は高いビルの壁、完全に八方塞がりである。

そうになると、壁の薄いところを突破するしかない。それは必然的に女が一人の後方。妙な日本刀を持っていようが何だろうが、そこが一番薄い、と彼は判断する。

素早く踵を返し、本摩は日本刀の少女に向かって疾走する。向こうで『あつ、逃げた！』とか何とか言っているが、当然構ってなどいられない。

「どけやああああああああああつ！！」

もはや撃つまでに隙のできる能力は使わず、己の拳のみを頼りに全力で駆ける。対する少女は特に慌てたりはせず、幻想的な火の子を散らす日本刀を地面と水平にして構え――

「ほら、結局こうなるんじゃない」

呆れたように呟いた瞬間、刃の先端から蒼い炎が射出される。ペンを走らせるように夜闇に線を描いていく炎は、蛇のように本摩に絡みつくと、一気に彼の体を炎上させた。

「ぐ、ぐわあああああああああああああつ！？」

断末魔を思わせる絶叫が路地裏に響き渡り、炎が消えると、本摩は体中からプスプスと煙を上げながら倒れ伏した。それでも加減されていたのか、彼は意識を失ってはいない。向こうで『ああ！やり過ぎてる！？』とか言っている声も聞こえる。

「な、何なんだ……てめえら、は……」

「さっき言っただじゃない」

振り絞るようにして出した二度目の質問に、少女は地に伏す本摩を見下しながら言う。

「生徒会、そして魔術師よ」

プロローグ（後書き）

イラストは雨式さんに依頼したものです。

メイザース学園生徒会（１）

四月十二日。

県下でも大きな都市である那緑市。その中心部に広大な敷地面積を持つ私立メイザース学園は、朝八時という時間帯だけに登校のピークを迎えていた。

空は快晴。穏やかな春の陽光が気持ちよい温かさを提供し、賑やかに登校してくる学生たちを差別なく包み込んでいる。

（またか……）

そんな中、西洋風の城門みたいな校門を抜けたところで羽柴魁人^{はしばかいと}は眉を顰めた。

自然なままの黒髪に、どちらかと言えば整っている鋭い輪郭の顔立ち。まだ入学して三日目ということもあって、学園の制服は乱さずきちんと着ている。

決して優等生に見えるわけでもないが、不良というわけでもない。そんなどこにでもいるようなごくごく平凡な高校一年生である。

だが一つだけ、魁人には他人と違うところがあった。

（また、見える）

それは、常人には見えないものが見えること。といっても、魁人は超能力者でもなければ霊能力者でもない。千里眼などないし、幽霊なんてものも見えないから霊感はないのだと思う。

魁人の瞳に映るもの、それは――光。

曇りのない透明な輝きが、人の体の中に見えるのだ。人体そのものが透けて内蔵や血管まで見えてしまうという透視的なものではなくて、胸の辺りに輝きのみが透けて映り、心臓が鼓動するように僅かに明滅しているのもわかる。

ほとんどが消えかけの豆電球のように小さく儚げで、まるで人の魂でも見ているような感じもするが、輝きが見えない人もいるのでそういう類のものではないだろう。

（本当に、あれって何なんだ）

気味が悪い、とは思っても、それだけだ。吐き気がするほどグロくはないし、寧ろ綺麗だとさえ思う。それに、あの輝きを見るのは初めてではないのだ。

物心ついた時から時々見えることがあって、まあつまりは慣れてしまっていた。感覚的には、道路を走っている車の中に外国の高級車が混じっている感じである。

確か幼稚園の頃だったか、このことを親に話したら不気味に思われたことがある。あの光が自分にしか見えないものだと言ったのは、その時からだ。

そして、成長するに連れて見ることも少なくなった。だが、それは見えなくなったというより、自分の意志で見る見ないをコントロールできるようになったただけだった。

（ていうか――）

今も、『見る』と意識している。それは時々やってしまう悪い癖だが、今の場合はしつかりとした自分の意志の下で見ている。もともと、見えたところで他人はおろか自分の役にすら立たないし、『見える人』なんて月に一度出会えるか出会えないかなのだが――

（何で、こんなに見えるやつが多いんだよ）

どうも、この学園はおかしい。意識を研ぎ澄ませば、周囲にいる人々の約半数はその『見える人』なのだ。学園ではなく自分がおかしいのかもしれないと思うも、こんなことは初めてだ。

この学園に入学してから三日、何度も確認してみたが結果は変わらない。このことを誰かに相談したい気持ちはあるが、

（こんなの信じてもらえるわけないよなあ。寧ろ不気味がられて避けられるのがオチだし）

知っているのは、両親だけなのだ。

とその時、パン！ という景気のよい音が後ろから響いた。

「いぎっ！？」

音とほぼ同時に痺れるような激痛が背中に走り、魁人は顔を引き

攀らせて小さな悲鳴を上げる。一瞬のタイムロスを経て、自分が誰かの平手をくらったのだと気づいた。

「よっ、魁人！ どうしたよ、辛気臭そうな変な顔して」

そんな軽い声に魁人は少々涙目になりながら振り向くと、そこには自分より十センチは背の高い少年が声に似合う軽薄な笑みを浮かべて立っていた。スリムな長身に思いつ切り着崩したブレザーを纏い、耳にはピアス、髪は茶髪。割と自由度の高い学校だからそれで何を言われることもないだろうが、遠目で見ると不良と間違われても仕方ない格好だ。

「梶川、お前いきなり何しやがんだ。今のかなり痛かったぞ」

彼は梶川邦明。かじかわくにあき 魁人の中学時代からの親友兼クラスメイトで、現在この学園で唯一の親しい存在である。

「あり？ おかしいなあ、加減ミスったかな？ まあ、オレの魁人君なら対戦車用ロケットランチャーぶっ放したところで傷一つつかないと思うが」

「死ぬ！ 絶対死ぬ！ 勝手に人を未来から来たアンドロイドみたいにしてんじゃねえよ！ ナイフ一本で普通にあの世に逝けるってあとさりげなく『オレの』とかつけるな気持ち悪い」

「はは、ジョークジョーク」

何の悪気もなく笑ってみせる梶川を、魁人は怨念を込めまくった視線で睨めつける。

「お前、今度から背後には気をつけろよ。簡単には消えないモミジ作ってやる」

「おっと、そいつは大変だ。次から新聞紙を五層ほど巻いてこねえとな」

とまあ、梶川とは昔からこういうノリの関係だ。地元からけっこう遠いところにある学園だけに他の知り合いはいない。正直、彼の存在は心強いことこの上なかった。

ふと思つて梶川を『見る』が、例の輝きが見えたりすることはなかった。これはいつも通り。

とりあえずそこは安堵し、そのまま二人で適当な会話をしながら一年の昇降口へと向かう。途中、梶川が思い出したように言ってきた。

「そうだ魁人、今日は何の日か覚えてるか？」

「お前の誕生日は三ヶ月先だろ」

「いやいや違うって。今日はアレだ、健康診断」

「……それがどうした？ あー、もしかして尿検査のアレを忘れちゃった同盟でも作るつもりか？ だったら残念、俺は忘れてないからその同盟には入れないぜ」

自分たち新入生のプランは、一日目は入学式、二日目に対面式やクラブ説明会などがあり、今日は健康診断とHRのみで午前中に終了、次の日から早速授業といった具合になっている。

どうやらまた違ったらしく、梶川は大げさに頭を掻き毟った。

「だあーっ！ これだから魁人君はあー！ いいか、健康診断とは体操着で行うものだ。つまりうちの高レベルな女子たちの体操着姿を初見できる日なのだよ。健全なる男子高校生たるもの、テンション上げずにはいられるかーっ！—— ってあれ？ 何故引いてんのかな魁人君？」

「寄るな変態！ 同類と思われる」

こいつがこういう奴なのは知っているが、他の生徒たちがいる中でここまで高々に声を上げられたら、内容が内容だけに友としての縁を切ることを真剣に考えた方がいいかもしれない。

「何を言うか同士。君もそっち方向の理由でわざわざこの学園を選んだんじゃないのか！？」

「同士言うな！ つーか違うー！」

確かにこの女子のレベルは高いと聞いていた。この学園を知ったのはこいつが誘ってきたからだが、自分はこの馬鹿と大いに違って普通な理由でこのメイザース学園を母校にすると決めたのだ。そう、普通の理由だ。そんな不純なものじゃなくて、もっと普通の——

(……あれ？ 俺がここ選んだ理由って何だったっけ？)

実家を離れ、アパートを借りて一人暮らししてまでこの学園を選んだ理由…… 思い出せない。親友に誘われたから…… ってわけでもない。面接の時は何を言っただろう？ いや、面接は嘘八百を並べただけだった気がする。

(まあいいか、どうだって)

忘れたってことは、それだけ適当だったってことだ。県内でも有名な進学校だし、自由度は高いし、一人暮らしにも慣れていた。それらが大きいところを占めていることは間違いない。

そうこう考えているうちに昇降口に辿り着き、魁人は手早く上履きに履き替える。

「とにかくだ」梶川はテンション高くバツと両腕を広げ、「オレは宣言しよう。一年、否、一ヶ月以内には彼女を作る！」

「変態に寄ってくる物好きがいることを切に願っというてやるよ」

「酷っ！？ でもオレは負けない。既に目ばしい一年女子の簡単なデータは収集済みなのだ」

「仕事速っ！？」

わっはっは、と何か高らかに笑う梶川に真っ白い視線を投げつける魁人。その行動力をもっと別のところで活用したらいいのに、と思うが言っても無駄なので口には出さない。

梶川はブレザーのポケットから手帳らしきものを取り出して開く。

何か『美少女手帳』とか意味不明なことが書いてあるが、気にしたら負けだ。間違いなく。

「一組の堀町真苗、オレらと同じ三組の鈴瀬明穂、ほりまちまなえ 五組の月岡愛梨、すずしなあきは 八組の朝風祥子などなど。あさかせしょうこ フッフ、オレ好みの女の子盛りたくさんだぜ。しかし——」

はつきり言っただけには梶川が並び連ねた女子の顔は誰一人として思い浮かばない。同じクラスでもそうなのだから、他のクラスなど知ったことではない。

「オレ的には、一番はやっぱり神代紗耶かみしろやだな。彼女こそ頂点にしてキ

ング！ あ、この場合はクイーンかな？ まあとにかくだ。メイザース学園にミスコンがあれば絶対に投票するね」

「……あのな、お前の自己満足で喋ってるのならしいけどよ、俺には誰だかさっぱりわかんないんですけど。気に入ったんなら勝手に告って玉砕してこい」

「玉砕は決定事項！？ オレ結構いい男よ？」

「どこがだよ」

顔はよくても中の上と言ったところで、性格はコレだ。いい奴だということとは否定しないが、いい男かどうかは謎である。もっとも、こういうお調子者は大抵クラスの中心人物になるから、面白がられても嫌われることはないだろう。中学の時はそうだった。

「つーか魁人、お前はもうちょっと周りを見ろよ。同じクラスなんだぜ、神代紗耶」

「赤の他人なんて俺にとっては何の背景なんだよ。そいつを観察する趣味はない」

あまり観察が過ぎると、余計なものまで見えてしまうかもしれないのだ。

「何か、お前には出会いが少なさそうだなあ。——ん？ お、噂をすれば♪」

梶川は敬礼でもするかのように手刀の形にした手を額にあて、口元に嫌らしい笑みを浮かべながらこちらへと歩いてくる女子生徒を眺める。

そんな彼に呆れ顔の魁人も、釣られたようにその女子生徒を見た。

心臓が大きく跳ねた。

彼女はまさしく美少女だった。白磁のような白い肌に、対照的なストレートの黒髪と漆黒の大きな瞳。歩き方はどこか凜としていて、どこぞのお嬢様といった雰囲気醸し出している。背丈は高校生にしては若干低めだが、プロポーションはよく、梶川が一番と言った

のには得心がいった。

だが、魁人の心臓が強く鼓動しているのはそんなことではなかった。

例の透明な輝きが、彼女にも見えたのだ。それも、なぜか自分の意志とは関係なく自然に見えてしまっていた。その輝きは、他の誰よりも、今まで見た誰よりも大きく力強い光を放っている。さらに、違うのはそれだけではない。

形。そう、彼女に見えている輝きの形状は遠くから見た電球の光のようなものではなく、あれはどう見ても――

（炎、だよな）

強く、しかし淡い月光のような輝きを放つ、子供の握り拳を一回り大きくしたくらいの透明な炎。それが、彼女の中に見える光だった。

——だがこの時、魁人は気づいていなかった。彼女の強い輝きを映す自分の瞳が、その光を反射する澄んだ青色に染まっていることを……。

と、その輝きが唐突に消えた。

「え？ 何で……」

突然の事態に驚き、思わず声を出す魁人。すると、上履きに履き替えた神代紗耶が魁人の目の前で立ち止まった。

「？」

不機嫌そうな顔で見上げてくる彼女に、魁人はさらに困惑している。

（な、何で俺を見てんだよ……まさか！ こいつは俺があ光を見えることに――）

気づいたんじゃ、と的外れなことを思ったのと同時に、突き刺すような視線を魁人に向けていた彼女が口を開く。あからさまに不機嫌な声で、一言。

「そこ邪魔なんだけど」

「え？ …… あっ、ごめん」

一瞬わけのわからなかった魁人は、自分が彼女の進路を塞いでいることに気づくと即座に謝って脇に退いた。フン、と鼻から息を吐き、彼女はそのまま一瞥もせず去っていった。

艶やかな黒髪の揺れる後ろ姿が階段の角に消えると、興奮を抑えていた梶川が爆発する。

「見ただろ魁人！ あんな可愛い子中学の時にやいなかったって！ オレ様の属性判断眼鏡によると、彼女は絶対にT U N D E R E 系だ。嗚呼、ああいう娘に『か、勘違いしないでよね、別にあなたのためにしたんじゃないんだからね』とかって言わせてみたいいゝ！」

「……………」
横で何かいろいろとほざいている馬鹿の言葉は耳にも入らず、魁人は彼女が消えた階段の方を呆然と見詰めていた。

メイザース学園生徒会（２）

メイザース学園は併設型の中高一貫校である。

都市のど真ん中にあるにも関わらず、その敷地面積は東京ドームが二つほど入ってしまうほど広いらしい。何でも、昔ここには孤立した山があつて、そこを切り開いて建てたとか何とか。まあ、五十年以上は前の話だ。

その広さをうまく活かしているのかは知らないが、中等部と高等部の間には、常緑樹や桜の生い茂る公園が境界線のように存在している。学園緑化にはやり過ぎな気もしないでもないが、そこは生徒や教師にとっての憩いの場としてきちんと機能している。

そんなメイザース学園の高等部一年は現在、健康診断の最中だった。

保険室で内科検診を受け、視聴覚室で視力、音楽室で聴力、第一体育館で身体計測と、広い学園内をひたすら歩かされたため、ある意味では校舎案内も兼ねているように思えた。

「ハ、ハハハ……。な、なぜだ、なぜなんだろうわあああああああああああああああつ！？」

その健康診断の途中、梶川が突然ムンクの叫びよろしく絶望的な表情で喚き出した。廊下内に響いた彼の声に、周りの生徒たちが何事かと視線を向けてくる。が、すぐに興味が失せたのか関わらない方がいいと思つたのか、誰もが各々の行動へと戻っていく。

「見渡すかぎり男男男、そして男！　なぜ、なぜだ！？　オレの天使たちの体操着姿は何処に！？」

まあ、それが原因だった。周囲を見回したところで、女子など一人もいない。

「男女別行動なんだから当たり前だろ」

冷めた口調で魁人は現実を伝えてやった。内緒な話、まったく興味がなかったわけではないが、横のコレに比べればショックなど受

けていないに等しい。

「オレはまだいつあるのかわからない体育の時間まで待たねばならないのか。……なあ魁人 この事態はどう対処すればいいと思う？」

「とりあえずお前が一度転生することをオススメする」

「ぐつ、相変わらず厳しいお言葉。オレ様超シヨック」

とか言っているが、こんな程度でダメージを受ける梶川ではないことは知っている。

現在、自分たちは第一校舎——職員棟の三階にいる。そこには屋上に出る扉がある他に、『生徒会室』と表記された部屋が一つあるだけで寂れた感じが否めない。一箇所しかない真新しい引き戸の横にはホワイトボードの掲示板があり、近々ある創立者際などの学校行事やら何やらが事細かに書き込まれていた（こんなところまで見に来る生徒がいるかどうかは謎だ）。

この生徒会室で、自分たち一年三組男子は一人ずつ適当な順番で血圧検査を行っていた。

「なあ、学校の健康診断って血圧測るもんなのか？ 貧血検査ならわかるけど」

魁人は素朴な疑問を親友に投げかける。

「ん？ さあ、コーコーサーは普通なんじゃないの。それよりも魁人、オレが生徒会長になって女子の制服をメイド服に変えるっていう作戦をたった今思いついたんだが、どう？」

「全女子の恨みを買うだろうな」

というか、まず梶川が生徒会長になったところを魁人には想像できなかった。当の本人は自分が会長になった時の叶わぬ夢をブツブツと声に出して妄想し始めているが……。

魁人は思わず溜息をついた。そして窓の外を意味もなく眺める。

この親友の戯言に付き合うことよりも、今は考えたいことがあった。

——神代紗耶。

異形の、そして強い輝きを宿す彼女のことを、魁人はずっと気にかけていた。

教室にいる時も何度彼女の方を見たことか。人体の中に存在する謎の透明な輝き。ちゃんと『見る』と意識すれば見れたが、あの時のように意識せず自然と見えてしまうことはなかった。

それに、どういうわけか少しだけ輝きが弱くなり、形も炎からだの光球になっていた。

あれは錯覚だったのだろうか？

いや、それにしてははつきりし過ぎていた気がする。

ならば偶然？

わからないことばかりだ。あの輝きについても、それが見えてしまふ自分の眼についても。

（知りたい）

—— 知りたい。知りたい。知りたい。

初めて、こんなに強く思えた。自分の異常な眼についての不安や恐怖はもちろんあるが、ただの純粹な好奇心も少なからずある。

（神代紗耶。明らかに他とは違う彼女なら、何か知ってるかもしれない。—— っっていつても、たぶん無駄なんだろうなあ）

過度な期待は抱かない。が、希望も捨て切れない。

そんなことを考えていると、いつの間にか順番が回ってきていた梶川が検査を終えて出てきた。と、彼の様子がおかしいことに魁人は気づく。

「か、かかかか、かいと…… お、オレは、オレはああああああ！」
妙な興奮状態の親友が何かを語りかけるように肩を掴んでくる。

その猛烈な勢いにやや気押されながらも、魁人はからかうように問うた。

「何だよ、この中に火星人でもいたのか？」

「オレは幸せだあー！ ブフツ…… も、もうどうなってもいいぜえー！」

だが、梶川は魁人の問いに答えないうちに、途中で鼻血を噴きつつ全力で走り去ってしまった。魁人はもちろん、他のクラスメイトたちも走っていく梶川を啞然として見ていることしかできなかった。

「何だつてんだ？ まあ、たぶん気にしたら負けなんだろうけど」
意味不明な親友を怪訝に思いながらも、順番なので生徒会室のドアを開けて——いちいち閉める必要性を感じない——中に入った。

中は——意外と広がった。無駄に教室一個分ほどのスペースがあり、壁二面を覆い尽くすほどの棚にはきちんと整理整頓された本や資料などがぎっしりと詰まっている。その棚の間に扉が見えたが、曇りガラスに『シャワー室故障中』という貼り紙が貼られているのは突っ込んだらダメなのかもしれない。

エアコンも完備されていて、部屋の中央には長机とパイプ椅子が置かれている。その長机の上には、血圧計と思われる圧迫帯つきの機材が乗っていた。

そして、机の向こう側には二人の女子生徒がいた。

「はい、じゃあ診断表を彼女に渡してそこに座ってくださいー」
にこやかなスマイルでそう促してきたのは、対面するパイプ椅子に座っている少女だった。背中の真ん中辺りまで伸ばした緩いウェーブのかかった髪に、どこかおっとりしているも整った顔つき。ブレーザーの上からでもわかるゆさつとした豊満な胸は、正直目のやり場に困りそうだ。

もう一人は、長い髪を青いリボンでポニーテールにしているのが特徴的な少女で、クールと言うべきか、ウェーブの少女とは対照的に感情の読めない表情で秘書のように直立している。

どちらもかなりの美少女だった。彼女たちが直に血圧計のカフを巻いてくれるのだとしたら、なるほど、梶川が壊れるわけである。

この部屋にいるってことは、二人とも生徒会役員なのだろうか。そういえば、あのウェーブの人が入学式の時にあいさつしていたような記憶がある。

ただ、この部屋には彼女たちしかない。健康診断の手伝いをしているのならば、教師か医師か看護師がいてもよさそうなのに……。そこが気がかりと言えばそうだが、そんな疑問はすぐに吹き飛ぶ

ことになる。

言われた通り診断表をポニーテールの少女に渡し、何か面接みたいだなと思いつながらパイプ椅子に腰かけた瞬間、魁人は見た。見えてしまった。

「――！？」

血圧計のカフを手にしたウェーブの少女に、あの透明な光が宿ったのだ。さらに球状だったそれが、突然形を変えてまるで炎のように燃え始めた。

「これを手首に巻きますから、左手を机の上に出してください」

しかも、見えるのは彼女だけではなかった。彼女の手になっているカフ、それと繋がっている血圧計にもあの謎の輝きが見えていた。それは光球でもなければ炎の形もしていない。まるで回路のように細く全体に張り巡らされ、血管を流れる血液のように絶えず流動している。

（な、何だ、何なんだよ、これは……？）

流石に気味が悪くなり、冷や汗が頬を伝う。

そんな魁人の様子を訝しんでか、ウェーブの少女が首を傾げる。

「？　どうかしましたか？　手を出してくれないとカフを巻けないのです……」

「あ、はい、えーと……」

とは言われても謎の輝きは現在進行形で見えているわけで、はっきり言うとは出たくない。あんな得体の知れない物を巻かれるなんてごめんだ。でも、そうしないと不審に思われる。あの輝きが見えているのは自分だけなのだから。と――

「へえ、君、もしかしてわかるんだ」

感心したような声がかけられた。弾かれたように血圧計からウェーブの少女に顔を向けると、彼女のにこやかだった笑顔がどこか不敵な雰囲気変わっていた。

「……は、はい？」

「わかるの？ わかるんだよね。わかるんでしょ！」

興奮した様子で彼女は身を乗り出して変な三段活用を使ってくる。ゆさゆさと胸が揺れ、息がかかりそうなほど近くに迫った彼女の顔は、プレゼントを貰った子供のようにキラキラと輝いていた。

「わ、わかるって……何が、ですか？」

美人に迫られてどきまぎする魁人に、彼女はさりとって言う。

「君、何かを見たり感じたり、変な力を使えたりするでしょ？」

「！？ 何でそれを」

「あはっ！ やっぱりやっぱりー」
ビンゴだよ、あおい葵ちゃん

身を乗り出したまま彼女は後ろの少女を嬉しそうな顔をして振り向く。だが、葵と呼ばれたポニーテールの少女は何も言わず、ただ無感情な視線でまっすぐ見詰め返すだけだった。

すると、ウェーブの少女はハッとして乗り出した身を引いた。自分のした行動が恥ずかしかったのか、その頬は僅かに朱に染まっている。

「あ、あははー、ごめんね。私としたことが、つい取り乱しちゃった」

てへ、と可愛らしく笑ってみせる彼女に、ポニーテールの少女――葵が初めて口を開く。

「興奮しすぎ」

抑揚のない、しかしどこか呆れを含んでいる口調でぼそりと言。そんな表情も特に変化していない彼女に、ウェーブの少女はムツとして言い返す。

「葵ちゃん、は落ち着き過ぎだよ。ほらほら、笑顔作って笑顔。こういう時は営業スマイルだよ。それにもっと笑った方が男の子にもてるわよ？」

「別にもてなくていい」

「むー、葵ちゃんが笑うのってリクちゃんという時くらいじゃない。今度人を強制的に笑顔にする術式でも開発しようかな？」

「時間と魔力の無駄遣い」

「あのう、俺のこと忘れてません？」

問いを無視された上に蚊帳の外にされかけていた魁人が恐る恐る発言する。

「ていうか、『ジュツシキ』とか『マリヨク』って……何？」

彼女たちの会話の中に聞こえた妙は単語。聞き流してもよかったが、なぜか頭にこびりついて離れない。

「あ、そうだった、ごめんごめん」ウェーブの少女はニコニコとした笑顔に戻り、「君、普通の子みたいだからいきなり言われても意味わかんないよね。えーと、ここは自己紹介からかな」

そこで一呼吸置いてから、彼女は別に訊いてもいないのに勝手に自己紹介を始めた。

「私は三年生で高等部生徒会長の月夜詩奈。『月夜』って書いて『ツクヨミ』、叙事詩の『詩』に奈良県の『奈』で『シイナ』って読むの。よろしくね」

ふじはやしあおい
「藤林葵。二年生。会計。……よろしく」

やはり抑揚のない声で葵も月夜の後に続いた。

「いや自己紹介なんてどうでもいいし！ それよりも俺のことわかるんですか！？ 俺、何か光が見え……」

そこまで言いかけて、魁人は言葉を止めた。冷静に考えれば、知りたいと強く思った直後に手掛かりが飛び込んでくるなど都合がよ過ぎる。さっきは多少なり気が動転していたから、聞き間違いだという可能性もあるだろう。

だが、月夜はうんうんと嬉しそうに頷いて、聞き間違いではなかったことを告げる。

「わかるわけじゃないけど、君が変な力を持つて言うのなら、私たちはそれを否定したりはしないよ。君自身は力の正体を知らないみたいだから、寧ろわかるのはこれからかな。というわけで、ちょっと訊くけど——」

月夜は両肘を机の上に置いて手を組み、ふややんとした表情を少

しだけ引き締めて、言う。

「君は、魔術って信じる？」

メイザース学園生徒会（3）

「君は、魔術って信じる？」

「……はあ？」

突拍子な言葉を頭がちゃんと受け取るのに数秒かった。

（マジユツ？ マジユツって……魔術？）

「本来そこには存在しないもの、世界の法則、それらを自分の意思でねじ曲げ、書き換え、具現化させる。才ある者にだけ許された、奇跡や不思議を引き起こす力。それが魔術」

無表情の葵が機械のように無感情な声で魔術の定義らしきものを口にする。

「……。あー、新手的ギャグが何かですか」

「ギャグじゃないよう。次いでに言くとマンガとかゲームの話でもないし、私たちの頭がおかしいわけでもない。ちゃんと現実の話として、君は魔術を信じるかな？」

表情や口調はどこか抜けている雰囲気があるものの、月夜の目は真剣そのものだった。

「そ、そりゃあ、あつたら凄いだろうけど。でも、信じるかと言われるたらその、俺は占いだって信じない方だし……」

目を反らして答える魁人に、月夜は目の真剣さを解いて、あははーと笑う。

「やっぱり魔術師でもない人にこう言えば、そんな反応するのは当然のことだよな」

「ま、魔術師って、あんたたちは一体何なんだよ」

もはや先輩への敬意など欠片もない口調。その『先輩』二人は特に魁人の口調を気にした様子はなく、

「何って、今自分で言っただじゃない」

当然のことでも語るかのように、生徒会長・月夜詩奈は淡々と言

葉を紡ぐ。

「魔術師。そして、このメイザース学園の生徒会だよ」

.....。

短い沈黙。その後、魁人は顔を引き攣らせて無理やりおかしそうに笑った。

「ハ、ハハハ、魔術師って、そんなの信じられるわけないじゃないか。本当にそうだとしても、何で魔術師が生徒会なんかやってるんだよ。魔法学校じゃあるまいし」

「あははー、そこにはいろいろと事情があるんだよ。でも、その説明より先に私たちが魔術師ってことを信じてもらいたいかな。――だから、ちよつと乱暴なことするけど、我慢してね」

魁人とは違い本当におかしそうに笑っていた月夜の表情が再び真剣なものに変化する。彼女はポケットから小さなケースを取り出すと、その中から新品の白チヨークを一本抜き出した。

> i 2 0 8 8 2 — 1 7 3 6 <

「.....ッ!？」

その時、魁人は見た。月夜の中に、いつの間にか消えていたはずの透明な輝きがまたも出現し、それが先程以上に激しい炎となって燃え出したのだ。

「――白は光。深き闇を抜く清純なる輝き」

月夜が小声で唱えるように呟くと、親指と人差し指で挟んだチヨークの周りにも、同じ透明な輝きがオーラのように纏ったのが見えた。刹那、そのチヨークはパキリと音を立てて粉々に砕ける。

砕けたチヨークは不自然に霧散し、白い粉と化したそれが魁人の周囲の床に散らばったかと思うと、それはまるで意思を持っているかのように蠢き、それぞれが集まって床に奇妙な文字を描いていく。魁人を囲むようにして描かれた文字群はまさに魔法陣のようで、そ

の文字の一つ一つが透明な輝き——ではなく、汚れない純白の光を放っている。

それは魁人にしか見えない輝きではない。魁人以外の、普通の人にも見える現実の光だった。

「我が言の葉を持つて、雄々しき獣を捕える純白の枷と為せ——」

「ちょ……」

呪文のような言葉を口にする月夜に本能的な身の危険を感じ、魁人は椅子を倒して立ち上がる。だが次の瞬間、輝きが強さを増し、陣の中心にいた魁人は自分の体に異常を感じた。

（なっ、何だ……か、体が、動かない……）

足は強力な接着剤で床に固定されたように持ち上がらず、腕も思うように動かせない。痛みはない。息苦しくもない。ただ、動けず、倒れることも許されない。

だがよく見ると、細い糸のようなものが自分の体に絡みついているのがわかる。それは陣と同じ白い光でできているようだった。

「何だよ……これ……」

「——『ルーン』ってわかるかな？」

月夜は動けない魁人を見てニコリと笑う。

「『神秘』や『秘儀』などを意味する二十四の音素文字のことだよ。一つ一つの文字を何かに刻むだけでも意味があつて、文字を組み合わせていることでいろいろな効果を期待できちゃうの。あつ、今君に使ったのは グレイブニール 封滅の檻。『停滞』のルーンを中心にした私のアレンジ術なの」

「じゃあ、本当に……」

——これは、魔術。

信じられない。でも、これでは認めるしかない。百聞は一見にしかずというか、実際に体験してしまつては、頭で否定したくても体がそれを許さない。

「本当に……魔術師、なのか」

——だったら、凄い。

自分の常識の遙か彼方、マンガやゲームの世界にのみ存在していた者が今、目の前にいる。炎を出したわけじゃない。雷雲を呼んだわけじゃない。それでも、この陣や光の系は『魔術』としか言いようがなかった。ゲームの中にも補助系の魔法とかあるし。

「うんうん、信じてくれたみたいね——って、あれ？」

と、何かに気づいたように月夜は立ち上がった。そのまま魁人側に回ると、未だ動けない魁人に対してキスでもするように顔を近づけてきた。さっきほど近いわけではなかったが、それでも心臓の運動が急加速する。

「あの、ちよつと」

戸惑う魁人の目をじつと見詰めたまま、月夜は呟く。

「……青い」

「何？」

月夜の呟きに今までずつと表情も変えずに成り行きを見守っていた葵が反応する。どうやら名前を呼ばれたと思ったらしい。

「あ、違っわよ。葵ちゃんのことじゃなくて、この子の瞳が青いって言ったの。さっきまで普通だったのに。私が魔術を使ったからかな？」

「詩奈のせい」

「そ、そんなんじゃないわよ。封滅の檻にそんな副作用なんてないもの。これはたぶん……『魔眼』だと思う」

また呆然としている間に蚊帳の外にされかけていた魁人だが、今の月夜の言葉でハッとする。

「ちよつと待て、俺の眼が青くて魔眼？ それってどういうことだよ！ ていうか俺はいつまでこうしてりゃいいんだ!？」

「あつ、そうだね」

月夜が指を鳴らした瞬間、絡みついていた糸や陣の輝きがフツと消え、ルーンが風に煽られたようにサツと崩れてチョークの粉ごと消滅する。束縛していたものがなくなっただけで体が動くようになり、

魁人は何とも言えない開放感に包まれる。だがそれも一瞬のこと。

魁人は問い詰めるように眼前の月夜に訊ねかける。

「それで、俺の目が魔眼ってのはどういう——」

「すみませーん。まだ終わんないんスカあー？」

魁人が言いかけたその時、部屋の外から誰かがそう言ってきた。

すっかり忘れていたが、今は血圧検査（？）の真っ最中だったのだ。

あははー、と月夜が苦笑する。

「ちよつと長くなり過ぎたみたいね。——葵ちゃん、『血圧計の調子が悪いからもう少し待ってください』って言ってきてくれない？」
「わかった」

葵は頷いて外で順番を待っている生徒たちの下へ向かう。その後、向こうから『わかりました』と声が聞こえた。今ここで起こったことには気づいてないようだ。

（待てよ、何で誰も気づいてないんだ？ けっこう騒いだと思ったのに）

「この部屋には『結界』を張ってるの。だから、中で起こったことは外からではわからなくなってるの」

魁人の疑問を読み取ったように月夜は言い、残念そうに小さく息を吐いてから告げる。

「お話はここまでね。よかったら放課後、またここに来てくれる？
そしたらいろいろと教えてあげられるから。わかる範囲だけど、君の眼のこと、それに私たち生徒会のこと、あと——」

魁人は息を呑む。

「このメイザース学園の秘密、とかもね」

メイザース学園生徒会（４）

高等部第二校舎——一・二年教室棟。

隣接する職員棟よりも大きく、一階分高いその屋上に神代紗耶はいた。彼女の長く艶やかな黒髪が、屋上風に弄ばれているように踊っている。

彼女は落下防止用の柵に手をかけ、目下、この位置から丁度見える生徒会室の方を見下ろしていた。

特に何かを考えているわけではない。ただ、学園の中枢の一つである生徒会室が上から見下せるということに、自分も所属しているだけあって少し複雑な気分だった。と——

「そんなところでそんな風になっていると、まるで飛び降り自殺前みたいだねえ」

落ち着いた響きの軽口が、背後からかけられた。

紗耶は特に慌てたりせず振り返り、少しだけ首を動かして声がした階段室の上を見上げる。そこに一人の男子生徒が悠然と腰かけていた。

「やあ」

背が高く、着崩したブレザーを纏い、眉目秀麗という言葉用具現化したような顔に爽やかな笑みを浮かべる彼は、街中で友達に会った時みたいに気軽に手なんか振ってみせる。それだけだとただの好青年にしか見えないが、彼の頭髪はもれなく銀色に染まっていた。頭髪に関して特に指定のない学園だが、あんな髪の色をしているのは彼だけだろう。故に、紗耶は一瞬とかからず彼を認識した。

「何だ、あんたか」

つまらなそうに呟いた紗耶に、よっ、と彼は勢いよく飛び降りて歩み寄る。そしてやれやれと肩を竦めながら、軽薄な口調で言うてくる。

「先輩に向かつて『あんた』はないだろう。僕は一応二年生なんだから。そうだなあ……『銀先輩』って呼んでくれると嬉しいな。――あー、いや待って、昔馴染みなんだから今まで通り『銀英』って呼び捨てにされるのもそれはそれで捨て難い……」

「何言ってるのよ、馬鹿？ それより、生徒会副会長のあんたが何でこんなところで油売ってるのよ？」

彼は御門銀英。紗耶と同じく、メイザース学園高等部生徒会に所属している『魔術師』である。だからあの銀髪には魔術的意味が――あるわけではない。自分の名前に『銀』があるからというしょうもない理由で染めているだけだ。仮にも生徒の見本たる生徒会なのに、それでいいのか疑問である。

そんな彼は紗耶の問い詰めるような視線にも全く臆せず、からかうような口調で答える。

「いやあ、こんな誰もいないところで油なんか売っても商売上がったりですよ」

「……、殴っていい？」

「ごめん、痛そうだからやめて」

拳を握った紗耶に即行で謝る銀英。しかしその表情は何の危機感も抱いておらず、爽やかだがどこか軽薄な笑みを浮かべているままである。そんな彼に真っ白な視線を向けながら、紗耶はもう一度訊ねる。

「で、結局あんたは何してるわけ？」

「生徒会室でやってる会長たちの仕事を、ここで高みの見物しているのさ」

今度は茶化したりはせず、銀英は泰然と答えた。

「仕事？ ……ああ、あの血圧検査って偽った適性検査のこと。私はパスだったからどうやってるのか知らないけど」

「はは、そりゃまあ、神代家の宝刀・蒼炎龍牙を受け継ぎし姫様に

は必要ないことだからねえ。——あれはね、血圧計型の魔道具で魔力の素養を測ってるのさ。僕ら魔術師レベルの魔力を持ってる人間なら、一発でわかるんだ」

ふうーん、とだけ相槌を打って、紗耶はもう一度斜め下の生徒会室に目を向ける。何やらドタバタしているみたいだが、ここからは具体的なことはわからない。

「ん？」同じように眺めた銀英は物珍しそうに細い目を見開き、「誰か適性者がいたみたいだね。今年は紗耶だけかと思ってたけど、こりゃ意外だ」

「どうせ素人でしょ。ていうか銀英、あんた月夜先輩たちを手伝わなくていいの？」

腕を組んだ紗耶がジト目で問うと、銀英は頭を掻いて、気障っぽく笑った。

「だって面倒だし」

「このサボリ魔！」

全力で突っ込んだ紗耶だが、銀英は飄々とした態度を改めない。

「紗耶こそ、どうしてここに来たんだい？ 一年は健康診断を行っているはずだけど？」

「もう全部終わったわよ。あたしは下見。今日の放課後、ここで戦うかもしれないでしょ」

「いやあ、仕事熱心だねえ。けっこうけっこう」

飄々と言つてのけるサボリ魔。こいつは昔からこんな調子だ。

これ以上付き合うのも面倒なので、紗耶は小さく溜息をついてから、帰る、と言つて屋上を後にした。

メイザース学園生徒会（5）

「ゴホン！ 改めまして、私はこの一年三組の担任で数学担当の猪井恵理奈です。これから一年間よろしく願いますね。あつ、私の年齢は不詳なので訊いた人は地獄を見ますよ」

そんな挨拶から始まったロングHRでは、主に委員会等を決めた。魁人は特に委員会には入らなかったし入る気もなかったが、梶川は学級委員に自ら立候補していた。もっとも、もう一人立候補した男子がいて、ジャンケンという熱いバトルの末敗北していたが……。

現在は、担任の猪井先生（推定年齢二十九）に代わって決定した男女の学級委員が残りを進行している。

だがそんなことは意識の外に追いやり、魁人は先刻のことを考えていた。

（『魔眼』……か。信じ難いけど、そうとしか言えないなあ）

あの透明な光。この眼が魔眼だとすれば、一体自分は何を見ているのだろうか？ 少なくとも魔術と何らかの関係があることは間違いないと思う。

ふと、斜め前の席にいる神代紗耶を見る（人間観察は趣味じゃないが）。彼女は相変わらず他よりも強い、そう、あの月夜詩奈と同じくらいの光を持っていた。

（もしかしてあいつも、魔術師なのか？）

魔術師。彼女たち——少なくとも月夜詩奈——はそう呼べる存在だ。

あの後はずいぶん血圧も測らず帰らされたが、思い返すと白昼夢でも見ていた気分だ。だが、生徒会室での出来事が夢でも幻でもないことは体が覚えている。目に焼きついた光景、動けなくなった感覚、どれも鮮明に蘇ってくる。

自分の眼、例の光、魔術師の生徒会、そして学園の秘密とやら。

知りたいことが山ほどある。

やはり、もう一度あの『魔術師』たちに会わなければならない。
そう決心したところでHRは終わり――

そして放課後がやってきた。

「学級委員――クラスのトップになれなくて傷ついたオレの心をケアするために、レッツ・ナンパだ！　行くぞ、魁人！」

「一人で行け」

放課後になった途端に接触してきた梶川の誘いを魁人は打てば響くような速度で断った。

今日は午前中で終わりなので、クラスの大半の生徒は部活動見学などに行くのだが、魁人には別途の用件がある。

第一校舎の最上階――生徒会室にもう一度行かなければならない。もちろん強制ではないし、怖いという気持ちも多少はある。が、それでも自分は自分の眼について知りたい。知らなければならぬ。「冷たいこと言うなよ。お前けっこう顔とかイケてる方だぜ。ま、オレ様ほどじゃないけどな」

何も知らずにお気楽なやつだ、と魁人は思うも、事情を話す気は毛頭ない。

「だから一人で行けつて。俺は……ちょっと用事があるんだ」

一瞬何と言えいいか迷ったが、適当にそう言って教室を出ることにした。だが、言い出したらしつこい代名詞たる梶川邦明は、逃すまいと金魚のフンのごとく引つついてくる。

「なあなあ、用事って何だよ。お前は部活なんてやるようなやつじゃないし、バイト探しは一緒にする約束だろ。内緒にするなんて水臭いぜ？　オレたち親友だろ。もし何かに困ってんなら助け合うべきだ」

「助け合いが必要なことじゃないし、お前には関係ないことだよ」
そうだ。自分とは違って普通の人間である梶川は関係ない。だから、これから向かおうとしている常識から外れた世界に引き込むわ

けにはいかない。

次第に魁人は早足になる。多少遠回りしてでも巻かなければ……。

「はっ！ そうかわかったぞ！ さてはもう女ができたんだな！

言え！ 何子さんか何美さんか何香さんなのか、一体どこのお嬢様なのか、さあ、この梶川お兄さんに教えなさい！」

「誰がお兄さんだ！ そんなんじゃないからついてく——」

廊下の角を曲がろうとしたその時、ドン、と肩が誰かとぶつかった。

「ああん？」

苛立ちの混じった低い声が聞こえ、魁人は恐る恐るぶつかった相手に目を向ける。そこにいたのが両手いっぱい資料を抱えた美少女なら、フィクションでよくあるようなラブやコメ的な展開だっただろう。が、その声はそういう世界からはかけ離れたものだった。

ぶつかった相手は魁人より少し背の高い恐らく上級生で、オールバックにした髪に鋭い目つき、耳にはピアスをつけ、学園内にも関わらず堂々とタバコをふかしている。梶川とは違い、彼の纏っている雰囲気は俗に言う『不良』だと物語っている。

さらに彼を取り巻くように、同じような空気を纏った方々が数人視線だけで人を殺せそうな目で睨んできている。

周りにいた他の生徒たちの注目が集まる。

「おい、あれ三年の貝崎^{かいさき}じゃねえか」「何でここに？」「誰か絡まれてるぞ」「昨日も一人無一文にされた拳句ボコボコにされたらしいぜ」「助けた方がいいのかな？」「先生呼ぶ？」「やめとけよ」「今度はお前がやられるって」「怖い怖い」「触らぬ不良に被害なしだ」

そんな助けようとはしない野次馬たちからの恐ろしい言葉で、魁人の血の気は一気に引いた。

……これは、何かやばいかも。

「え、えーと……、すみません」

魁人は物凄い勢いで冷や汗をかきながらとりあえず頭を下げて謝

った。それで何事もなく済むことを望んだが、とてもとてもデリケートな人種である不良たちが見逃してくれるはずもなく、魁人は彼らの中心と思われるオールバックの青年——貝崎に胸座を掴まれて強く引き寄せられる。

「おいコラてめえ、まさか人にぶつかつてすみませんだけで済むと思つてんのかあ？」

「いや普通は済むかと……」

魁人はヘルプの視線と一緒にいたはずの梶川に向ける。が、彼は忽然と姿を消していた。見ると、野次馬たちの向こうにダッシュしている後姿が……。

（あんの薄情者おお！ 助け合ふべきだと言つときながら自分だけ逃げやがつてええ！）

本気で縁切りを考える魁人に、貝崎はタバコをくゆらせながら楽しそうに告げる。

「丁度、今日の力王を探してたところなんだよなあ。だからお前、ちょっと俺に付き合えや」

口元をニイと歪める貝崎。この人数相手に抵抗などできるわけもなく、魁人はそのまま引きずられるように連れ去られてしまった。

メイザース学園生徒会（6）

メイザース学園高等部には複数の建物が林立していて、ほとんどが渡り廊下で繋がっている。第二校舎が一・二年生、第三校舎が三年生の教室棟となっていて、いくつもある特別棟の中には恐らく一生入ることのない場所もあるだろう。

魁人が連れてこられたのは第二校舎の屋上だった。ここは不良たちのテリトリーと化しているらしく、一般に解放されているのにも関わらず普通の生徒が近づくことは少ないと聞く。

よって、見渡すかぎり誰もいない。魁人と、貝崎とかいう不良を除いては。

「かはっ!？」

魁人はコンクリートの床に乱暴に叩きつけられて呻いた。

「さてと、まずは有り金ぜえーんぶ出してもらおうか。痛くて怖い思いをしたくなければな」

指をポキポキと鳴らして脅してくる貝崎を、魁人は歯を強く噛み締めて睨め上げた。

これはいわゆるカツアゲとかいうものだろう。学園内で行うなど、もし教師に見つかったら最低でも停学は免れない。ただの馬鹿か、それほど余裕があるのか、見た感じ馬鹿とは思えないので恐らく後者だろう。証拠に、貝崎を取り巻いていた不良仲間は全員階段室で見張りをしている。

だから一応、今はこの不良のリーダーと二人つきり。対等に言えば一対一だ。

魁人だって喧嘩の経験が全くないというわけではない。経験は向こうの方が上だろうが、一対一ならまだ勝ち目はある。

だが、たとえ目の前の一人を倒したとしても階段室には五人ほどいるわけで、二人ならまだしも、三人以上となると勝てる確率はゼロどころかマイナス方向に急降下である。

（――どうする）

どうすれば、ここから逃げれる？

「おい、早くしろや。まさか、金持ってきてませんかと言わねえよな？　そうなるとめえをサンドバックにした後で他の奴を探すことになるが」

どうせ金を渡してもサンドバックにされるに違いない。こいつはそういうやつだろうし、さっきの野次馬たちの会話からも力モにされた者の末路は想像できる。

（こうなったら、もうやるしかない！）

金は出さない。サンドバックにもなるつもりはない。戦う振りをして、隙について逃げよう。見張りの不良たちは、まあ一気に駆け抜ければあるいは逃げ切れるかもしれない。幸い、足と体力には自信がある。

魁人は立ち上がると、貝崎を睨んだまま身構えた。

「あん？　何だ、やる気か？」

「ああ、そうだよ。あんた一人くらいなら、俺にだってどうにかできる。少なくともあと二人は連れておくべきだったな」

強気に言つも、正直勝算は低いだろう。騒いでいるうちに見張りの不良たちに気づかれたらアウトだ。その辺りを考えると、足とか今にも震えそうになる。

すると、何が面白かったのか、貝崎はいきなり笑い出した。

「ハハハハッ！　あー、それならいいんだ。いや寧ろその方が面白い。元々金盗るのはついだったからな。まだやる気のある奴に力を使ったことがなかったんだ。今まで力モにしてきた奴らは、俺を見ただけでビビっちまったからな。だから、できるだけ長持ちしてくれや」

「力？　お前、何言って……！？」

訝しげに眉を顰めた魁人の目の前で、貝崎がズボンのポケットから折り畳み式のポケットナイフを取り出した。丸腰かと思って覚悟を決めていたが、そううまくはいかないらしい。

「おまつ、ちょ、ナイフはなしだろ!？」

一瞬で覚悟が崩れ去り、逃げ腰になる魁人。

「フン、別にこいつで刺すわけじゃねえよ。だがまあ、刺された方がよかつたってことになるかもしれねえがな!」

下卑た笑みを浮かべると、貝崎は手首を軽く振ってポケットナイフの刃を展開する。

刹那、魁人の脇を不可視の何かが通り抜け、後ろの落下防止用のフェンスを突き破った。

「な……」

(――何だ、今のは!?)

貝崎がナイフの刃を出した途端、ビュオツ、と見えない衝撃波のようなものが自分の横をもの凄い速さで通過した。

いや、見えないわけではなかった。少なくとも、魁人の青く染まった瞳はそれを捉えていた。

例の輝きだ。月夜が魔術を使った時のように、それがあのナイフと、本来見えないだろう何かに纏わりついていたのだ。しかも貝崎の中には、あの透明な炎が宿っているのが今もはっきりと見える。ということとは――

「お前……『魔術師』なのか？」

「はあ？」

しかし貝崎の反応は『何言ってるんだこいつ馬鹿じゃね?』とでも言うようなものだった。

(違うのか?　じゃあ、俺が見ている光って一体……!?)

「魔術師……か」貝崎はナイフを畳みながら、「ハハハ、確かにこの力は魔法みてえなもんかもな。実際俺もこの力が何なのかかわかんねえんだけどよ。まあ、次からそう呼ぶことにするわ」

貝崎がナイフを開くと、疑問を抱く魁人の横をもう一度あの衝撃が掠る。フェンスに二つ目の穴を開けたそれに、魁人はゾツとした。

「これ……『風』か」

「正解。——つーわけで、今度はあてるぜ。頼むから一撃で終わ
ってくれるなよ！」

そんなの不可能だ。風の弾丸は鉄のフェンスを突き破ったのだ。
どう考えてもあたれば骨の一本や二本など簡単に砕けて下手すりや
昇天するかもしれない。

（やばい、マジでこれやばい！）

再び刃が開かれる。その瞬間、やはり魁人にしか見えない輝きを
纏った風が射出される。見えるならかわせる、そんな甘い速度では
ないし、貝崎との距離は五メートルと離れていない。

光纏う風の衝撃波が迫りくる。

（ああくそ！ 見えるのに何もできねえってどんだけ役立たずなん
だこの『魔眼』ってのは！？）

いつそあんな光なんて見えなかったらこんな恐怖を抱かなかった
かもしれないのに。このままでは、確実に死ぬ。それは、そんなの
は絶対にごめんだ。

あんな風など消え失せればいい、そう思った刹那、魁人の両眼が
強い煌めきを放った。蒼海のごとく青い煌めきは数瞬と持たず空
気に溶けたが、すぐに異変は起こった。

もう眼前まで迫ってきていた風の衝撃波の光がぐにやりと歪み、
そのまま捻じ切られるように飛散してしまったのだ。衝撃は力を失
い、後にはそよ風が魁人の体を撫でるだけである。

「は？」

貝崎と魁人は同時に間拔けた声を吐いた。一体何が起こったの
か、貝崎はもちろん魁人にもさっぱりわからなかったのだ。

——不発？ ——失敗？ ——エネルギー切れ？

何でもいい。とにかく助かった。だが——

「おいおいおいおい！ 今てめえ何しやがった？ まさか俺の

『魔術』ってやつを打ち消したのか？　ハハッ、いいじゃないか。
お前も俺と同じってことか？」

「あれが魔術ですって？　笑わせないでよ」

その時、どこかで聞いたことのある凜とした声が響いた。

メイザース学園生徒会（7）

魁人と貝崎はほぼ同時に声のした階段室の方向に視線を向ける。すると、そこには一人の少女が長い黒髪を風に靡かせて歩み寄ってきていた。

魁人はもう流石に覚えている。見間違えるはずがない。クラスメイトで、初めてあの『炎』が見えた人物――

「神代……紗耶……」

（何でここに？ いやそれより、どうやってここに？）

唯一の出入り口である階段室の中には、貝崎の不良仲間が見張っていたはずだ。それには貝崎も疑問に思ったようで、頭を掻きながら苛立ちを全面に現して口を開く。

「おいおい、あいつらは何やってんだ。誰か通しちまったら見張りの意味がねえだろうがよ」

「あんたの仲間ならちゃんと見張りしてたわよ。襲いかかってきたもんだから、全員あたしが黙らせてあげたけどね」

「ああ？ ……ちょっと待てよ。五人もいてこんな女一人にやられたってか？ 冗談だろ？ そりゃ笑い話にもならねえって」

「事実よ。もしかしたら今頃は風紀委員に回収されてるかもね」

と、立ち止まった紗耶がチラリと目だけ動かして魁人の方を見た。だが特に何か言うでもなく、再び貝崎に視線を戻すと、淡々とした口調で告げる。

「貝崎豪太だっけ？ あんたが開花した力を悪用してることは確認したわ。よって、あたしら生徒会による処分が決定。痛い思いしたくなければ大人しく投降することね」

完全にながらの言葉に、貝崎の額がピキリと変な音を立てた。

「ハッ、生徒会だか何だか知らねえが、口には気をつけるよ。俺は女だからって手加減できるほど器用じゃねえんだ」

貝崎は畳んだままのナイフを銃口を向けるように彼女に翳す。が、

彼女は眉一つ動かすことなく、余裕さえ感じられる表情でさらに挑発的な言葉を投げかける。

「奇遇ね。あたしも雑魚だからって容赦しないわ」

彼女の言葉に魁人はヒヤリとした。『雑魚』なんて言葉を超デリケートな不良様に言っちゃうと一瞬で怒りの沸点をオーバーするといふのに……。案の定、貝崎の額には青筋が増加していた。

「ちょ、何言ってるんだよ、お前！」魁人は思わず叫んでいた。「こいつの力見てんだろ。もし俺を助けようとしてるんなら別にいいから、早く逃げろよ！」

たとえ彼女が不良五人を一度に倒してしまうほどの達人だとしても、女の子に助けてもらおうというのは自分のささやかなプライドに傷がつく。

だが、紗耶はその辺に落ちている石ころにでも向けるような、そんなどうでもいいという視線で魁人を見ると、どこか億劫そうに口を開く。

「別にあんたを助けに来たわけじゃないわよ。生徒会の仕事のついでよ、ついで。ただの結果的なものでしかないんだから変な期待は持たないことね。それにそっちこそ離れてた方がいいわよ？ アレは雑魚だけど、あんたを戦いに巻き込まない保障はできないから」

「!？」

その瞬間、彼女の中にも今朝見た時と同じ透明な炎が宿った。――否、同じではない。今朝の時よりも荒々しく、猛々しく、桁違いな力強さと存在感を感じる。

――わかる。アレは貝崎なんかよりもずっと、魔術師である月夜の中に見た『炎』に近い。いや、近いどころか通り越している。

「本物の、魔術師……」

確信を持ってそう思った。それに、彼女は『生徒会』と言っていた。この学園の生徒会は魔術師だと、魁人は未だに信じられないが知っている。彼女――神代紗耶は間違いなく魔術師と呼べる者なのだろう。

彼女がどんな魔術を使うのかは知らない。だが、彼女が敗れる姿を魁人は想像できなかった。

「さっきから人のこと雑魚雑魚って、てめえ——」

既に額を青筋で埋め尽くした貝崎がナイフを持つ手に力を込め、叫ぶ。

「ざけてんじゃねえぞこらあッ！」

ナイフの刃が開かれ、常人には見えないはずの衝撃波が紗耶に向かって飛んだ。しかし、紗耶はその場を動こうとしない。

代わりに左掌を胸の辺りで立てたかと思うと、その掌と重なるように小さな方陣が展開される。すると、陣の中心である掌から黒い棒状のものが飛び出した。彼女は右手でそれを掴むと、まるで居合でもするような構えをし——

次の瞬間、彼女の前に現れた蒼い炎が衝撃を呑み消した。

貝崎は驚愕の表情をしている。魁人も何が起こったのかわからなかった。ただわかるのは、紗耶が右手に握っている物、それが蒼い炎を刀身に纏う日本刀だということだ。

漆黒の柄に、金色に縁取りされた鍔、見事な反りの刃には銘文と思われる文字列が象嵌で施されている。元から国宝級と言われても信じてしまうほどの荘厳な業物に、蒼い煌めきを花びらのように散らす炎を纏うことで幻想的なまでに美しく見える。

「一応穩便に話し合いしてみたけど、やっぱり馬鹿相手だと無駄じゃない」

どう見ても挑発してたじゃないか、と思うも魁人は黙っていた。

「ハ、ハハ、こいつは面白えなあおい。アレか、今日は俺的ライバルの大量発生日か？ 他にこんな力を持つてんのは本摩の野郎だけかと思つてたがな。……いや、そうか。あいつが停学になつてんのはてめえらの仕業つてわけだな。だがな、俺は本摩のようにはいかねえぜ！」

貝崎は何度も刃の開閉を繰り返し、その動作によって生み出される風の弾丸を連射する。だが、そのことごとくを彼女は燃える刃で斬り伏せた。

「な、何い!？」

「あんたみたいなのとライバルになるなんて最悪。魔術師として末代までの恥だわ。いいわ、次元の違いってのを見せてあげる」

日本刀の刀身に刻まれた文字が炎の中で金色に輝く。彼女がその日本刀を床に半円を描くように振るうと、まるで紙に描いたように蒼い炎が軌跡として残り、さらにその先端が伸びて反対側と繋がり、紗耶を中心とした真円となる。

そんな神秘的な光景に、魁人も貝崎も言葉を失って魅入っていた。しかしそれも一瞬のことで、彼女が勝ち誇った笑みを浮かべると同時に、その魔法陣のような炎の円から、見ただけでは数えきれない量の蒼い火球が飛び出した。

それらは人魂のごとく宙に浮かび、紗耶を太陽とする惑星のように周囲を公転し始める。

「最初に言ったわよね？ 大人しくしなければ痛い目見るって。正確には熱くて痛い目だけど」

紗耶は刀を天に突き刺すように翳す。この後、周りを飛んでいる火の玉が一体どうなるのか、容易に想像できた。

「……い、いや、待てよ、おい、やめ——」

貝崎は既に先程までの余裕を失っていた。恐怖に目を見開き、顔を皺くちやにして命乞いしようとするが、紗耶は無情にも刀を振り下ろす。

その動作で一斉に、一切の容赦もなく、圧倒的なまでの力をもって、炎の流星群は貝崎に襲いかかった。

「あああああああッ！ やり過ぎやり過ぎ紗耶ちゃん待って
スト——ッブ——!」

同時に、そんな絶叫が屋上の隅々まで響き渡った。

メイザース学園生徒会（８）

結果的に貝崎は気絶しているものの、無傷だった。あの火球の群れは全てわざと外されており、彼が倒れている周りの床に黒い斑模様を描いただけで終わっていた。

あれが神代紗耶の『魔術』。貝崎の力と比べたら格が、いや、次元から違うほど圧倒的な強さだった。

「もう、紗耶ちゃん！　できるだけ穏便に言ったじゃないの。あれでも一応この学園の生徒で、私たちは生徒会なんだからね」

その炎の刀と魔術を使う神代紗耶は、現れた絶叫の主——月夜詩奈の説教をくらっていた。月夜は一人のようで、魁人が知るもう一人の生徒会メンバーである藤林葵の姿はない。

「えっと、その、今度は燃やしてないからいいかなあ……なんて思ったり」

「いいわけないでしょう。階段のところにいた人たちはみんな病院送りじゃない。ちゃんと話し合いしたの？　挑発的な言葉とかかけてないわよね？」

「……うう……」

貝崎と対峙していた時の凜とした姿はどこへやら、凶星を突かれた紗耶は月夜から目を反らして口籠る。彼女なら生徒会長ですら踏みつけてしまいそうなイメージを魁人は勝手に抱いていたが、これは意外だった。

月夜は風に揺れるウェーブの髪を手で押さえ、小さく息をつく。

「まあ、終わったことだからしょうがないわね。ところで銀くんは一緒にじゃなかったの？」

「一緒にじゃないですよ、あんなやつ。どうせどっかで遊んでるに決まってるわ」

「そう、また……。銀くんは紗耶ちゃんのこと一番知ってるから任せてるのに」

月夜の言葉で嫌なことでも思い出したように紗耶は唇を尖らせる。そんな彼女たちの下へ歩み寄り、魁人は割り込みづらいつ感じながらも意を決して声をかけた。

「あの、月夜先輩」

すると、こちらを向いた月夜は曇っていた表情に安堵の微笑みを咲かせる。

「あ、やっぱり魁人くんだったのね。あのね、一年生が貝崎くんに捕まっただって聞いたから、もしかしてって思ってた心配してたのよ。よかった、無事で」

「え？ あ、はい、そこはまあ何とか」

本当に心の底から安堵したような笑顔を見せる月夜に少々どぎまぎしつつ、魁人は倒れている貝崎と、彼を倒した紗耶を交互に見てから訊ねる。

「それより、これって一体どういうことなんですか？」

貝崎とかいう不良が使った力のこと、その貝崎を打ち倒した紗耶が言った『生徒会の仕事』とやら、冷静になって考えれば考えるほど混乱してくる。小学生に大学の問題を解けと言っているようなものだ。

月夜は向こうで失神している貝崎を見やる。

「これが、この学園の秘密よ」

「秘密？」

「うん。このメイザース学園はね——」

「ちよつと待って」

紗耶が説明を始めようとした月夜を遮り、魁人の顔を警戒するようにキツと睨んできたかと思うと、右手に持っている日本刀——炎は消えている——を突きつけてくる。

「あんたは何なのよ？ これは一般生徒が踏み込んでいいことじゃないんだけど？ ただの被害者なら何も聞かずにさっさと帰ってくれない？」

「い、いや、俺は、その……」

殺されることはないだろうが、眼前に突きつけられた日本刀には死の恐怖を覚えてしまう。加えて紗耶の殺気のような気迫がピリピリと全身に突き刺さり、うまく声を言葉にできない。

「いいのよ、紗耶ちゃん。ほら、生徒会室で言っただでしょ？ 魔眼持ちの一年生。彼がそうなのよ。だからそれ危ないから下ろして下ろして」

言葉を紡がないでいる魁人に代わって、月夜が説明してくれた。

「魔眼持ち？ こいつが？」

言われた通り紗耶は刀を下ろしたが、怪訝の混じる威圧的な視線を向けてくることは変わらない。紗耶は観察するように魁人の普段と同じ色に戻った眼を見詰め、そして思考するように顎に左手を持つていく。

「じゃあもしかして、あの時のアレは不発だったんじゃないかってこいつの力……」

彼女のその呟きは、聞き取れないほど小さかった。

「え？ 何か言った、紗耶ちゃん？」

「ううん、何でもないです」

紗耶は首を振ると、変らぬ視線で魁人をまっすぐ見て、訊いてくる。

「で？ あんたは何が見えんのよ？」

「ああ、えーと、うまく説明できないけど——」

魁人は自分の眼に映る透明な輝き——普段見慣れている光球型、今日初めて見た炎型や血管のような回路状のもの、チョークやナイフ、風にすら纏っていたオーラのもの、この学園の『見える人』の多さ、生まれつき見えること、それら全てを包み隠さず話した。

ここまで自分の眼について吐露したことはなかった。親以外に打ち明ける相手がいなかったし、言ってしまうえば冗談と思われるか、最悪気持ち悪がられて避けられてしまつと昔から親に言われてわかっていただけからだ。

何か、話したらちよつとスツキリした。

「人、もしくは物の中に宿る不思議な光。私たち魔術師はそれが特別強い、かぁ。それって、自分にも見えたり、常に見えちゃったりしてるの？」

「いえ、自分に見えたことはありませんし、見ようと思わないかぎり是他の人にも見えません。あ、でも炎とかは突然見えたりするけど……」

言つと、月夜はしばらく何かを考え込むように、うーん、と唸り、そして考えを述べる。

「やつぱり、『魔力』じゃないかな？ 私たちが魔術を使う時は、基本的に魔力を高めてそれを術式に流し込むの。その高まった状態の魔力に魁人くんの眼が自然と反応してるんだと思う。魁人くん自身の魔力は映らないみたいだけど、高められ、消費される魔力は炎に見え、そしてそこから供給される魔力が魔術回路や媒体、術自体にも見えるんだよ、きつと」

「魔力……やつぱり」

想像してなかったわけではないが、それだとどうも釈然としないのはなぜだろう？ 違う答えを望んでいたわけではない。寧ろ納得したのだが、何か胸のもやもや感が消えない。

見えているのは魔力でいいのかもしれない。でも、まだ何かが隠れている気がする。

——まさか俺の『魔術』ってやつを打ち消したのか？ ——

貝崎の言ったことが引つかかる。あれは不発じゃなかったのだから。

その時、紗耶が持っている日本刀に蒼い炎が纏った。その瞬間、いや直前にはもう、魁人の瞳は澄んだ青色に染まっていた。

「な、何だ、いきなり!？」

貝崎が復活したのか、と思ったがそうではなかった。紗耶は燃える刀を携えたまま魁人との距離を縮め、生徒会室で月夜がやったよ

うに顔を近づけてくる。まるでキスでもするかのように背伸びしているが、彼女の仏頂面や日本刀がそんな雰囲気完全にぶち壊していた。

「本当だ。遠くからじゃわかりにくいけど、確かに青くなってるわ。……ちよつとキレイかも」

一瞬、本当に一瞬だが、自分を見る彼女の表情が緩んだ……ように見えた。

顔を赤くした魁人は弾かれたように後ろに飛ぶ。

「は、離れるよ。あんま見んじゃねえ」

「何よ、別にいいじゃない。見てて減るもんなんて、せいぜい魔眼に使われる魔力くらいでしょ。それとも何？ あたしの顔が近いから照れてんの？」

「そ、そんなわけないだろ！」

確かにそれもあるが、何より刀の炎が近くにあるだけで焼けそうなほど熱いのだ。よくそんなものを持つていられるなと思うが、そこは魔術師だからと適当に自分を納得させる。

遠回しに『魅力がない』と言われた紗耶はムツとするも、とりあえず刀の炎を消した。同時に彼女の魔力も消え、スウッと魁人の眼からも色が落ちる。

「フン、あんたみたいな素人が魔眼なんて宝の持ち腐れね。見えるだけで役に立たってないんじゃないの？ 馬っ鹿みたい」

「何だと！ 確かに何の役にも立たないけど、もし俺に喧嘩売ってるなら買ってもいいぜ。ただし魔術と武器は禁止な」

「あんたに合わせる必要がどこにあるのよ？」

睨み合う二人。互いの視線がぶつかる地点で火花が散るのを幻視できそうな、そんな微妙で危うい空気を和ませるように、月夜が明るく笑った。

「あ、あははー。そ、そういえば紗耶ちゃんと魁人くんって同じクラスだと思っただけど、もう教室とかでお話したことあるの？」

「「あると思いますか？」」

しかし同時に振り向いて同じ言葉を八もらせてくる二人に、月夜の笑顔は苦笑に変わった。

「月夜先輩、俺の眼のことは、まあ一応何となくわかりました。それで――」

これ以上睨み合いを続けても仕様がなない。本当に魔術で焼かれるのも嫌なので、魁人は話を再開することに決めた。

「学園の秘密というのは？」

月夜は苦笑から少々真剣な表情に切り替えて語り始める。

「えーと、何から話そっか……うん、まず魔力ってのはね、才能と同じで先天的なものなの」

何か学園とは関係ないような気もするが、魁人は黙って聞くことにした。紗耶も今度は口を挟んでこない。

「だからね、たとえ魔術の才能や知識があっても、自分の中に魔力がなければどんなに訓練しても魔術なんて使えない。つまり、生まれ持った才能と魔力、それに知識と経験も加えて初めて魔術師って呼べるの」

「えーと、まさか本当にこの学園は魔法学校とかそういうのでしたってことですか？」

「そんなわけないでしょ」

どこか馬鹿にした感じの口調で言ってくる紗耶に少しムカつくが、ひとまず無視する。

月夜が続ける。

「あははー、確かに外国に行けば魔術学校っていうのはあるし、実は私もその出だったりするんだけど、まあそれは置いて。このメイザース学園はね、世界の魔力が循環している場所の上に建っているの」

「は？ 世界の、魔力？」

「そう。私たちはそれを、地球の生命力を『地脈』と言うのに対して『魔脈』って呼んでるの。普通の場所だと内外に影響がでないように膜みたいなもので護られてるんだけど、ここは特別その膜が薄

みたいなの。だからこの魔脈が原因で、さっき言った先天的に魔力を持つてる人や、魔術とかに興味を持っているような人々を自然と引き寄せてしまうわけ。魁人くんは、何でこの学園に来たのかちやんと言える？」

「……」

——言えない。今朝も梶川に言われて少し考えたが、そこで思いついた理由は自分を納得させるために後から決めたものだ。一人暮らしたければ他でもできる。ここより自由な学校だっていくらでもある。それなのに自分はメイザース学園を選んだ。その決定的な動機が全く思い出せない。言えるとすれば『何となく』の一言だけだ。

「でもそれだけだと、こんなに魔力を持っている人たちが集まったりはしない。魔脈の影響は私たち魔術師にとっては別に問題ないんだけど、問題があるのは、魔力を持ってない人に魔力を与えてしまうことなの。個人差はあるけど、だいたい一年もすればほとんどの人に微弱ながらも魔力が宿る。魁人くんが見たのは、上級生とか中等部からの生徒たちばかりのはずよ」

魁人は思い出す。登校時はどうか知らないが、この魔眼で自分の教室を見た時、そこにいる神代紗耶の他に魔力の光を持っていた者は少なかった。

「えーと、実際にそうだととして、それに何の問題があるんですか？」

「あの不良の力は見たんでしょ？ あれが問題点よ。自分で気づきなさい」

答えたのは紗耶だが、説明が足りないどころか説明にすらなっていないため、月夜が改めて言い直す。

「えっとね、魔力は持つてるだけでいろんな能力がついたりするの。中には魔術っぽいものから、超能力みたいな力を身につける人もいる。もちろん能力は魔力の強弱に比例して、大半の人はちよつと運が強くなったり、走るのが速くなったり、物覚えがよくなったりと微妙な力ばかりだから、気づかず卒業しちゃってそのまま魔力を

失う。まあ、そういう人は別にいいんだけど、貝崎くんみたいに強い能力が発現して、それに気づいちゃった人たちが問題なのよね。ただの一般人だった人間が、突然そんな力を得たらどうなるか、大体想像つくかな？」

魁人は無言で頷く。何でもなかった人たちがいきなり特殊能力を身につければ、『自分は特別な人間なんだ』と思って優越感に浸るだろう。そして力に溺れて何をしでかすかわかったものじゃない。少なくとも、貝崎のように私利私欲に力を使うことは間違いないだろう。自分だって、そうならないとはかぎらない。

無言のままそんな風になった自分を考えていると、月夜が首を傾げてくる。

「信じられないかな？」

「いえ。……確かに信じ難い話ですけど、実際に見てしまったわけですから」

それだと、貝崎の態度や魔術に関して無知だったことも頷ける。「うんうん、すぐに信じてもらえてよかった」月夜は嬉しそうに笑う。「でね、わかった通り、そういった力を持つと、魔力に魅了されて悪いことを始める人が出てくるの。そんな彼らの暴走を止め、学園の秩序を魔術的に守るのが、私たち生徒会魔術師の役目ってわけ」

「生徒会の、魔術師？ 何でまたそんな——」

ぐおおあああああああああああああああああああああああああ
あああつつつ！

その時、空気を激しく振動させるような雄叫びが上がった。

魁人の魔眼が青く反応する。紗耶は無言で刀を構えた。

「なっ、あいつ……」

声が出た方を向くと、今まで気絶していたはずの貝崎が立ち上がり、狼のごとく天に向かって吠えているところだった。

「あいつ、様子がおかしいか？」

貝崎に理性を感じない。白目を向き、上半身は前のめりになり、まるで怨霊のように薄ら寒い嫌な気配を撒き散らしている。

「魔力が暴走してるのよ。突然力を得た素人はあたしらみたいに魔力をちゃんと制御できないから」

「マジかよ……」

やはり魔力は、魁人のような生まれつきの例外を除けば、素人にとって相当な危険物のようだ。魁人の魔眼に映る彼の魔力の炎は、宿主を蝕む嵐ように激しく荒れている。

「月夜先輩、あんな状態でも平和的に話し合っんですか？」

紗耶は振り返らないまま皮肉げにそう訊く。彼女の表情は余裕そのもので、焦りや恐れなどなく、どこか好戦的な笑みさえ浮かんでいた。そんな彼女に、月夜はやれやれと肩を竦める。

「ああなっちゃうとしょうがないわ。でも殺しちゃダメよ。これは人命救助なんだから」

「わかってます！」

紗耶が承知した瞬間、暴走する貝崎は咆哮を上げて襲いかかってきた。紗耶は刀に魔力を送り、刀身に蒼い炎を灯して魔性と化しつつある貝崎を迎え撃つ。

魔力のせい、人を軽く逸脱した獣のような動きで距離を縮めてくる貝崎。対する紗耶は炎の魔法陣を、自身を中心に描いていく。

そしてその陣が完成しようとした刹那――

――紗耶の隣を、何か小さな白い物体がもの凄いスピードで通り過ぎた。

え？　と思うのも束の間、白い何かは猪突してくる貝崎の額に吸い寄せられるように貼りついた。それは、紙だった。神社にでもあるような、一筆書きした感じの達筆な文字が書かれている長方形の御札である。

「――発ッ！」

短い声が響く。それは紗耶でも月夜でも、もちろん魁人の声でも

ない。

後方から聞こえたその声に反応したのか、貝崎に貼りついた御札が爆散した。ただ紙が破れ千切れたわけではない。本当に火薬を爆破した時みたいに、熱と煙と衝撃を生み出している。

爆発をもろに受けた貝崎は体中から煙を吹いて崩れ落ち、そのままだ動かなくなる。たぶん生きているだろうが、魁人はそれを確認することなく、体ごと後ろを振り向いた。

階段室のドアの前に、二人の人物が立っている。一人は血圧検査の時に会った長いポニーテールにほっそりとした体つきの少女——藤林葵で、もう一人は派手な銀髪をした背の高い男子生徒だった。彼は美形で爽やかな容貌を台無しにするニヤニヤとした笑みを浮かべ、忍術でも使う時のように胸の前で奇妙な印を結んでいる。

魔眼を持つ魁人は一目でわかった。貝崎を倒したのは、内に炎を宿している彼だ。

「銀英！」紗耶が叫ぶ。「あんた、あれはあたしの獲物——じゃない、仕事サボって今まで一体どこで何してどうやって遊んでたのよ！」

「いやあ、ほら、ヒーローはヒロインのピンチに華麗に参上するものじゃない？」

紗耶の怒号をそよ風のごとく受け流し、銀英と呼ばれた男子生徒は葵と共にこちらへ歩み寄りながら、飄々した口調でそう言った。

（……こいつも生徒会、そして魔術師か）

紗耶や月夜の反応を見るに、恐らくそうなのだろう。

「銀くん、私と紗耶ちゃんのどっちが銀くんのヒロインなのかな？」

「もちろん両方♪」

「うっさい黙れ！ こっちは主にあんたとこの魔眼持ちのせいだよつとイライラしてんのよ。だから今すぐ刀のサビにして燃やしてやるわ！」

勢いに身を任せ、紗耶は炎の消えた刀をブンブン振り回して銀英に襲いかかるが、彼はその達人級の剣捌きをヒョイヒョイと難なく

かわしていく。

「何であいつの苛立ちに俺も入ってるんだよ。ていうか、アレ止めなくていいのか？」

月夜と葵を見るも、二人とも彼女たちを止めるような素振りは見せない。それどころか完全に無視し、葵が月夜に抑揚の薄い口調で告げる。

「詩奈、風紀委員呼んできた。いつもの指示でよかった？」

「うん。オーケーよ、葵ちゃん」

月夜が頷いた時、階段室から三、四人の男女が現れた。彼らはこちらに向かって会釈すると、倒れている貝崎に駆け寄り、手慣れた手つきで彼を担架に乗せる。そしてキョトンとする魁人の視界を横切り、彼らは担架に乗せた貝崎をどこかへと運んでいってしまった。あ、あいつらは？」

「風紀委員だよ。簡単に言えば私たちの部下ね。と言ってもみんな魔術師じゃなくって、貝崎くんみたいにこの学園で魔力が開花した人たちから構成されてるの」

「え？ でも今日のHRで風紀委員も決めてたような……」

「うん。だから、裏風紀委員とでも言うべきかな。貝崎くんみたいな自分の魔力に酔った人の末路は、彼らのように風紀委員となつて生徒会のサポートに回るか、『忘却部屋』っていう魔術的処置の施された部屋で魔力を封印し、それに関わる記憶を改変するかの二択なの」

ということとは、あの貝崎も風紀委員に……なりそうにない。何となく、そう思う。

「あいつは忘却部屋行き」

葵が無表情のまま結論を口にした。と、今気づいたが、彼女は両手で何かを抱きしめている。

それは背中を青い毛、腹を白い毛で覆われた、円らな赤い瞳をした子犬の……ぬいぐるみ？

「わう！」

——本物だ。

何の種だろう。そもそもこんな青い毛の犬なんているのだろうか。突然変異とか？

「何ですか、その犬？」

とりあえず気になったので訊いてみる。すると、葵の無表情だった顔が僅かにムツとした。

「リクは犬じゃない。氷狼の魔獣。友達」

「へ？ 魔獣？」

と、リクという名前らしい子犬は彼女の腕から抜け出し、犬なのに猫のように着地すると、愛らしい動きでポカンとする魁人の方に近づいてくる。

次の瞬間、リクと葵の中に魔力の炎が生まれたのを見ると、子犬だったリクの体が一瞬で巨大化した。

「うわっ！？」

巨大化した体長は熊ほどの大きさを持ち、ライオンのような猛々しい白い鬣が生え、円らだった両眼は獲物を狙うハンターのように鋭く赤い輝きを放っている。

そんな元の子犬とは似ても似つかない怪物に、魁人は呆気なく押し倒された。

（——喰われる！？）

本気でそう思った。全身から嫌な汗が噴き出す。死の恐怖が満ちてくる。自分の体など骨ごと砕いてしまいそうな大口が顔に近づいてくる。鋭利な牙の並んだ大口からは青紫色の舌が覗き、凍りつきそうなほど冷たい吐息が魁人の顔面を撫でる。そして——
ペロツ。

冷たく湿った、しかし『生』を感じるものが頬に触れた。見ると怪物はその舌で魁人の頬を嘗めているではないか。尻尾なんかそれはもう嬉しそうにブンブン振っている。

「ははは、リクに好かれたみたいだね。それともそれは、新しく加わるメンバーに上下関係を示しているのかもね」

魁人が視線を怪物から反らすと、そこには愉快そうに笑う銀髪男の顔が。その向こうで微妙に息を切らした紗耶が『次こそ燃やしてやる!』とか言っている。

(新しい、メンバー? ……誰が?)

何となく嫌な予感がするその疑問を口にする前に、月夜が明るい声で言った。

「うん。とりあえずみんな揃ったから改めて自己紹介しようか。――私は生徒会長の月夜詩奈。ルーンの魔術師です。これからよろしくね、魁人くん♪」

「僕は副会長にして符術師の御門銀英。まあよろしくってことさ。あ、呼ぶ時は『銀先輩』で」

「藤林葵。会計。魔獣使い。……呼ぶ時は『葵』。この子はリク」
三人がそれぞれ勝手に紹介する中、紗耶だけが腕を組んでムスツとしている。

「ほら、紗耶ちゃんも」

そんな紗耶を月夜が促し、彼女は嫌々といった様子で口を開く。

「……生徒会書記、神代紗耶よ」

彼女が一番素っ気なかったが、とりあえずそれで自己紹介は終了したようだ。

「私たち生徒会魔術師は、魔力の開花してしまった生徒たちを管理するために学園から雇われているようなものなの。だからね、魁人くん、ものは相談なんだけど――」

月夜が未だリクに嘗められ続けている魁人に向かって言葉を紡ぐ。
「生徒会に、入ってくれないかな?」

予想はしていた問い。魁人は既に唾液でベトベトになった顔に何かを悟ったような表情を作り、考えるまでもなく答える。

「いや……無理っす……」

こんな生徒会になど入ったら、命がいくつあっても足りない。

間章（1）

「くくくく、できた。つうーいにできましたよう！」

薄暗く湿った空気が満ちている研究室のような部屋に、男の陰険な笑い声が木霊する。

「魔力が芽生えて半年、よおーやくこの段階まで上り詰めましたよう」

薄汚れた白衣を纏ったその男は、縁なし眼鏡をクイツと指で持ち上げると、傍に置いてあった片手で持てるほどの壺状の容器を手に取り。男はその中を覗き込むと、口元に嫌らしい笑みを浮かべた。
「でえーすが、くくく、こおーんなもので満足する私ではありませんん」

壺を持ったまま椅子を引き、彼は物音一つ立てずに腰かける。声とは真逆の静かな動作が、纏っている白衣や薄暗い部屋と相まって幽霊のような存在感を滲み出している。

壺を置き、両手を乱雑に資料が散らばっている机の上で組むと、

男は眼鏡の奥の目を細めた。

「さあて、次はどおーしましょうか？ 一度失敗したこともありませんが、今の私の魔力なら素材をかあーなりレベルアップしても問題なあーいでしょう。くくく、だから、そろそろ夢の挑戦を始めましょうかねえ」

彼は散らばっている資料の中から数枚の紙を抜き取る。それには奇妙な紋様や文字などが書かれており、何かの設計図のようにも見えた。

「……幸い、この辺りは魔脈のおかげで良質な材料が豊富ですからねえ。まったく、奴らを見返すには最高な環境ですよ。この学園は」
眼鏡のブリッジを押さえ、白衣の男はくつくつと嗤った。

炎の退魔師（１）

四月十三日。昼休み。

「だーかーらー、説明してるでしょーよう、魁人君」

学園内にいくつかある学食の中でも一番スタンダードなメニューが置いてある食堂で、魁人は梶川と昼食をとっていた。二人とも日替わり定食を頼んでいる（今日は鶏の唐揚げ）。

今日からは午後まで授業があるのだが、大半の授業は最初ということでもオリエンテーション的なものでしかなく、さっそく授業中に寝ている生徒が出現するほど退屈極まりなかった。

「はいはい、お前はあの時逃げたんじゃなくて先生を呼びに行ったという御託は聞き飽きました。あの後それはもういろいろと大変だったんですよ？　口で語るには難しすぎて面倒なため何があったのかは以下省略」

「ちょ、何で敬語！？　ねえ何で！？　二人の距離が毎秒光年単位で離れて行っているような気が否めないんですけど！」

「いいんですよ。結果オーライだったから特に君に対しての問題はないんですよ。だから寛大なる魁人様は君のことを許してあげます」
「ダメだ！　そんな神父さんみたいな顔で許しを貰ったら二度と元の位置に戻れなくなる！？」

まだ手をつけてない定食を脇にどけ、梶川は机に頭を擦りつけて謝り始めた。背が高く、見た目ヤンキーな梶川がほとんど土下座に近い謝りをしていることにちょっと優越感を覚えつつ、そろそろ周りにも迷惑だから許してやろうと決める。定食奢ってもらったし、あの後あったことを考えると、梶川を恨む気も失せるというものだ。
「わかったわかった。もうわかったからその辺でやめろ」

普段の調子で言うと、梶川はすぐさま頭を上げて『魁人神様バンザイ！』とか意味不明なことをほざき、その後はいつもの彼に戻って定食をがつつき始める。

切り替えの速いやつだ、と呆れる魁人は唐揚げを一口かじった。カリッとした食感の後に広がる肉汁のうまみに至福を感じながら、魁人は昨日のことを思い出す。正直、いろいろとありすぎて未だ混乱しているのが現状だった。

メイザース学園生徒会。

魔脈とかいう『世界の魔力』の影響で魔力が芽生え、特殊能力を身につけた生徒たちの暴走を鎮圧し、保護・救済を行う学園から雇われた生徒の魔術師。

——生徒会に、入ってくれないかな？——

一晩中ずつと考えていた。いや、入る入らないのことではない。自分の日常を捨て、あんな非日常の危険がつきまとう場所へ踏み込む気はない。魁人は『魔眼持ち』という特殊な人間だが、魔術師ではない一般人なのだ。

未だ、昨日のことは夢だったのではと思う。しかし、思った一秒後にはそれを否定している自分が出現する。この眼や光の正体は確かに知れたかったことなのだから。

月夜が初めから何の躊躇いもなく学園の秘密等を話してきたのは、魁人を生徒会に引き入れるためだ。あの場では断って逃げるように帰宅したが、果たして彼ら魔術師が秘密を知っている自分をこのまま放っておくだろうか。ずっと考えていたのはそのことだ。

午前中、同じクラスにいる神代紗耶は接触してこなかった。生徒会のメンツの中では一番積極的に行動を起こしてきそうな彼女が、まだ何もしてこないのはどういうことだろうか。

（俺の記憶どこか存在ごと抹消するような魔術の準備でもしてたらどうしよう……）

どうしてもネガティブに考えてしまう。生徒を護るのが彼女たちの仕事なのだ。最悪でも昨日の不良——貝崎豪太と同じように記憶を弄られるくらいだろう。だが、やはりそれでも接触してきそ

うなものだが……。

（まだ俺を生徒会に引き入れることを諦めてないんだろうか）

そうだとすると、生徒会になど絶対に入るわけにはいかない。通常の生徒会がしている面倒そうな仕事もやっぱりあるだろうし、何より自分の身の安全のために。通

炎の退魔師（２）

「うーん、どうしたら魁人くんが生徒会に入ってくれるかなあ？」

古びた本やファイルといった、何らかの資料を両手に山積みにして廊下を歩く月夜詩奈は、同じように資料を運んでいる神代紗耶にそう訊ねかけた。

「あんなやつ仲間にする必要はないですよ。不良一人倒せないような弱っちいやつを入れても、足手纏いどころか鉄球の足枷をつけて海底を歩くようなものですよ」

ゴミ虫以下とでも言うように、紗耶は不愉快そうな顔で答えた。

「あははー、紗耶ちゃん家は実力主義だからねえ。でもそれは言い過ぎじゃないかな？」

「魔術師は強さが全てです。特にうちの家系は」

「魁人くんは魔術師じゃないし、神代家の人間でもないじゃない。それとも紗耶ちゃんは、魁人くんを神代家の婿養子にしちゃったりするつもりなのかな？」

「絶っつつ対にありえないです！」

心底嫌そうに、紗耶は首を振って全力で否定した。長い黒髪がふさあつと揺れる。

神代家は月夜が言った通り実力主義の魔術師一族だ。主な仕事は心霊現象などの調査・解決で、何でもこの学園の理事長は神代の宗主——つまり紗耶の父親——と古い知り合いだったらしい。

紗耶がメイザース学園に入学し、生徒会に入ったのは、その理事長からの頼みだった。

魔脈の存在が明らかになってから、このメイザース学園には多くの魔術師たちが関わってきた。年に一人はその魔術師たちの子供が中等部から入学し、生徒会に入って高等部まで繰り上がってくるシステムなのだが、今年にかぎってその繰り上がりがなかったのだ。

魔脈の影響はなぜか中等部側よりも高等部側の方が強く、生徒会

の戦力は常に充実しておく必要がある。一応、健康診断にあやかつて新入生の中から偶然入学してきた魔術師や異能者を探したりするのだが、あの羽柴魁人のように、魔術師レベルの魔力を持つていても素人だったりする者がほとんどで期待できない。よって、彼女は学園からの推薦という形で入学したのだ。

それについて紗耶に後悔はない。高校なんてどこだっていいと思つていたし、普通の高校に行くよりも面白そうだった。

「魁人くんの魔眼は何としても確保しときたいんだけどなー」

歩きながら物欲しげに天井を仰ぐ月夜。なぜそこまで彼に執着しているのか、力が全てと考えている紗耶は理解しかねていた。

「必要ないですよ」

だから、あのような弱者を迎えることは彼女にとって障害以外の何物でもない。

「そうはいかないのよ、紗耶ちゃん」

しかし、月夜はふやんとした顔を真剣にしてそう言ってくる。

「魁人くんの眼、まだ『魔力が見える』ってだけで他は何にもわかつてないのよ。そういう力を持った魔眼自体珍しいし、一般人が生まれつき魔眼持ちなんて滅多にないケースなの。魔脈の影響で危険なものに変化しても困るじゃない？ ケルト神話の魔神・バロールみたいに見ただけで人を殺せるようになったり、メデューサみたいな見たものを石に変える力とかを持つっちゃうかもしれない。だからなるべく手元に置いときたいわけ。それに『魔力が見える』ってことは私たちの仕事にもすぐ役立つと思うの」

「それは、まあ、そうですね……。ていうか、最後のが本音じゃないですか？」

詰問する紗耶に、月夜は『あ、バレた』とちよつと舌を出して照れ笑いした。

「まあ、何にしてもね、魔眼の名称だけでも知つてきたいからこうやって資料を集めてるわけなんだけど……。まだ情報が足りないのよね。だから紗耶ちゃん、同じクラスなんだから積極的に声かけて誘

つてくれないかな？」

「無理」

紗耶は月夜の頼みを光の速さで断った。

「むう、だったら私が直接誘惑するしかないわね。どんな手を使っても、ね。あははー」

具体的に何をする気かは知らないが、笑顔の月夜から黒い何かを感じ、紗耶は一瞬ビクリと肩を震わす。この場だけ狙われた魔眼持ちのことを気の毒に思いながら、紗耶は昨日の屋上で見たことを思い出す。

（それにしても、魔力が見える魔眼……か）

自分は魔力を感じることでしかできないが、不発だと思った貝崎の能力を羽柴魁人が打ち消した、もしくは相殺させた可能性がある。彼自身は眼の説明の中でそのことを言っていなかったから気づいてないのだろうが、もしそうなら、確かに調べてみた方がいいのかもしれない。生徒会に入れることは反対だが……。

「あつ、そうだ、月夜先輩」

思い出したように、紗耶。月夜は『何かな？』と小首を傾げる。

「今日の放課後、あたしは生徒会に出られませんから」

それだけで、月夜には何かわかったようだ。

「あー、そっか。うん、わかったわ。今日は通常の生徒会の仕事だけだから、銀くんさえサボらなければ私たちだけで十分よ。そうよね——」

月夜はどこか哀れむような苦笑を浮かべ、

「——紗耶ちゃんは、本職の方もあるから大変よねー」

炎の退魔師（3）

「やあ、魁人♪」

魁人たちが昼食を終えて食堂から出ると、そこには見知った顔の男女がフレンドリーに声をかけてきた。正確には声をかけたのは銀髪の方で、女の方は無言で彼に付き添っている。

「銀先輩、葵先輩……」

爽やかで軽薄、そんな矛盾してそうな笑みを浮かべているのが生徒会副会長の御門銀英。無表情で何を考えているのかわからない少女が会計の藤林葵。他の二人はいないようで、昨日葵が連れていたリクとかいう魔獣の姿も見えない。

（ああ、ついに裁きの時か……）

彼らに会った瞬間、魁人の中で一つの覚悟が決まった。もし昨日の記憶だけ消されるのであれば、もうそれはそれで構わない。命を消されるよりはマシだし、魔術師の二人から逃げ切れるとはとても思えなかった。

終わった、とでも言うように覇気がなくなった魁人に、銀英が不思議そうに眉を顰める。

「いやあ、そんな死人みたいな目で見られても困るなあ。僕ら何もするつもりはないんだけど？ それとも魁人はソロモンの悪魔を召喚する生贄にでも使ってほしくふあっ!？」

何か度の過ぎた冗談でも言おうとしていた様子の銀英の鳩尾に、葵が無表情のまま裏拳ぎみの拳を叩きつけた。

「……あ、あの、葵さん？ こ、これちょっとツツコミ、げほっ！ き、キツすぎない？」

鳩尾を押さえて銀英は苦しそうに問いかけるが、葵は相変わらず表情に変化はなく一言。

「普通」

そんな二人のやり取りに、どうやら本当に自分を捕らえに来たの

ではないと悟り、魁人は少しばかり安堵する。

と、葵を目にした梶川が、興奮にその目を見開いて失礼にも彼女を指差す。

「おおあーっ！ あなたは血圧検査のクールビューティ様じゃないですかあーっ！！」

意味不明なことを喚くと、梶川は高速で魁人の前に回り込んで彼女の右手を両手で包むように取る。突然のことだったが、葵は眉一つ動かさず無表情を貫いていた。

「お、オレ、梶川邦明って言います是非お近づきぶふへえっ！？」

銀英よりも汚い悲鳴を上げて梶川は魁人の隣に転がった。見ると、葵はスカートなものにも関わらず高い位置で膝蹴りを喰らわした後の体勢だった。やっぱり不快だったのだろう。

「か、かひとクン、こ、このヒホたち……ダレ？」

何か今にも死にそうながらも、どこか嬉しそうにマゾ的な笑みを浮かべている梶川。

「最初に訊けよ」魁人は呆れの溜息を吐き、「アレだ、逃げ出したどこかの誰かさんと違って、昨日助けてくれた恩人たちですよ」

本当は神代紗耶に助けられたのだが、まあ一緒だろう。結果的に魔力が暴走して襲いかかってきた貝崎を止めたのはこの銀髪男——御門銀英なのだから。

「また敬語！？ 魁人は、魁人はやっぱり俺のこと恨んでるんだ畜生おおおおおおおっ！！」

復活して立ち上がったかと思えば、梶川は緩んだ涙腺から液体を横に零して何処へと駆け去ってしまった。

彼の姿が見えなくなったのを確認し、銀英が楽しそうにニヤけた笑みを浮かべる。

「いやあ、友達の扱いがうまいねえ。僕たちから遠ざけるために、わざとあんな風に言っただけでしょ？」

「あいつが阿呆なだけですよ」

素っ気なく答え、魁人は真剣な表情を作って銀英とまっすぐ向か

い合う。

「で、俺に何の用ですか？」

「警告」

答えは、葵の方から返ってきた。

「へ？」

（警告って…… やっぱ俺を始末しに来たってことなのか？）

だが、鉄仮面の裏にどんな感情が渦巻いているのかわからない葵はともかく、へらへらと気の抜け切った笑みの銀英に敵意や殺意を感じない。それが彼の仮面なのかもしれないが、魔術を使おうとするならその前にこの眼が反応するからわかる。しかし、その様子もない。

「あー、そんな身を固くしなくてもいいよ。そういうことじゃないからさ」

魁人の思っていることを理解しているように、銀英は前もってそう断った。そして緊張の緩んだ顔のまま周囲の人気を確認し、少し声のポリウムを小さくして言葉を続ける。

「まあ、はつきり言うけど、その魔眼はまだ謎なんだよねえ。もしかしたら危険なものかもしれないし、そうでなかったとしても、魔脈の影響でどうなるかわからない。僕らの魔術で取っ払えればいいんだけど、君みたいな先天的に根づいている魔力や力を消すなんて所業、それこそ世界でもトップクラスの魔術師だって骨を何本も折ることになるほど難しいんだ。というか、魔眼を消すなんてもったいないし」

「……」

言っていることは理解できている。この眼は危険かもしれないけど、しかも取り除くこともできない。葵が言った警告とは、『魔力が見えるだけだからって安心するな』ということだろう。

「それで、俺にどうしろと言うんですか？」

「簡単な話さ。生徒会に入ればいい」

「お断りします」

魁人は即答した。

「はは、やっぱそうきたか。生徒会に入れば、学園に雇われることになるんだけどなあ。学費免除になったり、学園内に創設された魔術機関の出入りを許可されたり、何より魁人自身の眼を役立てることができただけど？」

それにちよつとお給料も出るよー、と銀英はニヤケながら付け足すように耳元で囁いた。

「……無理、ですよ。俺にはあんな場所、荷が重すぎます」

学費免除と眼を役立てるということにグラリと揺らいだが、昨日の戦闘を思い出して自分でも後ろ向きとわかつている決意を改める。自分の眼のことは自分が一番よくわかつている、なんてことは言わないし、言えない。ただ、この眼が危険だという不確定要素のために命を投げ出したくはない。

謎だといつても、もう自分が知りたかった眼の謎は解けているのだ。これ以上魔術なんてものに関わったら、この先もう二度と今まで生きてきた日常に戻れなくなる気がする。

そうなることが、あるとも知れない眼の危険なんかよりも怖かった。

「じゃあ、ここでもう一つ警告。僕らは君を引き入れることを諦めないよ。特にうちの会長は、魁人のことを大層お気に召しているようだからさ。どうしても生徒会に入りたくないのなら、常にその眼を全開にしておくことだね」

最後に意味深なことをいい、脅しをかけるように銀英の魔力が高ぶった。しかしすぐにその高ぶりは収まり、彼は『じゃあね』と言って立ち去っていく。葵はやはり無表情のまま軽く会釈し、彼の後についていった。

「……何なんだよ、一体。眼を、全開にする？」

約二時間後、その意味は形となって魁人に襲いかかることになる。

炎の退魔師（４）

放課後。

帰り支度を済ませた魁人は――校舎内の廊下を全力疾走していた。他の生徒たちを押し分け、何かから逃げるように――ではなく、本当に逃げていた。

走りながら、青く染まった魔眼で床、壁、天井に目を凝らす。そのところどころに、透明な魔力の輝きが見て取れた。

正体は、ルーンの文字。それが廊下のいたるところに白チョークで刻まれている。傍から見れば単なる落書きだが、魁人はこれが魔術だと知っている。

銀英の警告はこのことだろう。ルーンは、生徒会長の月夜詩奈が扱う魔術である。

他の生徒たちは気づいていない。それどころか、だんだんと人気が少なくなっているような気がする。

それに、異常はもう一つあった。

「ていうか、ここどこだよ!？」

魁人は今、自分がどこを走っているのか把握できていなかった。確かに校舎内は広く複雑なところもあるが、それでも魁人は方向音痴ではない。まっすぐ昇降口へ向かったはずなのに、一向に辿り着けない。

わかっていることは、すぐその教室が物置的になっていることと、ここが二階だということだ。知らず知らずの内に、数ある特別棟の中のどこかにでも誘導されたのかもしれない。

そう考えた時、魁人は立ち止まった。いつの間にか、人気が全くなくなっていたのだ。

シン

静寂が場を支配する。こういう無音時には、ピーという変な電波でも拾ってるんじゃないかという音だけが耳の奥で鳴っている。

「あははー。逃げてても無駄だよ、魁人くん」

その静寂を破るように、背後からそんな声と靴音が魁人以外誰もいなくなつた廊下に響く。

「月夜……先輩……」

ゆっくりと振り返り、魁人はそこに存在するウェーブの少女の名を呟いた。

「これ、一体何がしたいんですか？」

廊下の床から天井までに刻まれたルーン。ここに来て、その数は見ただけでは計りきれないほど増えていた。

人はいなくなるし、階段を昇ろうが降りようが一向に抜け出せない無限迷路。まるで異界だ。恐らくルーンを一つずつ消していけばこの魔術は解けるかもしれないが、どれだけ量があるのか皆目見当がつかない。一体チヨークを何本犠牲にしたらこれだけのものが書けるだろう。

月夜の狙いは、本当はわかっている。

「うん。私はただ、魁人くんに生徒会に入ってもらいたいだけだよ。そういうことだ。自分を引き入れるために、ここまでのことをやってのけるとは、向こうもそれなりに本気なのだろう。」

だが、こっちだって本気だ。

「それは無理ですって、昨日断つたじゃないですか」

「でもね、魁人くんの魔眼は危険かもしれないの。私たちが近くにいれば、もしもの時の対処ができるから」

「それは銀先輩から聞きました。『危険かもしれない』ってことは『大丈夫かもしれない』ってことです。それに生徒会に入ったところで、四六時中一緒にいるわけじゃないんでしょ？先輩は、ただ俺の眼がほいだけじゃないんですか？」

銀英のもったいない発言はそういう意味なのだろう。それはどうやら当たっていたらしく、うつ、と月夜は一瞬だけ怯んだ。

「魁人くんは、その眼を役立てたいとかつて思わないの？」

「役に立つのならそうしたいですよ。でも、我が身かわいさが優先です」

「魁人くんに戦いまで要求しないよう」

「それでも、とばっちりを受けるかもしれない」

あー言えばこー返す魁人に、月夜は子供のように頬を膨らます。

そして、おもむろに大きく膨らんだブレザーの胸ポケットから四つ折りにした紙を取り出すと、それを広げ、突きつけるように魁人に見せる。

「あまりこういうのは好きじゃないんだけど、この書類にサインしさえすれば、魁人くんはもう生徒会のもの——じゃなくて、仲間になるんだよ」

言い直したのが微妙に気になるが、魁人は冷めた口調ではつきりと告げる。

「サインなんてしませんし、無理やりさせられても生徒会になんて行きませんよ」

「来ざる得なくなるの」

「なっ!？」

(ということは、あれはサインした人を洗脳したり何かしたりする魔術的な何か……)

魁人には『何か』としか表現できないが、知識がないのだから仕様がなない。それでも死守すべきことは理解できる。あれにサインをしてはいけない。

魁人は周囲に視線を泳がす。魔眼で見ているため宇宙空間みたいキラキラしている廊下だが、どこかに抜け出せる『穴』があるかもしれない。

と、そんな魁人の様子に気づいたのか、月夜が勝ち誇った笑みを口元に浮かべる。

「逃げようとしてもダメよ。この擬似的無限迷宮は、この廊下のあらゆる出入り口の空間を歪めてるから、階段を昇ろうが降りようが、

どこかの教室内に隠れようとしても、ここへ戻ってくる仕組みになっているの。この術式を構成しているルーンを全部消せば流石に解けちゃうけど、人を寄せつけないようにするルーンも混ぜてるから、魔術の知識がない魁人くんは、結局これ全部消さないといけなくなるわけ」

つまりこの星の数ほどあるルーン全てが同じ術を作っているものではないが、見分ける知識を魁人は持ち合わせていないため結局は全部同じものとして考えるしかないということか。

全てを消そうと思えば時間を食い、その間に月夜に捕まってサインさせられる。これは絶対絶命とかいうやつではないだろうか。

（いや、待てよ……）

魁人は眼を凝らす。銀英に言われた通り、意識を全開で魔眼に注ぎ込む。

（——わかる！）

見えた。魔力の輝きに微妙な強弱がある。それもきつぱりと二種類の強さだ。

『人払い』と『空間歪曲』、知識のない魁人が考えてもどちらが力を喰うか簡単に想像できた。圧倒的に多い、弱い光を放っている方が『人払い』だ。

魁人は月夜を一時無視して全体を見回す。その行動を怪訝に思った月夜が首を傾げているが、今は気にしない。

廊下の角や教室の入口、ここからでは見えないが、たぶん階段のところにも多く強いルーンが刻まれているだろう。

魁人は月夜に背を向けて走り出した。弱いルーンのところなら抜けられるはずだ。それを探すしかない。

「うーん、諦めてないみたいだけど、私は魁人くんに時間をあげるわけにはいかないんだよね」

月夜は胸ポケットに引っかけていた黒い外装のペンを手に取る。どうもそれはペンライトのようで、尻部を押すとペン先が強く光った。

（何をする気だ？）

魁人は足を止めずに首だけ振り返る。と、彼女はライトグラフィティをするようにペンライトの光で宙空にルーンを刻んだ。

瞬間、光線のような何かが文字通り光速で魁人が走る前方の床に着弾する。魁人は思わず足を止めた。床には弾丸や弾痕などではなく、少し焦げたような痕だけが残っている。

「これも、ルーンの魔術ですか？」

焦燥の色を隠せないが、しかしできるだけ落ち着こうとする表情で魁人は月夜を振り向く。

「うん、そうよ。光の残像でルーンを刻む方法。すぐに消えちゃうから持続的な術は使えないけど、その分スピードのある術ができるのよ。こんな風にね」

「！？」

言っと、月夜は再びルーンの残像を宙空に刻む。それが三つ、時間差を開けて三つの光弾が飛び、魁人の足を容赦なく貫く——ことはなかった。

どれも周りの床を焦がしただけだったのだ。

彼女からは殺気は感じられない。当てる気は最初からないのだろうか、それともただ単に外しただけなのか。前者であることを願いたい。

「あはっ、何かこういうのって映画とかのワンシーンみたいだねー。ん？ あれ？ ってことは私が悪役！？」

自分がヒーローだとも思っていたのか、何か少なからずショックを受けている様子の月夜。だがそんな彼女に構っている暇はない。魁人は辺りを見回し、そして気づく。

（窓側は、全部弱い光だ！）

しかしここは二階といってもけっこうな高さがある。飛び降りるにはめちゃくちゃ勇気があるし、無事に着地できるかわからない。が、今はそんな悠長なことを言ってられない。

（こうなったら、仕方ない！）

「え？」

次に魁人が起こした行動に、月夜は呆けた声を出した。

窓の方に近づいたと思えば、そこに刻んであったルーンを手で拭き取り、窓を開け、足をかけ、そして――

――何の躊躇いもなく飛び降りた。

窓の外には都合よく木が生えており、魁人は落下中にその枝をうまく利用して重力加速を減らし、まさに猿のように着地まで無事に決めたのだ。木を植えているため下が土だったことも救いだっただろう。

着地した魁人は窓から覗き込んでいる月夜を見上げ、軽く手なんか上げてこう言った。

「残念ですけど、俺には魔術師と渡り合っていける自信も力もありません。だから俺のことは諦めてください」

そして、魁人は走り去ってしまった。

残された月夜は、開かれた窓枠に体を預けて苦笑する。

「あははー、フラれちゃった。まさか飛び降りるなんて。……それにしても、私ったらちよつと魔眼を甘く見てたみたい」

既に遠くなっている影に視線を向け、彼女はもう一つ、呟く。

「自信も力もない……か。あははー、十分魔術師と渡り合ってるじゃない、魁人くん。これはやっぱり、まだ諦めるわけにはいかないわね」

でも今回ののはちよつとやり過ぎだったかな、と少し反省する月夜だった。

……この時、魁人も月夜も気づかなかった。

上履きのまま外を駆け去っていく魁人とすれ違った白衣の男が、何かを企む狂気めいた笑みを浮かべていたということに。

炎の退魔師（5）

那緑市の繁華街はメイザース学園から徒歩十分ほど離れた近場にある。

そのため放課後になると、この辺りでは一番規模も生徒数も多いメイザースの制服が目立ってくる。

魁人もその中の一人として風景に溶け込み、夕刻の繁華街を宛てもなく歩いていった。

魁人は学生寮ではなく、学園からほどよく近い安アパートを借りている。理由は寮よりも一人暮らししているという実感が湧くし、寮は相部屋しか開いてなかったからだ。

しかし、今は帰る気にはなれない。自分を襲ってきた（と判断してもいいだろう）のが月夜だけだったことを考えると、他のメンツが家で待ち伏せしていないともかぎらない。

だからこの繁華街で適当に時間を潰そうと考えたのだが、よくよく考えれば一人で来たのは初めてだ。ゲーセンとか本屋とかでどうにかするしかないだろう。そういえば昨日は水曜日。いろいろあつて恒例の立ち読みをしてなかった。まずはコンビニに行こう、そう決める。

「まったく、梶川がいればこんなに考えなくても時間潰せるんだけどなあ。あの魔術師のせいではぐれちゃったし」

「ま、魔術師！？」

「そうそう、魔術師魔術師。あいつらもう何でもありなんじゃないのって感じで……！？」

弾かれたように魁人は後ろを振り向く。独り言に返事が返ってくるわけがない。一瞬噂をすれば梶川かと思っただが、今のは百歩譲っても女性の声だ。

魁人が振り返ったのと同時に、そこにいた少女の肩が驚いたようにビクウと跳ねた。

肩にかかる程度に伸ばした髪、その前髪は緑色の可愛いデザインのヘアピンが留めてあり、大人しそうな作りの顔にクリツとした双眸が踊っている。背は百六十センチに届くか届かないかで、自分と同じメイザース学園高等部の制服が彼女の華奢な体を包んでいた。

追っ手かと思いきや、そうではなかったようだ。振り返った魁人の顔が余程怖かったのか、彼女は妙にオドオドとしている。それに、魁人は彼女を知っていた。

「えっと……鈴瀬、さんだっけ？」

「あ、はい」

彼女は魁人のクラスメイトで、梶川に一年の美少女の名前を連れさせたらずばず上位にくる女子生徒——鈴瀬明穂である。

昨日の朝まで名前も知らず、同じクラスという接点以外何もなくてあいさつすらしたこともない彼女がなぜ自分の後をつけるように——いや、そこは偶然かもしれないが、自分の独り言に言葉を返してきた意味がわからない。

見た感じ彼女は積極的に他人と交流を持つようなタイプではなさそうだし、休み時間は大抵自分の机で本を読んでいるイメージしかない。

そんな彼女が、上目遣いで遠慮がちに訊いてくる。

「あ、あの、その、は、羽柴君は、その、ここで何をしてるの、ですか？」

触れれば崩れてしまいそうなほどビクビクしている。恐らく本当は話しかけるつもりはなかったが、そこに『魔術師』なんて単語が出たから、思わず声を出してしまったのだろう。

生徒会の手先——裏風紀委員か何かかもしれないと考えたが、彼女を見ても魔力はなかった。だから安心して話ができる。

「俺はまあ、ちょっとブラブラして時間潰してるだけだけど。鈴瀬こそ、こんなところに一人で何してるんだ？」

質問し返すと、彼女は顔を真っ赤に染め、恥ずかしそうにさらに

俯き加減を増した。

「あの、えっと、本を買いに来ただけど、わ、私、この辺り初めてで、その、友達もまだいなくて、その……」

「迷子？」

「はうっ！？」

核心を突くと、彼女は面白いくらいに真っ赤にした顔を跳ね上げる。人見知りが激しいというか、極度の上がり症というか、はたまた男性が苦手なのか、その全てに当てはまりそうだ。

魁人は小さく息をつき、あまり刺激しないように言葉をかける。

「それで、何でわざわざこんなチャレンジを？ 行き慣れたところに行けばよかったじゃないか」

「えっと、私の知っているところにはなくって、この辺りの方が、大きい本屋さんがあると思ったから……」

なかったのなら注文すればいいじゃないか、と言おうとしたが、やめた。彼女の性格から考えて、それにはけっこうな、それも校舎二階の窓から飛び降りるくらいの勇氣は必要だろう。

ちなみに魁人の足はまだ微妙にヒリヒリしていたりする。

「本は……買えてるみたいだな」

彼女が両手で抱くようにして本屋の袋を持っているため、魁人はそう判断する。中身は、休み時間に呼んでいるような文庫本の類と勝手に想像する。

「はい。でも、その後道がわからなくなつて、彷徨つてたら、羽柴君を見つけて、その、知ってる人だったから」

「後をつけてきた、と」

「うう……」

何か一人ぼっちになったウサギのような感じがする鈴瀬。困っているのに失礼かもしれないが、そこがちょっと可愛く思える。少なくとも、あの生意気な神代紗耶よりは断然。

ふう、と魁人は彼女にわからないように息を吐く。

「鈴瀬の家ってどこ？ もしかして寮？」

「あ、いえ、柿内町、です。あの、私、マンションで一人暮らしだから……。寮は、その、相部屋しかなかったから、嫌だったというか……」

柿内町は市内の町だが、繁華街とは逆の方向だ。というか、彼女は『マンション』で自分は『安アパート』。単語を聞くだけでも雲泥の差を感じる。

魁人はやれやれと肩を竦めた。

「わかった。どうせ時間潰してるほど暇だし、どこまで送れば帰れる？」

すると、鈴瀬の表情がパツと輝いた。

「あの、できれば学園まで。その、ごめんなさい、私、方向音痴で

……」

「あー」

学園までと言われると迷う。そこは自分のアパートよりも、今はまだ近づきたくない場所だ。

「ダメ……ですか？」

「あー、いや、いいいいいよ。全然オーケー」

困っている女の子を、このまま放っておくわけにもいかないだろう。学園までといっても、中まで入るわけではないのだ。

（大丈夫、大丈夫）

そう自分に言い聞かせ、魁人は来た道に戻ることとなった。

炎の退魔師（6）

歩きながら適当に話していると、鈴瀬も次第にオドオドしなくなってきた。

意外にも、彼女は少年漫画を読んだりテレビゲームをしたりするらしい。二人いる弟の影響だと彼女は言っていた。

とにかく共通の話題ができたことは救いだっただ。一緒に歩いていて、話すことがないなんて気まず過ぎる。顔も知らない鈴瀬の弟に感謝する魁人だった。

街をオレンジ色に染めていた太陽が段々と落ちていく。あと少しで繁華街を抜けるところまで差しかったその時――

「オイてめえ、昨日貝崎さんと戦い合ったつつうガキだな」

そんな野太い声がかけられた。横で鈴瀬が、ひい、と短く小さな悲鳴を上げている。

振り向くと、そこにはスキンヘッドやドレッドヘアといった、いかにも『不良です』と主張しているような青年たちが五人。殺気立った目で魁人を睨めつけていた。

「……いえ、人違いです」

そんな視線を向けられているにも関わらず、魁人は落ち着いた口調でそう返した。貝崎の名前が出たということは、彼らはいつの仲間で、自分に報復しに来たといったところだろう。

魁人が自分でも驚くほど冷静でいるのは、不良たちを見た瞬間に意識を眼に持っていき、全員に魔力がないことを確認して安堵したためだ。

もはや自分と関わる人間全てを、一度この魔眼でスキャンしておかなければ気が済まなくなっている。そして魔力のないただの人間だとわかると、見た目や言動がどれだけ恐ろしかろうが、今の魁人

に大した恐怖を植えつけることはできない。

だからといって、魁人は自分が優勢だと勘違いするほど愚かではない。相手は五人、喧嘩となれば、どう頑張ったところで勝ち目はない。

向こうも、『人違いです』と言って『はいそうですか』と引き下がるほど馬鹿ではなかった。

「しらばっくれてんじゃねえぞゴラァ！ こっちはためえだつてわかってんだよ。こいつの証言でな！」

スキンヘッドが、一番離れたところから事を見守るようにしている少年を指す。彼は昨日、貝崎を取り巻いていた不良たちの一人だった。

（くそつ、神代のやつ、一人逃がしてるじゃないか）

だったらなぜ神代紗耶ではなく自分を狙ってきたのだろうか。そう思ったが、紗耶には勝てないと彼が悟っていたとすれば、この報復行為は領けないこともない。

「テメエのせいで貝崎さんは全治一ヶ月の大怪我負って入院してんだよ！ この落とし前、どうつけてくれんだあ、ああん？」

スキンヘッドがいかつい顔を近づけてくる。見開いた目から充血した眼球が覗いている。

「それは俺のせいじゃ……いや、言っても無駄か」

この場での選択肢は二つ。戦うか、逃げるかだ。どちらを選ぶかなんて言うまでもなかったのだが――

「おーおーおー、こいついい女連れてやがるぜえ！」

「！？」

ドレッドヘアが魁人の背に隠れるようにして震えていた鈴瀬に目をつけたのだ。彼女はまた短い悲鳴を上げて体を縮める。

（今逃げたら、鈴瀬が……）

彼女はこの容姿だ。捕まって凌辱されるのは目に見えている。自分だけ逃げるわけにはいかない。

「ほーら、お嬢さん。このガキはどうせ死ぬから放つといて、俺ら

といいことしよう——」

ドレッドが下卑た笑みを浮かべて鈴瀬に伸ばした腕を、魁人は手刀で思いつ切り弾いた。

「ぐあつ！ 痛つてえええ！？」

「横場さん！？」「てめえ、やりやがったな！」「ぶつ殺せ！」「海に沈めんぞゴラァ！」

不良たちが一齐に殺気立つ。魁人は振り返り、涙目になっている鈴瀬に告げる。

「鈴瀬、お前は先に逃げる！」

「で、でも！」

「俺なら大丈夫。昔空手やってたことあるから、こんな奴ら敵じゃねえよ」

もちろん嘘だ。空手の経験はあるにはあるのだが、それは小学生のころに少しかじっただけ。

「おい聞いたか？ 俺らに向かって『敵じゃねえ』ってよ。笑つてやれ。ハハハハハハ！」

不良たちに笑われるのは無視し、魁人はまだ動こうとしない鈴瀬を突き離すように叫ぶ。

「早く！」

彼女はビクリとし、竦んだ足を必死に動かして走った。そして一度振り返り、

「は、羽柴君！ す、すぐにお巡りさん連れてくるから！」

「ハハハ、逃がすかよ——がつ！？」

追いかけようとした不良の一人を、魁人は足を引っかけて転倒させた。スキンヘッドが首をゴキリと鳴らす。

「てめえ、本当に一人でやる気か？ ハハハ、いい度胸じゃねえか」「しょうがないだろ。俺は他人を傷つけてまで自分を護りたいとは思ってないんだ」

だから、もし生徒会の連中が人質なんか取ってきたら、魁人は生徒会に入らざる得なくなるだろう。が、彼女たちがそんな関係ない

者を巻き込む卑怯な人種ではないことは知っている。

（さて……どうしよう）

周囲からの助けは期待できない。行き交う人々は、全員我関せずを決め込んでいる。中には警察を呼んでくれている人がいるかもしれないが、まだ喧嘩は起こっていないのでその可能性は低い。

「んじゃ、本当にオマワリサンに来てもらっちゃあ困るんで、俺らのパラダイス『ROZUIRA』まで移動してもらおうか」

流石に公衆の面前で喧嘩を始めるつもりはないらしい。否、喧嘩ではなく一方的なリンチになるのは間違いないのだが……。

「さあ、来やがれ」

逃がさないよう不良たちが周囲を囲む。そしてそのまま近くの路地裏へ移ろうとした瞬間、

突如として現れた黒い影が――

――一瞬で不良たちを宙に舞い上げた。

それは本当に一瞬の出来事だった。

五人いた不良の内、ドレッドたち三人が現れた黒い影に昏倒させられたのだ。

彼らを倒したのは一人の少女。腰よりも長い艶やかな黒髪に、対照的な肌の色は雪。背は低く、手足は小枝のごとく細い。

そんな華奢な少女――神代紗耶の姿を、昏倒させられた不良たちは確認することもできなかっただろう。

「うわあああつ!? こ、こいつは昨日の!？」

ただ一人彼女を知っていた不良は、彼女を見ただけで腰を抜かしている。もう一人、この不良たちのリーダー的存在であるスキンヘッドは、次第に何が起こったのか理解し、額に青筋を浮かべて彼女に手を伸ばす。

「てめえ! 何しやが――」

しかし、言葉は最後まで出せなかった。スキンヘッドが伸ばした

ごつい手を紗耶が掴み、グキリ、と嫌な音を立てたかと思えば、次の瞬間には痛みに顔を歪ませたスキンヘッドの顎を思いつ切り蹴り上げていたのだ。スカートの中身が見えていただろうが、この状況でそこに目が行くことは流石になかった。

顎を蹴られてどれだけ脳が揺さぶられたのか知らないが、彼は弓反に宙に浮き、白目を剥き、口から何本か歯を血と一緒に零しながら、背中から地面に叩きつけられて動かなくなる。

魁人にはその瞬間がまるでスローモーションのように見えていた。腰を抜かしていた不良にはさらに遅く感じていたに違いない。彼は紗耶に睨まれると、情けない悲鳴を上げて全力で逃げていった。

魁人は確信する。魔術や武器なしの戦いでも、自分はこの少女には絶対に手も足も出せない。昨日あのままバトルにならなくて本当によかった。

と、彼女がこちらを向き、その白く細い手で魁人の手を取ってきた。

まさか自分もやられるのでは、と割と本気で思った魁人だが、どうもそうではなかった。彼女は『来て』と言呟くと、たった今不良たちに連れて行かれそうになった路地裏へ、魁人の手を引いて駆け入っていった。

炎の退魔師（7）

「放せ！ 何なんだいきなり！」

通路と呼べるか怪しい薄暗い路地裏に連れ込まれた魁人はハツとすると、彼女の手を振り解いて立ち止まった。

「何よ！ それが恩人に対しての態度？」

紗耶も足を止め、あからさまに不機嫌な顔をして魁人と向き合う。

「タスケテクレドウモアリガトウゴザイマシタ」

「全然心が籠ってない！」

ほとんど棒読みの魁人に、紗耶の怒りのボルテージが跳ね上がる。フー、と威嚇する猫のように彼女はしばらく魁人を睨んだが、結局手を出そうとはしなかった。

その彼女が落ち着いたのを認め、今度はちゃんと心を籠めて礼を言う。

「いや、マジで助かったよ。俺一人じゃ、どうにもならなかった。ありがとう」

そんな魁人の態度に紗耶は一瞬目を丸くするが、
「フン、別にいいわよ。どうせ今回もついだったんだし、月夜先輩たちはあんたを必要としてるみたいだから、死なせちゃまずいかなって思っただけよ」

魁人の眉根がピクリと動く。

「じゃあ何か？ お前も俺を生徒会に入れようとするのかよ。俺はそんなのごめんだぜ」

すると、紗耶は腕を組んで言い返す。

「あたしだって、あんたみたいなゾウリムシを入れたいって思っていないわよ」

「ぞ、ゾウリ……っておい、ちょっとは言い方ってものがあるだろ」

「じゃあ、アオミドロ」

「植物かよ！？」

やっぱり、こいつは何かムカつく。が、助けてもらったのは事実。ここまで連れて来てくれたのもそうだ。もしあの場に残っていたら、警察が来た時下手すればこちらが加害者と思われることになったかもしれない。

まあ何にしても、彼女が自分を生徒会に引き込むことに反対していることはわかった。それだけで彼女はもう敵ではない。寧ろ味方だと思っただい。

紗耶は、フン、とそっぽを向くと、持っていた学生カバンを開けて一枚の御札を取り出した。そしてそれを、横に建つ薄汚れたビルの壁に貼りつけ始めた。

「……何やってんだ？」

疑問に思い、訊く。と、彼女は御札がしっかり貼りつくように擦りながら、

「見てわかんないの？ 結界張ってんのよ。これと同じのをあと三ヶ所に貼って路地裏を囲ってるの。まあもつとも、この護符はあたしんじゃなくって、仕事に必要なだっただで銀英から奪っ……貰ってきたものだけだね」

銀英は商売道具を引いたくられたようである。

「仕事って……生徒会のか？」

「違うわよ」

瞬間、魁人の魔眼が発動する。護符を貼り終えて立ち上がった紗耶が、その内の魔力を一気に炎上させたからだ。

高ぶる魔力は、肌にもチクチクと刺すような威圧感を与える。

紗耶の左掌に方陣が展開。そこからあの日本刀が取り出された。

紗耶は具合を確かめるようにそれを一振りすると、高めた魔力を流し込んで刀身に蒼炎を咲かせ、言う。

「あたしの本職——退魔師の仕事よ」

炎の退魔師（８）

メイザース学園——生徒会室。

「そろそろやつてるころかなあ、紗耶ちゃん」

校長室から引つ張ってきたような高価な執務机に向かい、月夜は昼休みに集めた資料の本をめくりながら物思いにふけるようにそう呟いた。

紗耶の家——神代家は退魔を生業とする魔術師の一族である。だが陰陽道や神道のようなものとは違い、それらを基盤とした独自の術式を持つて魔を狩っているのが彼女たちだ。

神代家が扱うのは、主に五行思想でいう『火』である。五行思想とは、古代中国の自然哲学的思想で、万物は五種類の元素——木・火・土・金・水——から成るといふ説のことである。

『火』という特性上、神代家の術式は攻撃のためだけに存在する破壊力抜群なものがほとんどで、術者本人の戦闘能力も非常に優れていると聞く。それは紗耶本人を見れば明らかだ。

正直なところ、生徒会の裏仕事は彼女にとって簡単なようで難しいだろう。戦力としては申し分ないが、普通彼女たち退魔師が人を相手にすることは滅多にないし（憑かれている場合は別）、完全滅殺が常なので『殺さず』の加減をする必要がない。従って、悪霊に憑かれているわけでもない人間を、殺さずに抑え込むことには不慣れなのだ。

しかも彼女は、何でも力づくで片づけようとする嫌いがある。常時加減が必要な生徒会の仕事だけだと、ストレスが溜ること間違いない。

だから彼女は、学園にいる間は本業の方で適度にストレスを発散していくつもりだろう。

ガチャリ、と生徒会室のドアがノックもなしに開く。月夜は思考を中断して顔を上げた。

「銀、捕まえてきた」

「いやあ、ははは……」

入ってきたのは藤林葵と、熊並みの体を持つ氷狼の魔獣——リクに襟首を銜えられているという滑稽な姿をした御門銀英だった。彼がまたサボっていたので、葵とリクに捕獲を頼んでいたのだ。

「うん。ありがとう、葵ちゃん。さてさて銀くん。戻ってきたからには副会長らしくビシバシ働いてもらうわよ！」

「会長は人使い荒いなあ。うちにも有給休暇つてのがほしいよ。年に三百六十八日ほど」

「一年越えてるわよ。サボってる銀くんが悪いんだから、本当なら三日ほど縛りつけて——」

その時、机の端に置いてある電話が鳴った。それは生徒会魔術師のサポートをしている、この学園で魔力が開花した者たち——風紀委員からの連絡用のものである。

月夜は銀英に対しての言葉攻めを止めると、受話器をとって耳に近づけ——

——表情を僅かに曇らせた。

「何かあったのかい？」

リクに銜えられたままの銀英が問う。受話器を戻し、月夜は釈然としない様子で口を開く。

「うん、まだよくわからないのだけど、とにかく行ってみるわ。だから二人とも来て」

銀英と葵は同時に頷き、そのまま三人と一匹は生徒会室を後にした。

炎の退魔師（9）

薄暗い路地裏に咲く、幻想的な蒼い火の粉を散らす刀を携えし少女。『退魔師』と名乗った彼女がそこに存在するだけで、この路地裏が異世界へと変貌したような錯覚に陥る。

実際に結界を張ったと言っていたから、外とは隔離された空間になっっていることは素人の魁人にも何となく理解できていた。

「タイムシ？ タイマシって、『魔』を『退』ぞくって書くあの退魔師か？」

魁人の疑問というよりは確認といった問いに、紗耶は素っ気なく訊き返す。

「それ以外何があるのよ？」

「いや、『大麻』……とか」

ピキリ、と彼女の額から変な音が聞こえた。そしてヤクザも裸足で逃げ出しそうな形相で睨んできたので、とりあえず頭を下げて謝る魁人。

「えーと、てことは、その刀は退魔師の武器ってやつか？」

「フン、そうよ。これは千年近い歴史を誇る神代家に、代々伝わってる神宝・蒼炎龍牙。強力な火霊が込められた唯一無二の破魔刀で、あたしはその七代目の『鞘』となった継承者。ふふ、どう？ 少しはあたしを崇める気になった？」

何か誇らしげに胸を反らす紗耶。

「……七代目の、『サヤ』？ 何だそれ、お前って偽名だったのか？」

「違うわよ馬鹿！ 蒼炎龍牙は術者の体の一部と同化してんの。あたしの場合は左腕。つまり人間自身が刀の『鞘』になるってことよ。まあでも、蒼炎龍牙を収められるほどの魔力を持った人はそうはいないわ。だから千年経っても七人しかいないの。わかった？」

わかったようで、そうでもなかったりする。言葉の意味は理解で

きるが、感覚的にはさっぱりだ。とりあえず彼女は凄いつてことで。
「お前、何か今日はやたら親切に教えてくれるな」

昨日は月夜に全部任せていたからかもしれないが、魁人は彼女に
無愛想で不親切なイメージを勝手に抱いていた。

言われて気づいたように、紗耶は顔を背けて言い訳がましく開口
する。

「て、敵が出てくるまで暇なだけよ。あたしは退屈が嫌いな。あ
と弱虫と銀英と胡麻豆腐も大っ嫌い」

さりげなく個人名称が聞こえたような気もするが、今の状況と彼
女の言った『敵』という意味、それらをよくよく噛み締めると――
そんなことに突っ込んでいる場合ではなかった。

「てか待ておい！ 敵って、ここ何か出るのかよ！？」

「出るわよ？ 魔獣が」

何を今さらというように彼女は首を傾げた。

「な、何でそんなものがこんなところにいるんだよ！」

「魔脈に惹かれるのは何も人間だけじゃないつてことよ。あたしは
学園の理事長から那緑市に巣食った魔獣や悪霊の駆除も依頼されて
んの」

それが本当なら、彼女は生徒会の仕事だけを学園に雇われたわけ
じゃないつてことか。しかしそんなことは魁人には関係ない。激情
に任せ、叫ぶ。

「ふ、ふざけんな！ まだ人間の方がマシじゃないか！ 何で俺を
巻き込んだんだ！？」

耳を塞いでその声を凌いでいた紗耶は、苛立たしげに眉を吊り上
げる。

「あーもう、うっさい！ 成り行きよ、成り行き。それにあんたが
生徒会にとってどれだけ使えないか見る必要があつたし、あたしも
あんたの眼に気になることが――！？」

「――ッ！？」

その時、ゾワツとした薄気味悪い感覚を魁人は覚えた。全身に鳥

肌が立つのを感じる。

紗耶はバツと振り返り、路地裏の奥に視線を這わす。

魁人も見ると、奥の暗がりの地面に黒ペンキでも零したような直径一メートルほどの水溜りができていた。この禍々しい気配は、あの水溜りの中から感じられる。

「来るわ！」

紗耶が蒼炎龍牙を構えた瞬間、水溜りの中から何か巨大なものが飛び出した。

影が物質化したような黒い塊は、五メートルはあるかという長い胴体に無数の足を生やし、四つの赤い目が鈍く光ってこちらを獲物と認識している。

強烈な嫌悪感と吐き気を催しそうな姿をしたそれは、まさに大百足。

「な、な、な」

魁人は自然と後ずさっていた。魔獣というから葵の使い魔である狼みたいなものを想像していたが、あれは魁人の想像など遥かに凌駕する妖怪じみた姿をしている。

脳内に警戒音が響く。魔術師や魔獣の存在を知らなかった昨日の朝までの自分なら、間違いなく腰を抜かしていたことだろう。

そして、これは魁人だから見えているのだが、大百足の全身に透明な光——魔力が血管のように張り巡らされ、その根源には例の炎が確認できる。

「死にたくなければそこを動かないことね」

告げると、紗耶は大百足に向かって疾走する。それに反応した大百足は、迫りくる紗耶に向かって口から緑色の粘着質な液体を吐き出した。

だがその液体が何なのか知る前に、紗耶は振り払うように蒼炎龍牙を一閃。蒼い炎で液体を瞬時に蒸発させる。

紗耶は常人離れた脚力で高く跳躍すると、三メートルほどの高さにある大百足の脳天に蒼き炎纏う破魔刀を大上段から叩きつけ――

―られなかった。大百足は素早く身を捻って紗耶の攻撃をかわすと、『キイイイイ』と百足とは思えない鳴き声を発しながら襲いかかる。

― 魁人に。

「は？」

もの凄いスピードで眼前に這い迫る黒長い異形。魔眼のせいでさらに輪をかけておぞましく見えるその怪物を前に、魁人は悲鳴の代わりに間拔けた声が漏れた。

状況を理解するのに数瞬かかった。逃げねば、と脳が全身に信号を伝えた時には既に遅いところまで怪物が迫ってきていた。

ついでに言えば足が竦んで逃げるに逃げられない。応戦するという選択肢は端から存在していないし、そんなことすれば二秒と持たずにあの世行きだ。

自分が持っている唯一のオカルト的な力――魔眼。しかし魔力が見えるだけのこの眼に何ができるかと問われれば、何もできないと即答できる。今回は月夜から逃げた時とはわけが違う。相手が魔術ならどこかに『穴』を探せばいいかもしれない。だが、大百足に見える魔力は、種も仕掛けもないただ純粹に『死』を与える生ける暴力だ。

そんなもの、見えたところで何を看破しろというのか。今の状況をわかりやすく三文字で表現すると、『死んだ』である。

（くそっ！ 学園に来てから九死イベントが勃発しすぎじゃないか畜生！ 死んだら化けて出て俺を巻き込んだあの馬鹿女を呪ってるッ！！）

退魔師に対して返り討にされることを考慮せず、心でそんな絶叫を上げる涙目の魁人。確実な『死』との距離が残りメートルを切った。その時――

ギイイイイイイイイイイイイイツ！？

大百足が、何か見えない壁にでもぶつかったように弾かれた。

「……、へ？」

呆けた声を上げ、魁人は思い出す。そこは丁度、紗耶が結界を作るための護符を貼った境界線だった。

——死にたくなければそこを動かないことね——

「そういうことかよ……」

魁人の眼は護符に込められた魔力は見えても、結界までは映さない。だからそこに壁ができていたなんて気づかなかった。というか、紗耶が普通に出入りできていたことを考えると、効果があるのは魔獣だけなのだろう。

と、仰向けに倒れた魔獣の体を蒼い炎が包む。断末魔の叫びを上げ、炎の中でクネクネと気持ち悪くもがく大百足の横を、燃える退魔の刀——蒼炎龍牙を握った紗耶が歩いてくる。彼女は左掌に方陣を生み、本当に鞘に納めるような動作で蒼炎龍牙を仕舞った。

（やった……倒した）

刀を納めた彼女と動かなくなる魔獣を見て安心し、『死ぬかと思っただじゃないか！』と結界を越えて彼女に駆け寄り叫ぼうとする魁人。だがその前に、彼女が不服そうに口を開く。

「やっぱあんた使えないわ。あの不良の不発だった力は、もしかしたらあんたが相殺したんじゃないかって思ってたけど、あたしの思い過ごしだったようね」

「な！？　じゃあ、お前、わざと魔獣に俺を襲わせたのかよ！？」

「そうよ。この紗耶様が一撃で仕留められないわけじゃないじゃない。」

基本、この手の魔獣は本能的に自分より強いと感じたものとは戦いたがらないから、初手でそう感じさせたら、面白いくらい簡単にあなたの方へ向かって行っただわ」

「て、てめえ……」

沸き上がる怒りに拳を握る魁人。何か、何か一つでもこいつをギヤフンと言わせるものはないだろうか。しかしまだ付き合いの短い魁人には紗耶の弱点など思い当たらず、

（今度こいつの弁当の中身を胡麻豆腐でいっぱいにしてやるのか…）

そんな『その後』のことを一切考えていない作戦しか思い浮かばない（そもそも彼女が自作弁当派なのかもわからない）。

と――

「！」

魁人の眼が、燃えている大百足の魔力の光が活発になったのを映す。

「文句があるならどうぞ御自由に」紗耶はまるで気づいていない。

「虫ケラに何を言われようが、この紗耶様は動じな――」

「避ける馬鹿！」

紗耶を突き飛ばすようにして魁人は飛んだ。一瞬遅れて大百足の頭が燃えながら二人のいた場所を空振りし、その先の壁に衝突する。どうやらそれが最後の悪足掻きだったらしく、大百足はその場に崩れて燃え尽きると、黒い灰となって風に流されるように消えていった。

それを見届け、魁人は安堵の息を吐く。

「ふう、今度こそ終わったみたいだな――ん？」

何か『あわあわ』という声が聞こえて下を見ると、リンゴのように顔を真っ赤にした紗耶が口をパクパクさせていた。傍から見れば、魁人が彼女を押し倒している絵になっている。

「あ、あの、えーと……」

「さっさと、どけえッ――！」

「へぶあっ――！」

顔面に頭突きをくらい、魁人は強制的に跳ね除けられた。

炎の退魔師（10）

約三十秒後。

「あんた、よく今のわかったわね」

制服の汚れを叩いた後、紗耶は結界を形成していた護符を剥がしながら感心したようにそう言った。その向こうで、地面に腰をつけている魁人は片手で鼻を押さえながら答える。

「み、見えたんだよ。その、魔力の動きみたいなのが」

（見えたですって？ こいつの眼……あたしが感知できない魔力まで見えてるの？）

彼が力を発現していない人間の、あるかどうかもわからない魔力まで見えていたことを思い出し、もしかして凄いのでは？ という考えが浮かぶが、すぐに取り消す。こいつは自分の嫌いな弱虫なのだ。だから――

「……礼は言わないわよ」

「いや言えよ」

「あたしを押し倒して鼻血出してるやつに礼なんて言いたくない」

「ばっ、これはお前の頭突きのせいだろうが！ 興奮とピーナッツで鼻血が出ると思うなよ！」

尻餅について鼻を押さえるという滑稽な姿で吠えてくる魁人。しかし紗耶は彼の喚きなど黙殺して結界の護符をカバンに片づける。

「まあいいや」魁人は諦めたように息をつき、「ていうか、魔獣っていつでも葵先輩の犬とは全然違ったよな。姿はいろんなものがあるとしても、何かこう、纏っている空気とかそんなのが自然じゃないっていうか」

「当たり前よ。『使い魔』ってのは基本的に邪気を抜ってるもの。そうしないと主人が喰い殺されることになるから」

「へ、へえ、そう……」

そんな場面でも想像したのか、魁斗の顔色が青くなる。その時、

スカートのポケットから携帯電話の着信音が鳴った。すぐに紗耶は携帯を取る。

——月夜詩奈からだった。

『あつ、紗耶ちゃん？ そっちはもう終わったかな？』

『はい、たった今終わりましたよ』

先輩にはすっかり敬語を使う紗耶（銀英は例外）。生徒会には出られないと言っておいたはずだが、一体何の用だろうか。

流石に電話中のマナーは守るらしく、魁人は無言で立ち上がって制服の汚れを落としている。

『あははー、よかった。じゃあ、すぐに学園まで戻ってほしんだけど、いいかな？』

「？」紗耶は首を傾げ、「別にいいですけど、何かあったんですか？」

『うん、ちよつと厄介そうなのがね。さっき葵ちゃんとリクちゃんを迎えに行かせたから、詳しいことはこっちに来てからで——あつ！ ちよつと銀くんあそこ見て！—— 紗耶ちゃんごめん、とにかく一旦切るね—— プッ』

どこかただ事ではない様子で電話を切った月夜。一体何が起きているのだろうか。

すると、電話が切れたタイミングを見計らったように天から巨大な青い物体が降ってくる。それは紗耶と魁人の間に、トス、というやけに軽い音を立てて着地したと思えば、グルル、と唸り声を發した。魁人が『うわっ』と驚いたような声を發している。

恐らく横のビルの屋上から飛び降りてきたと思われるそれは、熊ほどの体格に白い鬣と青い体毛を持つ狼——リクである。

「紗耶、迎えにきた。乗って」

その氷狼の魔獣に、白馬の王子様よろしく跨ったポニーテールの少女——藤林葵は、紗耶を視界に捉えるなり抑揚のない口調でそう言ってきた。

「月夜先輩から聞きました。緊急事態みたいですね」

「そう。だから、紗耶も来てほしい」

紗耶は素直に頷いた。葵はとても緊急事態とは思えないほど無表情だが、とにかく月夜の電話からして由々しき事態なのは確かだろう。と――

「お、おい、何かあったのかよ」

一人置いてけぼりにされていた弱虫、もとい魁人が訊いてくる。

紗耶は無視しようとしたが、葵が彼にも言葉を振った。

「魁人も来る？」

その言葉に、紗耶はリクに跨りながらチラリと魁人の反応を伺う。一緒に来てほしいなんて砂粒ほども思っていないが、もしかしたら役に立つのではと考えている自分が……、

（あーあーあー！ あんなやつと一緒にいても邪魔になるだけ。さっきのは偶然！ 何考えてんのよあたしは！）

そんな彼女の願い通り（？）、魁人は表情を曇らし、それを見せないよう僅かに俯いた。

「いや、いいです。俺は、ただの一般人ですから」

仮にも先程自分を助けた魁人の言い草に、紗耶は自分でもわからないままどこかムカつとした気持ちになった。

「ホント、ただの一般人だから……」

まるで自分にも言い聞かせるように、魁人はもう一度同じことを呟いた。

炎の退魔師（１１）

既に夜の帳が下りた中、魁人と別れた紗耶がリクに乗って連れてこられた場所は、メイザース学園の中心を分断するようにして存在する常緑樹や桜の樹が繁った公園——その中にある全部で四面のテニスコートだった。

広くて設備が充実し、森と芝生の広場に囲まれ、都会の中心なのに大自然の中にいるような感覚が双方のテニス部員だけでなく一般生徒にも人気で、中等部テニス部・高等部テニス部・一般開放と日によってローテーションしている場所である。今日は高等部のテニス部が使用していたはずだった。

何でも、練習中だったテニス部員が次々と倒れたそうだ。現時点では六人の男女が原因不明の昏睡状態ということで公園の入口まで運ばれ、そこで救急車に乗せられているところだった。

表向きはまだ原因不明だが、月夜たち生徒会魔術師は彼らを診て一つの可能性を出している。それは――

「呪術？」

紗耶は月夜詩奈から聞かされた可能性を鸚鵡返しに呟いた。

今は自分たちと忙しく何らかの作業を行っている風紀委員が数人いるだけで、関係のない人間は全て追い払っている。よって、本来の氷狼の姿をしたリクを見て驚いている者はいない。

「呪術って、類感呪術とかですか？」

類感呪術とは、『形の似た物は互いに影響を及ぼし合う』という概念の下で呪法をかける魔術である。簡単な例としては丑の刻参り——藁人形に五寸釘を打つアレだ。

月夜はこめかみを指で押さえながら困ったように『うん』と唸り、

「そこはまだよくわかってないんだよ。でも呪術なのは十中八九、間違いないわね。その呪術の種類がわかれば解く方法も見つかる」と

は思っただけど……あはは、私は専門外だからあまり詳しくないのよね」

苦笑する月夜を見て、紗耶はふと思う。

「……あいつだったら、何か見えたりしたのかな？」

思わず呟いてから、ハツとする。自分はあの弱虫に何を期待しているというのか。

（さっきだってそうよ。せっかく葵先輩が誘ってくれたのに、気になったんならついて来いってのって違うそうじゃない！ だから何考えてんのよ、あたしは！）

なぜか、先程から妙に意識してしまう。

（あいつが凄いのはあの眼だけ。そうあの眼だけよ！）

妄想を振り払うように首を振る。本来なら、ただ見えるだけで何の攻撃的な力もない魔眼に紗耶が興味を持つことはないのだが、今はそう自分に言い聞かせないと何か落ち着かない。

「詩奈、銀は？」

リクの頭を撫でながら葵が周囲を見回して訊く。そういえば、来た時から銀英の姿が見えない。電話から聞こえた感じでは月夜の傍にいたような気もしたが。

「そうそう、それがね——」

月夜が手がかりでも見つけているような笑みを浮かべたその瞬間、

森の方から軽快な爆発音が響き渡った。

炎の退魔師（１２）

「いやあ、参ったね、これ」

鬱葱と茂る森の中、綺麗に整備されている石畳の道に立ち、生徒会副会長・御門銀英はとても参っているとは思えない気の抜けた声でそう言った。

学園内にあるとはいえ、日が落ちると肝試しをするには絶好の雰囲気醸し出しているこの森だが、生徒会の魔術師であり、陰陽道に連なった護符を専門に扱う符術師の銀英にはいつも通りの爽やか且つへらへらとした笑みを浮かべる余裕が当然あった。

「まさか犯人っぽい人追いかけて、こんなことになるとはねえ」

月夜が紗耶と連絡を取っていた時、白衣のようなものを纏った明らかな部外者が隠れるようにして自分たちを覗き見ていたのだ。月夜に発見されると逃げ出したので追いかけたが、あまり予想していない事態になってしまった。

突然、無数の影が白衣を護るように草陰から飛び出し、一瞬で銀英を包囲してしまったのだ。

最初、反射的に発破符を起爆して影の一部を吹き飛ばしたのだが、それで数が減ったとは思えなかった。パツと見、まだ二十はいる。両手に三枚ずつの護符を構え、何か含図的なものがあれば一斉に襲いかかってきそうな緊迫状態の周囲を眼球運動だけで見回す。

ギチギチと蠢く影の正体は、小型犬ほどの大きさをした蟲だった。五本の触覚に、硬そうな外皮に包まれた平たく紡錘形の体は灰色。眼は潰れているのでは思うほどの小さなレンズが一对あるだけで、本当に見えているのかは本人に訊かねばわかるまい。毛の生えたバツタのような足が六本あることから昆虫に部類してもよさそうだが、果たしてこれほどの大きさをした昆虫が日本、いや世界にいるだろうか？

「？、いや蚤？ …… 違うな、白っぽいから虱かな？」

そう、まるで風をベースにそれらを全部混ぜ合わせたような姿。一体一体から強烈な呪力を感じる。魔獣、のような感じもするが、恐らく違う。

「呪い……蟲……もしかすると——!?」

閃きかけたその時、大風の一匹が緊迫状態に耐えかねたように飛びかかってきた。普通の風ではありえない、蚤のように後先を考えていない天に向かっての大跳躍。こんな大きさになると、貼りつかれたら血を吸われるどころの話ではないだろう。

しかもその一匹を引き金に、他の大風たちも一斉に飛び跳ねる。だが、銀英の表情から余裕が消えることはなかった。構えていた六枚の発破符——火の属性が練り込まれた爆発を起こす護符——を投擲。そして素早く宙空で九字を切り、両手で印を結ぶ。

「——発ッ!」

六枚の護符が、空中で同時に起爆した。六つの火花が、巻き込んだ大風の破片を辺りに汚らしく撒き散らす。だが当然、この一撃だけで全てを迎撃できるわけがない。銀英は空きのできた後方にバックステップしてその場を離れると、再び九字を切る。

ドカドカと、先程まで銀英がいた場所に大風たちが降り積もるように着地。気色悪く蠢く小山が完成する。

「蟲だから火に弱いかなあって思うんだけど、それは紗耶の専売特許だからねえ。僕は僕で、一番得意な土行符を使わしてもらっさ」

ニイ、と唇を斜に構える銀英。いつの間に設置したのか、大風が山となっている場所を中心に十数枚の護符がばら撒かれていた。

銀英が発破符とはまた違った印を結ぶ。

瞬間、全ての符から岩塊が出現。内側に向かって隆起するそれが、山積みになってギチギチと軋めく大風を押し潰し、または串刺しにした。

「殲滅は完了。でも、逃げられちゃったな。会長に怒られないとい

いけど」

銀英は困ったように肩を竦めると、岩塊に押し潰されて全滅している大風の群れに近づく。

蟲の死骸からは血というよりは体液といったものが飛び散り、ただでさえ吐きそうなほどグロテクスな絵に拍車をかけている。

銀英はそんなことなど全く気にする様子もなくその場にしゃがむと、転がっているどこの部分ともわからない破片を観察するように眺めた。

そして、ふうん、と呟くと満足げに唇を緩めて立ち上がり、白衣が逃げていったと思われる通路の先に視線を這わす。

（こつちつて確か……）

「うわっ！？ 何よこれ…… 蟲塚？ 汚いわね。ていうか悪趣味。あたしはこれの掃除なんて絶対やらないわよ！」

そんな銀英の思考を妨害するかのような声が背中から聞こえた。振り向くと、生徒会の女性陣があからさまな嫌悪感を全身で表現しているところだった（若干一名を除く）。

炎の退魔師（13）

「それで銀くん、犯人は？」

「逃げられた」

当然のような月夜の質問に、銀英は悪びれることなく笑顔で答えたものだ。

「はあ？ 何やってんのよあんた！ サボりすぎて腕鈍ってんじゃないの？ このまま副会長の座をあたしか葵先輩かりくに譲ることね」

「……、ドジ」

リクの背中をさすりながら、葵も一言罵倒した。

「たははは……いやあ、何か耳が痛いなあ。こんなのが邪魔してきただんだからしょうがない、ってことにしてくれない？」

銀英は未だピクピクと動いている部分もある大風の蟲塚を指差してそう言った。しかしそんなことは紗耶には言い訳にしか聞こえない。

「だったら結界くらい張りなさいよ。人が集まってきたら面倒になるじゃない」

「誰かさんが僕の結界符を強奪してなかったらそうしたさ」

「……あ」

そこは言い返されて口籠る紗耶。まさか四枚で全部だとは思わなかった。一枚は今も所持しているが、残り三ヶ所に貼ったものは後で回収しなければならない。もっとも、今は結界として成り立っていないから放っておいても別に構わないが。

「ねえ、銀くん。この気持ち悪い虫の魔獣は何な——ひゃっ!？」

月夜が岩塊に組み込まれている蟲の死骸に近づいて問おうとしたその瞬間、ピュツと白い体液が狙いすましたかのように飛び、彼女は可愛い悲鳴を上げて間一髪それを避ける。

「会長、それは魔獣じゃなくて『蟲』だよ」

そんな月夜を面白がるように見ながら、銀英はさらりと答えた。
紗耶が首を傾げる。

「コ？ ああ、『蠱毒』のこと？ あのいろんな毒虫を共食いさせて、生き残ったのを呪術に使うってやつ」

蠱毒を生み出す蠱術とは、犬神や厭魅と並んで日本古来より存在する原始的な呪術である。共食いは皿などの上で行わせ、生き残った蠱は磨り潰して主に毒として使われていたらしい。まさに読んでは字のごとくである。もっとも、毒以外にも蠱に相手を喰わせたり、取り憑かせて呪殺したりなどの用途がある。共食いさせるのも蜘蛛や蛇、蛇のような毒虫だけではなく、犬や狼などの様々な動物まで使っていたとか。

「でも待って、類感呪術ならまだしも、蠱術なんて素人にできるわけじゃないじゃない」

「素人じゃないとすれば？」

「！ まさか本物の呪術師がいるって言うの！？」

魔脈の影響で魔力を得、それによって偶然呪いが成功したような素人ではなく、本物の呪術師。蠱術は生贄による『生』のエネルギーを扱う分、生半可なことでは扱えないのだ。しかし、ここにその蠱が確かに在る以上、本物がいることで得心がいく。

「えっと、とりあえず銀くん、みんなの呪いを解く方法はわかるの」
話の論点を変更し、月夜が訊く。

「そうだねえ、今のところ方法は二つかな。まず『毒を以て毒を制す』。つまり相反する蠱を使って呪いを中和する方法さ。もっとも、これはどこかの巫蠱術を扱ってる術者を捜すところから始めないといけないし、薬となる蠱も一から作らないといけないからそれはもう時間かかるよ。でき上がるころには呪殺は完了してるんじゃない？」

他人事のように平気で最悪の事態を口にする銀英。しかし、その辺のことも考慮しておかねば呪いをかけられた者を救うことはできないということだろう。

「呪殺か……うちのテニス部ってそんなに恨まれることしてんの？」
世間の評判は普通。強くもないし弱くもない。どこか別の学校にいた呪術師が試合で負けた腹いせにっけてわけでもないだろう。となるとやはり、内部犯か。

紗耶の疑問に月夜が唸る。

「うーん、顧問いびりが凄かったって聞いてるわね。でもそれ一年くらい前のことだから。それよりも、もう一つの方法は？」

「術者——蠱主を殺す。もしくは見つけ出して呪いを解かせる。単純明快なやり方だね。僕はこっちの方を推選するよ」

「ていうか、もうそれしかないじゃない」

呆れ気味に、紗耶。まあ、確かにその方が簡単でわかりやすいし、自分好みではあるのだが。

「蠱主は銀が逃がした。どうやって捜す？」

痛いところを突いてきた葵に、ははは、と苦笑する銀英。そんな彼を横目で睨み、紗耶は一つ自信満々に提案する。

「リクに臭いを追わせるってのはどうですか？ ほら、一応魔犬に部類するわけだし」

「臭いの元がない」

「これらは？」

紗耶はその辺に散らばっている蠱の残骸を指す。葵が手近に転がっている破片の臭いをリクに嗅がせるが、クーン、という情けない鳴き声が返ってきた。

「無理。臭いが分散してわからないだつて」

「葵先輩、リクの言葉わかるんですか？」

コクリ、と頷く葵。流石は魔獣使い。リンクしているのは魔力だけじゃなく心もか、と紗耶は感心する。

「呪いを受けた人間にミョウガの根を煎じて飲ませると、呪いも解けて術者も判明万々歳……って言われることもあるけど、そんな上手い方法が本当にあるわけないからねえ」

陰陽道をかじっている分、一番こういう呪術に詳しいはずの銀英

がこの様子では、彼からいい案は出ないだろう。

「あーもう！ 逃がしたのは銀英なんだから徹夜してでも捜してきなさいよ！」

「えー」

「えーって言うな！ じゃあもう切腹よ、切腹！ 介錯はあたしがやるから安心しなさい！」

噛みつきそうな勢いで紗耶は喚くが、銀英のやる気のない態度はやはり変わらない。

すると、少しの間黙って何かを思案していた月夜がある一つの提案を口にする。

「魁人くん、手伝ってもらおっか」

その時の紗耶は、嫌そうな、しかしそうした方がいいような、そんな微妙な顔をしていた。

ちなみに、銀英が倒した轟——大風の死骸の山は、結局のところ紗耶が全部燃やして処分することになった。

間章(2)

薄暗い研究室の扉に凭れかかり、白衣の呪術師は息を荒げていた。く、く、く、くははははははははははっはあ！　面白い。

面白いじゃないですかあ！　愉快、愉快、そう、これは愉快と呼べる感情です。ははははははははあ！」

狂ったような哄笑が部屋の壁に反響し、奇妙で不気味な旋律を奏でる。

「生徒会。学園に雇われた魔術師。くく、あくまで私の邪魔をするつもりですねえ。しかあーし、そおーはさせませんよう。障害は多い方が楽しめるというもの。一人ずつ私の可愛い蠱の餌にしましうかあ。それとも、呪術師らしく呪ってあげましようかねえ」

と、少し思考し、彼は閃いたようにニヤリと口元を歪める。

「いや……そおーですねえ。舞台が整い次第、彼らも私の実験へ組み込んであげるというのも面白そうです。魔術師を使う……、なるほど、これは新鮮ですねえ」

人数を数えるように指を折り、四本目の薬指は折らずに上下に振る。

「となると、あの神代の御令嬢が一番使えそおーですねえ」

言うと、彼は白衣を翻して研究室の奥へ消えていった。

呪術的実験（１）

登校してから朝のＨＲが始まるまでの時間は、どこのクラスもだいたい似たような雰囲気だ。

入学してから五日目ともなれば、気の合う者たちで構成されるグループの一つや二つ、三つや四つは当たり前のようになてくる。

しかしまだ初番、構成メンバーは中学の時から仲のよかった者たちが中心となっている。まあ、それも次第に変化していくことだろう。とにかくこの朝の時間は、挨拶を済ませた仲間同士で集まり、昨日見たテレビ番組のことや、新作ゲームの話、土日の過ごし方など、それぞれがくだらないと思える話題で賑わっていた。

その中で一番多く話題として取り上げられていることは――昨日学園のテニス部で起こった謎の昏睡事件だった。何でも、練習中に部員が六人も同時に倒れたのだが、彼らのどこにも外傷はなく、ガス等が漏れていたようなこともなかったと聞いている。食中毒でもなければ、新手のウィルスの線も薄い。なるほど、『謎』だ。

しかし魁人には、そのことに関して少し思い当たる節があったりする。

（魔術……なのか？）

他に考えられない。昨日の様子から、生徒会の魔術師も動いているようだし。

「呪いだって、絶対に呪いだって！ テニス部に恨みを持った金髪巨乳美女が毎晩部員の名前が書かれた藁人形に釘をカンカンとたたき、魁人の机にしな垂れかかるようにして、梶川邦明が妙に恍惚とした感じで言ってきた。魔脈のせいで魔術に興味関心のある者が集まっているためか、梶川と同じような噂をしているグループもちらほら見かけてはいる。だが――

「何で金髪巨乳美女なんだよ？」

「オレの妄想」

「お前、やつぱ変った趣味してるな」

「いやいや、オレは美女であれば変な電波拾ってようがゴキブリって美味しいよねって言われようが返り血まみれで絶叫しながら包丁振り回してようがオールオッケーさ！」

「……せめて最後のはやめとけよ」

魁人は額に手をあて、これ以上ないほどわかりやすく溜息をついた。ちなみに梶川との関係はこの通り回復済みである。

「あ、あの、羽柴君」

そんな時、横から遠慮がち且つ消え入りそうな声がかげられた。額から手を外して顔を向ける。と、そこには鈴瀬明穂の姿が。

「ああ、鈴瀬か……って、どうしたんだその隈！？」

魁人は目を丸くする。彼女の目の下には、それはもうペンか何かで描いたような陰影ができていたのだ。しかも足元がおぼつかないようにふらふらし、今すぐ倒れてしまいそんな危うい感じがする。

「その、私、羽柴君が心配で……。あの後、酷いことされたんじゃないかって思ったら、その、一睡もできなくて……」

「あつ……」

そういえば彼女のことをすっかり忘れていた。様子からして一応家には帰れたようだが、遅くまで街を駆け回り、必死に自分のことを捜している姿が一瞬目に浮かんた（妄想だが）。

「いや、まあいろいろあつたけど……。ほら、この通り俺は無傷だからさ。心配してくれてありがとう、鈴瀬」

軽く腕を回しながら柔らかに微笑んで言うと、彼女は『よかった』と安堵の表情を見せる。心なしか、少し隈が薄くなったような気がした。と――

「ちよいちよいちよいちよい待ってくださいよ魁人君！」焦ったように、梶川。「アナタはオレを差し置いて我がアイドル・鈴瀬さんと昨日一体どんなステキイベントを繰り広げたって言うんでぶぐつ！？」

飛びかかりそんな勢いだった梶川は魁人に頭部を掴まれ机に叩き

伏せられた。

「今の話聞いて何でそう思えるんだ、お前は。その耳はアレか？
取り外し可能なレプリカか？」

「ふぁ（だ）、ふぁっふえふふへはんほふぁはほはほうはんふぁほ
ん（だつて鈴瀬さんと仲よさそうなんだもん）」

「机とキスしてる状態で喋っても何言ってるかわからないぞ、梶川」
そんな風に押さえつけているのは自分なのだけれど。

「悪い、鈴瀬。こいつの言動は一々気にしないでいいから」

「う、うん。でも、梶川君、そろそろ……」

見ると、梶川がギブギブというように机を叩き始めていたので、
魁人は仕方なく押さえつけていた手を放してやった。すると梶川は、
ぷはぁ、と平泳ぎの息継ぎをするように顔を起こす。

「あー、いや、まあ、うん。これでオレが鈴瀬さんとお付き合いで
きるかもしれない繋がりができたってわけだ。グッジョブ、魁人！」

「えっと、ごめんなさい」

「フラレター!？」

丁寧に頭を下げて断られた梶川は、がはっ、と起き上がったばかり
なのに再び机に突っ伏した。彼の何かが崩壊したような幻聴まで
聞こえた気がする。とりあえず、哀れみの視線を送りつつ心の中で
拜んでやった。

これも梶川にとっていい教訓になるのでは、と適当に思いながら、
魁人は鈴瀬に顔を向ける。自分なんかを心配したせいで一睡もして
いない彼女を、どうにか休ませてあげるべきだ。

「鈴瀬、なんだったら保険室で寝てこいよ。先生には俺から言つと
いて——」

しかし、魁人の言葉は最後まで紡がれることはなかった。
言葉の途中で鈴瀬がふらついたと思うと、

彼女は全身の力が抜けたようにゆっくりと——

——倒れた。

最初は、安心して眠気が最頂点にまで達したのかも、と思った。だが、違った。倒れた彼女は苦しそうに胸を押さえて喘ぎ、次第にその声も弱くなって、消えた。胸を押さえていた手は力なく垂れ、表情はまるで悪夢でも見ているような、そんな苦渋に満ちたものだった。

不幸中の幸いは、倒れたところが机と机の間だったということくらいか。

「おい鈴瀬！　鈴瀬！」

梶川も含めた教室中の誰もが呆然としている中、一早く我に返って状況を理解した魁人が彼女を抱き起こす。その際、ガシャーン、と椅子が倒れたが、気にしている場合ではない。

彼女の呼吸は死人のように静かだが、止まっているわけではない。胸も僅かに上下しているし、心臓がまだ力強く鼓動しているのを抱き起こした手を通じて感じる。

やがて誰かが悲鳴に近い声を上げるが、魁人の耳には入らない。

「お、おい魁人、鈴瀬さん、一体どうしたんだよ」

梶川が不安げに覗き込んでくる。どうしたのかなんて、こっちが聞きたいくらいだ。

——テニス部の昏睡事件——

そのフリーズが脳裏を過る。まさかと思い、意識を眼に持っていない。

魁人の眼は魔眼。その力は視界の範囲内に在るあらゆる魔力を映すこと——と今は納得している。この眼で鈴瀬を見れば、あるいは何かがわかるかもしれない。

「——ッ!?」

見たくなかった。見えなければいいと思っていた。そうだったら、彼女は魔術とは関係ない、過労か何かで倒れたのだろうと考えることができた。

でも、見えてしまった。昨日までは彼女になかった光——魔力を。

場所は彼女が押さえていた胸の辺り。形は、豆電球でも炎でもない。これは――

（蜘蛛？）

種類で言えば、ハエトリグモに近い形状と大きさをした光だ。それに――

（これ、動いている）

揺らめきでも明滅でもなく、まるで生きているように八本の足が動作している。

とり憑かれている。よくわからないが、もしかするとこれはそういうものなのかもしれない。

魔獣か悪霊に偶然とり憑かれたのかもしれないが、もしこれが誰かが作為的にやったもので、テニス部の昏睡事件も同じだとすれば……。

（――許せるかよ！）

くそつ、と毒づき、魁人は拳を強く握った。知り合って間もないが、鈴瀬は確かに本気で、それも一睡もできなかったほど、自分のことを心配してくれていた。そんな優しい彼女が一体何をした？何もしてはいないはずだ。

怒りが湧く。自分の命は惜しいが、知り合いをこんなにされて黙っていられるほど、魁人はチキン野郎ではない。犯人がいるならば、必ずぶん殴ってやる！

たとえ相手が、魔術師だったとしても……。

その時、バン、と教室のドアが勢いよく開かれた。

教室中の視線が集う。入ってきた少女は、腰よりも長い綺麗な黒髪を揺らしながら、まっすぐ魁人たちの方へと歩み寄る。

少女は昏睡した鈴瀬を一瞥すると、忌々しげに舌打ちし、

「あんだ、その子連れて生徒会室まで来なさい」

彼女は――生徒会魔術師である神代紗耶は、凜とした声でそう言

つてきた。

呪術的実験（2）

第一校舎最上階——生徒会室。

「彼女で七人目。昨日の六人と合わせたら、これで十三人」

室内に敷かれた布団の上に鈴瀬を寝かせ、生徒会長・月夜詩奈は表情を曇らしてそう言った。

月夜の言葉通り、鈴瀬の隣には六人の男女が同じように寝かされていた。彼らも鈴瀬と同じように苦しそうな表情をしている。

保健室ではなくここに連れてきたのは、やはり魔術が関わっているからだ。教室一個分の広さはある生徒会室だが、流石に七人も寝かせていては周囲の家具もあるだけに狭く感じる。

その家具に関してなのだが、魁人は入室した途端に自分の目を疑っていた。家具そのものや配置が、前に一度入った時とは大幅に違っていたからだ。

資料や本が詰め込まれている棚、エアコンや天井の電灯はそのままだが、長机だったものは大きめのガラステーブルに代わり、それを挟むようにパイプ椅子がグレーのソファアへと進化し、フロアリングの床には豪華な絨毯が敷かれ、奥にあるどこかの社長室から奪ってきたような執務机の上には最新型のデスクトップパソコンまで設置されている。ついでに小さめの冷蔵庫らしき白い物体も隅っこに見つけた。

そして、棚と棚の間にある扉の向こうがシャワー室だということを考えると——そんな普通に人が住めそうな環境は、魁人のボロアパートなんかよりも百倍は至れり尽くせりである。普段ならツツコミの一つも入りたいところだが、今はそんな心の余裕はない。

「本当にこれ、呪いだっただのか」

鈴瀬を担いでここまで来る途中、紗耶からだいたいこの事情は聞かされている。蟲術とか言われてもピンとこないが、蟲を使った呪いだということは理解した。寝かされている他の生徒を魔眼で確認し、

鈴瀬の中にもいたあの蜘蛛がレントゲン写真のように見えたから間違いない。

「そう」

月夜が魁人と対面するソファーに腰を下ろす。彼女の隣には銀英が、魁人の隣には紗耶が座り、行き詰った会議のような重たい空気を作り出している。ちなみに葵は他に倒れた者がいないかリクと共に見回りをしているらしい。

「これは歴とした呪術。昨日の時点ではテニス部だけだったんだけど、この通り、今朝からは無差別になってきてるみたいなの」

ここに運ばれた被害者は、野球部の朝練中だった者や、美術室でコンクールの絵を仕上げていた者、鈴瀬に至っては何の部活や同好会にも属していない。学年も性別もバラバラ。無理やり共通点を挙げるとすれば、この学園の生徒ということくらいだ。もつとも、学園外で同じようなことが起こっていないともかぎらないが……。

「だったら、さっさとその呪いの犯人を捕まえてくださいよ」

「それができたらとづくにやってるわよ。それに今回の相手は素人じゃなくて本物の呪術師。一筋縄じゃいかないのよ」

自分がスカートを穿いていることなど全く気にせず紗耶は足を組み、ついでに腕も組んで不機嫌そうにそう言った。彼女が不機嫌なのは、自分が目を光らせていたにも関わらず、さらに七人も被害者を出してしまったからだ、と銀英がこっそり教えてくれた。

「まだ犯人もわかってないから、危険だからって生徒たちを帰すわけにもいかないのよね」

月夜は困ったように頬に手をやる。彼女の言っていることはわかる。帰した生徒の中に犯人の呪術師がいるかもしれないということだろう。

「犯人の特徴は白衣を着た恐らく男。でもそんな情報、着替えられたら意味なくなるからねえ」

「？ 銀先輩、何でそんなことわかってるんですか？」

魁人の疑問には月夜が答える。

「昨日、ちょっと犯人と接触したのよ。暗かったから顔はわからなかったんだけどね。白衣を着てるだけじゃ、生徒か先生かもわからないし」

「銀英が逃がすからこんな面倒なことになったのよ」

「いやもうそこは引つ張らないでほしいな」

紗耶に睨まれ苦笑する銀英。昨日紗耶と別れてから何があったのか、大まかにわかったような気がする。

魁人は呪いを受けた生徒たちを見やる。

「どうにかその……『蠱』ってやつを取り除けないんですか？」

できることならとづくにやっている、そんなことはわかってるのだが、本当に苦しそうな皆の顔を見ると、訊かずにはいられなかった。

「残念だけど、犯人を捕まえないことには無理なのよ」

試行錯誤したが、もうそれしか方法がない。月夜の表情は、そう語っていた。

「無差別に人を呪う犯人の目的は何なんですか？」

「それも捕まえてみないことにはわからないさ」銀英も真剣な顔で、「まあ、魔脈の上に建っているこの学園をものにしたい魔術師は少なくないから、外部の線も考えた方がいいかもね。可能性は薄いけど」

学園を——この土地を奪うには、十人ちよつとを呪ったくらいでは意味がない。それこそ百人単位で呪いをかけないことには、学園の上層部は重い腰を上げないだろう。銀英は、そのようなことを後で付け足した。

「鈴瀬らは、もしずっとこのままだったら、その、どうなるんですか？」

「死ぬわね」

それには紗耶が、非情とも言えるほど素っ気なく答えた。

「お前、何で平気な顔でそんなこと言えるんだよ」

「フン、あんただって頭ではわかってるんでしょ？ はつきり言っ

てあげたんだから文句言わないでよ」

「だからってそんなストレートに言うことも——」

「あーもう！ うっさい！　すぐに殺さないってことはそれなりに意味があるんじゃないの？　まあ、術者が悪趣味なだけかもしれないけど」

「はいはい二人とも落ち着いて」

月夜が宥めるように言った時、ガチャリ、と廊下側のドアが開いて葵が戻ってきた。彼女の腕には、愛らしい子犬の姿のリクがぬいぐるみのように抱かれている。

「詩奈、他に倒れた生徒はいない」

彼女はドアを閉める前に、月夜に向かってそう報告する。

「そう。ありがとう、葵ちゃん。でも蠱が潜伏してるだけって可能性もあるから、まだ気をつけとかないとね」

月夜は彼女を労うように優しく微笑んだが、同時にまだ安心できないことも告げた。と、葵が今気づいたように無表情な顔を魁人に向ける。

「魁人、来てる」

「わう！」

葵が呟くと、リクがいやいやをするように体を捻り、彼女の腕から抜け出して尻尾を振りながらこてこてと魁人に駆け寄る。瞬間、魁人の脳裏に初めてリクと会った時の出来事がフラッシュバックされる。

「うわっ！　こいつまたか！？」

反射的に身を引いてしまい、横に座っていた紗耶と背中が密着する。

「ちょ、ちょっと寄らないでよ！」

「おやおやあ、天下の紗耶お嬢様がお顔赤らめてらっしゃいますねえ。いやあ、顔から火が出るとはこのことかな？　もしかして紗耶は魁人のことを——」

からかうように言ってきた銀英に、紗耶はさらに顔を真っ赤にし

て手近にあったクッションをプロ野球選手もビックリの剛速球で投げた。だが、彼はそれを首だけの動きでいとも簡単にヒョイっとかわしてしまう。クッションは彼の背後にあった棚にぶつかり、一体どんな力で投げたのか、軽快な音を立てて破裂した。羽毛が飛び散る。

「紗耶ちゃん……」

舌打ちする紗耶に月夜が笑顔を向ける。その何か黒いオーラのよくなものが具現化して見えそうな優しげで怖い笑みに、紗耶の肩がビクウツと跳ねた。

「後で、掃除してね」

「……は、はい」

あの紗耶が縮こまっているのは滑稽だったが、魁人はもっとおかしな状態になっていた。

飛びかかってじゃれつく子犬に押し倒されている、そんな情けない絵である。

「こ、これちょっとどうかしてくださいよ！ 噛む、噛まれる！？」

「大丈夫。リク、気に入った相手は噛まない」

葵がそう言っていると、銀英が面白いものでも見るようにニヤけた笑みを浮かべて立ち上がり、『そうそう』と相槌を打ちながら魁人たちの方に回ってくる。

「僕みたいに懷かれると、リクってけっこう可愛いんだよねえ。――

ほーらリク、お手」

――がぶりっ！

「痛い！？」

「銀は嫌いだから噛む」

「ええっ！？」

そこに呪いをかけられた生徒たちが並んでいるというのに、魔術師らにはまるで緊張感というものがない。いや、初めの重たい空気を考えると、そうでもないのかもしれないが……。

（というかこいつら、生徒なんてどうでもいいって思ってるんじゃないだろうな？）

魁人がそんな風に思った時、月夜がタイミングを見計らったように咳払いをした。

「……えつと、話を戻すけど、いいかな？」

言った刹那、場の空気が深刻モードに戻った……気がする。魁人にじゃれかかっていたリクは再び葵に抱えられ、銀英は苦笑しながら歯形のできた手を押さえて月夜の隣に戻る。魁人が慌てて姿勢を正すと、心なしか少し頬を紅潮させた紗耶が魁人との距離を一つ空けて座り直した。

皆の様子に月夜は、うん、と頷き、小さく息を吐いてから言葉を紡ぐ。

「まずはやっぱり、犯人の呪術師を見つけないことにはどうにもならないってことは確かだね。一応、風紀委員にも調べてもらってはいるんだけど、相手は本物。私たちが動いてもすぐには見つからないわ。でも、ゆっくり捜している時間もない。彼らは刻一刻と魁人くんが見た蜘蛛の蠱に蝕まれているわけだから」

手掛かりとなるものは非常に少ない。学園の秩序を魔術的に守る魔術師がこの場に四人もいるというのに、月夜の言葉はまるで絶望的なもののように聞こえる。

しかし、月夜は諦めてはいなかった。彼女の瞳に宿る光——言うなれば、希望の光が彼女には見えている。

そしてその光は、魁人に向けられた。

「だからお願い、魁人くん！ 君の眼なら、呪術師を見分けられると思うの。生徒会に入っとまでは言わないから、今回だけは力を貸してほしいの！」

月夜は頼んだ。

何の魔術も使えず、体術もよくて人並みで、魔力を見ることだけが取り柄の自分に――

下げた頭の上で両手を合わせ、ただ純粹に生徒たちを助けたいと

いう気持ちを表し、その生徒会長は、一般生徒たる自分に頼み込んだ。

「……何ですか」

そんな彼女、いや、彼女たちを見て、魁人は思った。

「何で先輩たちは、学園や生徒のためにそこまでするんですか？
命を落とすことになるかもしれないんですよ？」

月夜は顔を上げると、にっこりと、微笑んだ。

「魁人くんは、知ってる？ 私たち魔術師はね、一度交わした契約は絶対に破らないの。悪魔や精霊とかとの契約を破るってことは、術者が死ぬということ。それは人間でも同じ。命まではなくならないかもしれないけど、魔術師としての信頼は確実に失うわ。それにね、魁人くん——」

彼女は僅かに首を傾げ、どこかからかいの混じった口調で言ってくる。

「君はもしかして、私がただ雇われただけで生徒会長なんてやってると思ってるのかな？」

「！」

魁人は微かに目を見開く。そこにある天使のように優しげな微笑みは、とても『魔』術師なんて呼ばれる存在だとは思えなかった。

「銀くんも葵ちゃんも紗耶ちゃんも、それぞれに理由があって生徒会に身を置いてるんだよ」

魁人は他の三人を一人ずつ見ていく。銀英は爽やかに微笑み、葵は無表情、紗耶に至っては目を反らされたが、誰も月夜の言葉を否定しようとはしなかった。

一度目を閉じ、ゆっくりと息を吐いて心を落ち着ける。そして月夜をまっすぐ見、答える。

「わかりました。今回は、俺も他人事ではありませんし。それに——」

魁人はチラツと苦しそうに眠っている鈴瀬を見る。まだ彼女とは知り合つて間もない浅い関係だが、自分を心配してくるような人のために動くことに理由なんていらぬ。

「俺は最初から、そのつもりだったんですから」

そう告げた瞬間、月夜はパアッと満面の笑顔を咲かせた。

「ありがとう、魁人くん！ よかったよ、もしも断られたりなんかしたら――」

「あの紙に無理やりサインさせて俺を洗脳するつもりですか？」

魁人は昨日強引な手を使ってきた月夜のことを思い出す。だが、彼女はすまなさそうに、

「あ、あははー。ごめんね、あれはただの契約書なの」

「は？ でも、来ざる得なくなるって……」

「正式な生徒会のメンバーになれば、魁人くんを強制連行することもできるから」

……今のこの状態、もし自分が協力する気などなかったら強制連行になるのではないか。そう考えたりもしたが、現実には自分の意志で来ているわけだからいいか。

「えーと、まあ、とりあえず、俺の眼を使って犯人の呪術師を捜すということはわかりますが、高等部の生徒だけでも千人近くいるのに、どうやって捜すんですか？」

「あははー、そこをどうにかするのが私たち生徒会の仕事だよ」

月夜は、どこか含んだような笑みを浮かべてそう言った。

呪術的実験（3）

作戦会議が終わり、指示を受けた魁人と紗耶が去った後の生徒会室。

「それにしても、あれだけ僕たちと関わるのを嫌がってたのに、よく協力する気になったものだよなえ」

銀英はガラステーブルに護符を並べながら、月夜に向かってそう言った。その月夜は、蠱術の被害者たちの周りに『治癒』のルーンが彫り込まれた金属板を囲うように並べている最中だった。薄い円盤状のそれは『ブラクテアート』と呼ばれ、ルーンを彫る他には中世のドイツなどで通貨として発行されていた物である。

だが、呪いに対して治癒魔術など無意味に等しい。月夜だってそんなことは知っているが、何もしないよりはやった方がいいのとことだ。

ちなみに彼らだって紛れもなく学園の生徒。それぞれの教室では滞りなく授業が行われているのだが、生徒会は仕事を優先させるために授業をパスすることができたりする。

月夜は治癒の作業を続けながら、唇の端を少し緩めた。

「魁人くんは、基本的には友達想いの優しい子なんだよ」

「おやおや、会長も魁人にホの字かい？」

からかうように、銀英。しかし月夜は少しも動じず、

「あははー、そうだね。少なくとも銀くんよりはねー」

「あれ？　もしかして僕みんなから嫌われてない？」

リクに噛まれた右手はまだ歯形が残って痛いし、葵からは氷の視線で見られるし（彼女はそれが常だが）、紗耶は……言うまでもなく。

「そんなことないよ。銀くんは頼りになる私たちの仲間だもん。サボらなければもっと素敵♪」

彼女に逆にからかわれた感じがして、銀英は苦笑しつつ頭を掻いた。

月夜詩奈。

恐らく学園で一番生徒や教師の身を案じているだろう魔術師。魔術は大勢の人を救うために在る、それが彼女の考え方だ。だから、彼女の術式には人を直接傷つけるようなものは少ない。

どんな経緯でそんな考えを持ったのかは知らないが、目の前に呪いで倒れた生徒たちがいても、彼女はこの通り普段通りの対応ができる気丈さも備えている。

（本当は、すぐにでも呪術師を捜しに駆け出したいんだろうけどね）
無駄と知りつつ行っている治療術は、生徒たちの苦しみを少しでも和らげられるようにという願いの優しさだ。

とても真似はできないな、と無駄なことはしない主義の銀英は思う。

「さて、今回は僕もサボってはいられないねえ」

テーブルの上に並んだ何十枚という護符一枚一枚に魔力を込めながら、銀英は呟いた。そして対面のソファでリクと戯れている葵を見やる。彼女の氷のような無表情は、あのように自分の使い魔であるリクと過ごす時間だけ少し雪解けを見せている。

「葵、僕の作業が終わったら少し付き合ってくれないかい？　ちょっと気になることがあるんだ」

葵はリクとの戯れを止め、瞬間的に元に戻った顔を銀英に向ける。

「どこまで？」

彼女の膝の上にいる子犬リクも、同じことを聞くように『わん』と鳴く。

「西の旧校舎。今思えば、あの白衣はそっちの方に逃げていったからさ」

言っと、葵は『わかった』の一言だけで頷いた。

呪術的実験（４）

昼休み。大勢の生徒や先生たちが、高等部で最も広い空間のある第一体育館へと集っていた。

「臨時集会か。なるほど、これならみんな集まるよな」

そういうことである。月夜が理事長に掛け合い、事情を説明して協力を仰いだのだ。この集会自体は言わばカモフラージュだが、来週ある創立者際のことやダイレクトにテニス部のことなど、意外と話すネタはあったらしい。

魁人と紗耶は、体育館の陰に隠れて集まってくる人々を覗き見るように眺めていた。

『昼休みに生徒会で集会を開くから、魁人くんは集まった人たちの中に呪術師がいないか魔眼で見てほしいの。一応紗耶ちゃんは、戦えない魁人くんのボディガードね』

それが月夜から魁人と紗耶に与えられた指示である。この第一体育館は、校舎が立ち並ぶ区域とはグラウンドを挟んで存在しているため通路が一本しかない。つまり全ての生徒や先生はグラウンドを横切るか、その通路を通らないことには体育館に辿り着けないのだ。この位置からならその両方が見える。まあ、わざわざ靴を履き替えてグラウンドを横切るようなやつはいないが……。

「なあ、神代」

集まってくる人々に視線を這わしながら、魁人は後ろの紗耶に話しかける。

「『紗耶』でいいわよ、面倒くさい」

「いや、でも……まあいいや」

同年代の女の子を下の名前で呼び捨てにするのは少々抵抗があったりするが、彼女の場合は何かどうでもいい感じがしてきた。

「じゃあ紗耶、本当にこうやって見てるだけで、犯人が見つかるのか？」

「さあね。はむ……あ、美味しい。あんたのその眼、高まった魔力が『炎』に見えるんでしょ？ あむ……呪術師が人を呪ってる以上、常時魔力を高めてないといけないから、んぐ……見かけた時に一発でわかるはずよ。ま、あたしらが感知できればてっとり早いんだけど、むぐ……小さすぎてわかんないからあんたに頼むことになったのよ、仕方なく」

「そんなもんなのか。——って、こんな時に食うなよ！ 何だその袋いっぱいフルーツサンドは！」

「うっさいわね。昼ごはんよ、昼ごはん。好きなの、フルーツサンド。それよりこっち向かない！ 今見逃した中に犯人がいたらどうすんのよ！」

というか、見逃している人間なんてけっこういる。先生も含めれば千人以上の人間が一つの通路を使ってやって来るのだ。全員見ろというのは無理がある。この魔眼は、人間の体に宿る魔力は見えても、透視能力ではないので障害物越しには見えない。そしてその障害物には、人間も当然含まれる。つまり、一人の人間に魔力が見えていても、その向こうにいる人間には見えないということだ（どうも衣服は人間の一部分と同じ扱いになっているらしい）。

呪術師捜しの本番は、整列が終わって集会が始まった後である。無論、犯人が来ないという可能性もあるが、その場合はいなかった人間を調べた後（事務や警備の人たちはこれまでの休み時間に調査済み）、中等部でも同じことをすることになる。

それにしても、こうやって学園の人々を見てみると魔脈の上という環境を実感してしまう。小さな魔力の光はここからでは離れていて見えないが、何かの能力が発現していそうなほどの魔力を持っている人をちらほら見かける。だが今のところ、魔術師レベルの者はいない。

「本当にこの中にいるのかよ。この学園って、生徒や先生以外にも

魔術師がいるんだろ？」

メイザース学園の内部——主に森の中——には、結界で隠された魔術機関がある。そこには多くの魔術師がいるらしいのだが、彼らは犯人ではないという。なぜなら、彼らは魔脈を研究するため『学園』と協力関係にあるらしく、『学園』を害するメリットがないからだ。

『学園』から様々な支援を受ける代わりに、魔術師たちは『学園』を護る。そんな何かの生物の共存関係みたいなものが成立しているわけだが、当の魔術師たちは施設に引き籠っているため外のことはほとんど無関心。そこで彼らは子供を入学させ、『雇う』という形で魔力の開花した者や引き寄せられる魔獣から『学園』を護ることになった。それが、生徒会魔術師である。

そんなことを月夜から聞いているが、正直、魁人は信用していない。

「月夜先輩が言ってたでしょ？ 私たち魔術師は、はむ……契約は絶対に破らないわ」

そうは言うが、魁人の知る魔術師は生徒会の四人だけなのだ。

チラツと紗耶を見る。あれだけあったフルーツサンドはもうなくなりかけていた。食べている最中は幸せそうな顔をしていて、魔術師でも何でもない普通の、年相応かそれ以下の少女とさして変わらない。

「ちよつと訊いていいか？」

「何？」

紗耶は最後の一欠片を口に放り込み、惜しむようによく味わってから飲み込む。それを待ってから、魁人は訊ねた。

「最初から思ってたんだけど、何で生徒会なんだ？ 魔術師を雇うにしても、他の組織とか作ればいいじゃないか。普通の生徒の中には生徒会に入りたいやつだっているだろ」

すると、紗耶は呆れたように長い溜息をついてから億劫そうに答える。

「まったく、あんたってホント何にもわかってないわね。いい？

例えばその辺の素人が生徒会長になったとする。で、そいつは魔脈によって魔力が開花、変な特殊能力を発揮し始めるわけ。魔力を完璧に制御できないから力に溺れてしまい、私利私欲で力を振り回す。生徒会長である自分の方針に少しでも賛同できない人を皆殺しにするとかね」

「……」

「だから、学園の中枢である生徒会には魔力をきちんと制御できる人間がいた方がいいの」

「わかった？ と紗耶は確認してくるが、まだ魁人には得心がない点がある。」

「生徒会選挙とかはないんだろ？ 勝手に決められるって、それで他の生徒が納得するのか？」

「納得しないなら、させるだけよ。魔術的にね」

「さらにと危なそうなことを口にする紗耶。一体どんなことをするのだろう。例の『忘却部屋』とかいう部屋で記憶を弄られるとか……。ここは聞かないが勝ちだと判断する魁人である。」

「まあ、この学園に生徒会選挙がないのはパンフレットにも書いてあることよ。『生徒会の後継者は生徒会が決める』って感じになつてたと思うけど？」

「あー……」

「そういえば、梶川にパンフレットを見せてもらった時、隅の方にそんなことが書かれてあったような、なかったような。当時の魁人は生徒会になど微塵も興味がなかったので、その辺の記憶は吹けば消し飛ぶほど薄い。」

「もう一つ訊いていいか？ こういうことはあまり訊くべきじゃないかもしれないけど……」

「何よ？ スリーサイズなら教えないわよ」

「紗耶のスリーサイズ。梶川に言えば飛びつくだろうなあ、というくだらない妄想は一瞬で地平線の彼方まで吹き飛ばす。」

「いやそうじゃねえよ。えーと、月夜先輩が『ただ雇われているだけじゃない』って言ってたけど、紗耶も何か理由あって生徒会に入ってるんだよな。それって——」

「仕事よ」

「……は？」

即答した紗耶の言葉に、魁人は耳を疑った。

「あたしは『ただ雇われているだけ』って言ったの」

「え、じゃあ何であの時そう言わなかったんだ？」

「そんなこと言える空気じゃなかったでしょ。あたしだって空気は読めるわよ。それに」

「それに？」

「『仕事』ってのが、あたしにとって重要な理由になんのよ。契約を破れば魔術師の信用を失うって言うってたでしょ。あたしたち魔術師は、人の世に仇なす『魔』を滅することが使命。だからこそ、その『信用』が大事ななの」

紗耶の言ったことは、わからないでもない。除霊とかそういう仕事は、普通の人には見えない分、依頼主との強い信頼関係が必要……ってことなのだろう。

「そんなことよりもあんだ、話してばっかだけどちゃんと見てんの？」

「見てるよ。魔力がある人はちらほら見かけるから、魔術師レベルで炎に見えてるやつがいればすぐに教えるって」

まあ、全員を見れているわけではないのだけれど。

「フン、ならいいのよ。でもそろそろみんな揃うだろうから、あたしたちも中に入って——」

「そこで何をしているのです？」

ゾワ、と背後から人のことを嘗め回すような男の声がかけられた。紗耶の肩に何かが置かれる。それは、骨の上に直接皮を被せたよ

うな、細くゴツゴツした真っ白い手だった。

魁人も紗耶も、声の主から離れるように、しかしその姿を逸早く視界に捉えようとするように、振り返りながら前に飛んだ。

体育館裏の、雑草が生え放題になっている中にいたのは、着なれていない感じで紺色のスーツを纏っている男。三十代前半くらいだろうが、白髪と黒髪と丁度半分ずつの割合になった頭髮に、頬骨が目立つ細い輪郭。縁なしの眼鏡をかけ、漂白剤でも使っているのではという真っ白な肌は、痩せこけた体と合わせてまるで骸骨が服を着て立っているようである。

そんな彼の名を、魁人は思い出した。

「^{みとう}巳堂、先生」

呪術的実験（5）

第一体育館の舞台裏から、月夜は整列しつつある生徒たちを眺めていた。

貴重な昼休みの時間を割かれたことに文句を垂れる生徒もいれば、学園のアイドル的存在でもある生徒会長が登場するのを、コンサートに集まったファンさながらに首を長くして待っている者が多数。そんな彼らの熱烈なアピールを鎮圧するために、教師たちが忙しく静かにするよう働きかけている。

（紗耶ちゃんと魁人くん、まだ来てないみたい）

集会が始まれば魁人が上から魔眼で呪術師を捜す。その際に気配を隠蔽し、『そこに誰もいない』と一般人に誤認させるルーンを刻んだお守りを手渡すことになっているのだが、一向に二人は姿を現さない。

（もうすぐ始まるのに、どうしたのかな？）

銀英か葵に搜索を頼みたいが、彼らは気になることがあると言って高等部の旧校舎へ出向いたままだ。集会が始まるまでには戻ると言っていたが、彼らにも何かあったのだろうか。

急激に不安になる月夜。

そしてそれは解消されることなく、カモフラージュのはずだった集会は始まりを迎える。

呪術的実験（6）

みじゆんく
巳堂遊作。

生物教諭で、魁人たちのクラスの理科総合も担当している先生である。まだ一度しか授業を受けておらず、その授業も今一パツとしないものだったが、彼の骸骨みたいな容姿から一部の生徒に『スケルトン先生』なんてあだ名されていたのでよく覚えている。

「気づかなかった」

ぼそり、と忌々しげに紗耶が呟く。確かに、彼が近づいてくる気配はまるでなかった。話をしていたから、ではない。自分とは何か、話しながらも常に気を張り巡らしていた紗耶は気づくはずだ。

「二人とも、集会が始まるというのにこんなところにいてはいけませんよ」

言っていることは教師のものだ。だが、その麻薬中毒者を思わせる顔には怖気を誘う薄い笑みが貼りついていていた。

「一年三組の、神代紗耶さんと……えーと……あれ？ すみませんね、あなたの方は名前が出てきません」

いや、そんな笑みなどどうでもいい。魁人の眼が、魔力を『見る』青い魔眼が、眼前の男にあるものを映し出していた。反射的に身構え、叫ぶ。

「紗耶！ こいつだ！」

瞬間、紗耶は左掌から退魔の日本刀——蒼炎龍牙を抜き出した。魔力が込められた刀は刀身に蒼く美しい炎を咲かせる。人体から燃える日本刀が現れるという、普通なら腰を抜かしかねないとしても事態なのにも関わらず、巳堂は眉を僅かに歪めるだけで驚いた様子はない。

紗耶は目の前の『敵』から目を離さず、確認するように問いかける。

「見えたの？」

「ああ、バツチリ」

巳堂に見えた魔力の光。紗耶と比べると少し小さめに見えるが、高まつた状態である『炎』だった。といっても、光球の上部辺りがチロチロと燃えているくらいの微妙なものである。

本当にそれだけで決めつけるのはどうかと思っていたが、そんなことよりもずっと決定的なものが魁人には見えていた。

「気をつけろ、紗耶。こいつの体、蟲だらけだ」

そう、背広やズボンはおるか靴の中まで、全身の肌が見えない部分には夥しい数の小さな光点が蠢いていたのだ。それはよくよく見ると蜘蛛の形をしており、鈴瀬たち被害者の中にいたものと同類と思われる。

と、巳堂が狂ったように笑い出した。

「くくく、ははははははははははっ！ どおーしてでしょう？ どおーしてバレてしまったんでしょうかねえ。生徒会にはまだ白衣くらいしか情報はなあっていっているんですが、これはこれは不思議です」

妙なところで妙に間を伸ばす、妙な喋り方。はつきり言つて気持ち悪い。

「教える義理はないわよ。呪術師のあんたさえ見つけ出せばこつちのもの。まさかそつちから接触してくとは思わなかったわ」

紗耶は蒼炎龍牙を突きつけ、口元をニヤリと好戦的な笑みで歪める。

「さあ、このあたしに燃やされるか、大人しく生徒会に投降するか、五秒で決めなさい」

一、と紗耶はカウントを始める。完全に上からの言葉だ。普段先生にもしつかり敬語は使っている紗耶だが、相手を『敵』と認識した途端、『敬い』という文字を奈落の底へと放り捨てたかのように言葉遣いが変わっている。

だが、巳堂はそんな紗耶のことなど齒牙にもかけず、後ろで構えている魁人を眼鏡の奥の目を細めて観察するように見詰め、紗耶の

カウントが『三』になったのと同時に口を開く。

「ああー、なるほど。その眼、魔眼ですか。何の魔眼かは知りませんが、とにかく私のことを見破るような力なのですね」

「五……、火線術式展開」

刹那、紗耶は突きつけていた刀の先端から何の躊躇いもなく炎を火炎放射器のごとく射出。蒼く細い炎の線が空中にペンを走らせるように描かれ、複雑な軌道を変えて曲がり、くねり、繋がり、余裕にもポケットに手を入れていた巳堂の周囲を取り囲む。まるで炎の檻のようだが、奇妙な紋様にも見えるそれは、魁人には立体的な魔法陣のように思えた。

そしてそれは正解だった。

「——燃える！」

紗耶が短く唱えるように言った瞬間、立体陣の内側で蒼い爆発が起こる。凄まじい爆光だが、音は少なく、煙については一切上がってない。代わりに全てを灰燼と化すような炎が燃え上がり、立体陣の内部に煉獄を作り出している。

幻想的な蒼い劫火。力強く燃えるそれを、魁人は美しいと感じた。
が——

「いやちよつとやり過ぎじゃないのかこれ!？」

あの炎に包まれれば灰、もしくは溶解しているかもしれない現実
に、魁人は冷や汗をかいた。術者を殺すことも皆の呪いを解く方法
だと聞いているが、それはあくまで最後の手段のはずだ。

「大丈夫よ」

しかし紗耶は、そんな魁人に落ち着いた声でそう告げる。

炎で作られた立体陣と、その中の煉獄がまるで夢か幻だったように
消え失せる。

「——ッ!？」

そこには灰となった——ではなく、スーツに焦げ目一つすらついていない巳堂の姿が。彼はポケットに手をつ突っ込んだままで、余裕
の笑みさえ浮かべていた。

「あいつ、咄嗟に蠱で結界を張ったつばいから。ム力つくわね」

紗耶は苛立たしげに巳堂を睨めつける。

「む、蠱でそんなこともできるのか？」

「できたんだからできるんでしょ。それよりあいつの蠱はどうなってる？」

言われ、魁人は巳堂を『見る』。

「……減ってる。それも、ほとんど」

巳堂のスーツの内側に無数と言えるほどいたはずの蜘蛛が、もう両手で数えられるくらいしか残っていない。視線を下に向けると、巳堂の周囲の地面には黒い灰みたいなものが積もっていた。何の魔力も見えないが、あれはたぶん巳堂の盾となった蜘蛛たちの残骸。

「くくく、酷いですねえ、死ぬかと思いましたよ」巳堂はしゃあしやあと、「ですが、彼の神代家に伝わる破魔の炎、蒼炎を間近で見られたのはラッキーと言うべきですかねえ。私の可愛い子供たちをほとんど生贄にする羽目になりましたが」

「つまり、これであんたを護るものはいなくなったわけね」

紗耶の言う通りだが、何かがおかしい。なぜ、巳堂はあんなにも余裕に笑っているのか。

（まだ何かを、隠しているのか？）

魁人は慎重に魔眼で巳堂を注視する。誰かの魔力が高まっているかぎり、この魔眼は意識を集中しなくてもオートで発動しつぱなしになる。それは普段意識して『見る』よりもずっと楽だった。

「今度こそ観念することね。あんたが何でこんなことしてるのかは、後でゆっくり聞いてあげるから」

「そーは行きませんよ。私にはまだまだやり残した実験がありますからねえ」

巳堂は数歩後ずさり、スーツのポケットから手を出した。そこにはビール瓶のような褐色をした小瓶が握られており、その口の部分には御札のように文字が書かれた紙が巻かれている。

「何をする気？」

「くくく、もう少しだけあなたと遊んであげますよ」

巳堂は言っと、瓶に巻かれていた紙を破るように剥がす。次の瞬間、瓶の口から紫色の靄みたいなものが噴き上がった。瘴気のように嫌な気配を感じさせるそれが巳堂と紗耶の間に収束したかと思えば、一匹の蟲の形を――否、蟲そのものへと変化した。

「なっ!？」

魁人は驚愕する。その蟲は、率直に言っと『蠅螂』だった。緑色の全体的に細長い体に六本の足、その内二本は先端の赤みがかつた鎌状になっている。

ただ普通の『カマキリ』と違うのは、体長が軽く人の倍はあるということだ。

「これは私の蠱を保存しておく瓶です。言っなれば、『蠱瓶』ですかねえ」

自慢げに巳堂は中身の抜けた小瓶を振る。

「――で？」

しかし、魔獣じみた体型と全身から強い呪力を漂わせている大蠅螂を見ても、紗耶は微塵も動揺しない。彼女は退魔師だ。魁人とは違い、あの程度の異形は見慣れていることだろう。よく考えれば、昨日の百足の方が何倍もおぞましい姿だった。

「遊ぶとか言ってるけど、そんなんじゃ十秒も持たないわよ!」

紗耶は跳躍するように駆けた。対する大蠅螂は、黒髪を躍らせて迫りくる少女を逆三角形の頭部についた大きな複眼で捉え、その刺々しい大鎌を彼女に向かって振り下ろす。普通のサイズならばチクリと痛いだけだが、あれはそんな程度では済まない。まともに受ければ、紗耶の華奢な体など本物の刃で斬られるように引き裂かれるだろう。

だが、舞うように一閃された蒼炎龍牙の刃が、その大鎌を足ごと斬り落とした。

切断面に破魔の炎が引火し、苦しそうにのたうつ大蠅螂。それでも紗耶を討ち取ろうともう片方の大鎌を振る。が、それも蒼炎の刃

で受け止められ、まるで絹豆腐でも切っているかのように競り合うことすら許されず切断された。

両鎌を失った大蠋螂だが、それを嘆くような暇など与えられない。紗耶がすぐさま体を捻り、蒼く閃いた刃によって大蠋螂の胴体は真っ二つに斬り捨てられた。

さらに一瞬にして蒼炎が大蠋螂の体を侵食し尽くし、完全滅殺の完了を告げる。

「――ほう」

自分の蠱が簡単に滅ばされたというのに、巳堂はそんな感心した声を洩らした。

「さあーすがは神代家の御令嬢。私の自信作をこおーもあつさりと倒してしまうとはあ。くくく、いやはや素晴らしいですねえ」

パチパチと手なんか叩いてみせる巳堂。紗耶は苛立たしげに眉を吊り上げ、

「遊びが終わりなら、今度はあんたの番よ。あんたはあたしたち生徒会を嘲笑うように次々と呪いをかけていった。つまりあたしたちの『信用』に泥を塗ったってことよ。こっちは『殺さず』ってことになってるけど、八割くらい殺しても口が利いたら別にいいよね？」

自分たちのプライドのために戦っているように聞こえるが、本当は紗耶だって被害者たちのことを気にかけていた。人を守るからこそが、退魔師なのだから。

「そおーですねえ。こちらも、ここであなたを殺すわけにはいきませんからねえ」

「は？ 何言ってるのよ。あんたまだあたしに勝てる気でいるわけ？」

「くくく、忘れたのですかあ？ 私が、一度あなたに触れているということを」

「え？」

——ドクン

キョトンとしたのも束の間、心臓発作でも起こしたような痛みが紗耶を襲った。

「……ああ……」

痛みに呻き、顔を引き攣らせる。思わず左手で胸を鷲掴みにするように押さえ、倒れそうになった身体は、蒼炎龍牙を地面に突き刺してどうにか持ち堪える。

「紗耶!？」

彼女の異常に気づいた魁人が叫んでいるが、遠くを走っている救急車のサイレンのようにぼんやりとしか聞こえない。

視界が揺らぐ。体が、全身の細胞が溶けているかのように熱い。そう、まるで、毒でも盛られたみたい……。

「あんた……まさか……」

滝のように冷や汗をかきながら、紗耶は苦しい表情で巳堂を睨む。嫌らしく唇の端を吊り上げる巳堂に、紗耶の予想は確信に変わる。

だがその瞬間、張り裂けるような痛みが全身に迸った。

「——ッ!？」

悲鳴は声にならず、プツリ、と糸が切れた人形のように、紗耶は力なくその場に崩れた。

呪術的実験（7）

「紗耶ッ！！」

蒼炎龍牙を地面に突き刺したまま、膝を折って崩れる紗耶に魁人は駆け寄った。

彼女が意識を失ったことで魔力の供給が断ち切れ、蒼炎龍牙の炎は陽炎のように揺らめきながら消えていく。

紗耶の体を仰向けに抱き起こす。予想通りというか、彼女の状態は呪いを受けた被害者たちと同じだった。表情は苦渋に歪み、呼吸は小さい。体内には、彼女の弱った魔力の光に紛れるように、例の蜘蛛が寄生している。

ただその蜘蛛は、他よりも強く光っていて、一回りほど大きかったが。

「彼女には特別強力な蠱を憑けました。魔術師相手ではそのくらいでないと効果は期待できませんからねえ。その蠱が取り憑いた者はまず強烈な痛みが――」

魁人は紗耶をそつと寝かせると、楽しそうに解説なんかしている巳堂を睨む。そしてゆっくりと立ち上がって対峙し、凄みを利かせて言い放つ。

「今すぐ取れよ！」

巳堂の解説がピタリと止まるが、別段魁人に臆したわけではない。くつくつと嗤い、両腕を小さくクロスさせてバツテンを作る。

「ノウですよノウ！ 駄目ですねえ。彼女は私の実験の要になるんですよ、羽柴魁人君。ええ、思い出しました。思い出したとも最近生徒会と関わりを持ってきたあなたの名前をねえ」

「……実験って、何のことだ？」

「実験は実験ですよ。あなたも組み込むことが今決定しました。光栄に思いなさい。魔眼持ち、いやいや面白い」

巳堂の態度に魁人は拳を握る。相手は魔術師。それも蠱を使った

呪術師。今は紗耶のおかげでその蟲はほとんど消滅しているが、さっきの大蠅螂のような隠し玉をまだ所持していないともかぎらない。魁人の魔眼には、瓶の中までは映らなかったのだ。

紗耶はこの通り動けない。この状況において、選択肢の最前線に来るのは『逃げる』だ。しかし、巳堂は紗耶を狙っているようなことを言っていた。すぐその体育館には味方がいる。だが、呼びに行くにしても、この場を離れなければならない。紗耶を置いてはいけないし、彼女を担いでだとすぐに捕まってしまう。

「ホント、何で俺がこんなことになってるんだろうな」

魁人は自分が馬鹿みたいに思えて苦笑した。答えなんて、決まっている。

「とりあえず一発ぶん殴って、紗耶や鈴瀬たちの蜘蛛を取り除いてもらうぜ」

助きたい人たちがいる、その思いを拳に込め、魁人は巳堂に向かって疾走する。

呪術的実験（8）

旧校舎というものは、当然のように学園の立ち入り禁止区域に指定されている。

メイザース学園の立ち入り禁止区域の多くは魔脈を研究する魔術機関で、立ち入りを禁止しているだけでなく幾重にも張られた結果で護られている。よって、一般人はおるか魔脈の情報を狙ってくるような魔術師だってそう易々と侵入できない。

学園の西側にポツンと存在するこの旧校舎は、そんな魔術機関とは一切関係はなかった。

校舎といっても資料館的なものだったらしく、ゴシック様式でシンメトリーな建物はどこぞの教会堂みたいな雰囲気醸し出している。もっとも、今やすっかり寂れてしまっていて、一昔前にタイムスリップしないことには美しかったころの姿を拝められないのだけれど。

普段は嚴重に施錠されている旧校舎、もとい旧資料館の観音開きの扉だが、現在は全開となっている。

その一步中に入ると眼前に広がる開放的なホールは——氷結地獄と化していた。

辺り一面、氷、氷、氷。左右の階段やフロント、天井から下げられたもうつくことのない照明に至るまで、全てが氷漬けにされている。水浸しにした室内を南極に瞬間移動させたらこんな風になるかもしれない。

そして小型犬くらいの大きさをした風という、明らかに不自然な物体もそこら中で凍結していた。

そんな中、ホールの中心に凍っていない存在がいた。長い髪をポニーテールに結ったスレンダーな少女——生徒会会計・藤林葵とその使い魔、氷狼の魔獣・リクである。

「リク、上」

葵が指示を出すと、熊ほどの大きさに立派な白い鬘をしたリクは『ガルル』と唸り、上を見上げて高く跳躍する。そのルビー色の両眼が捉えているものは、唯一凍っていない面——天井を這っていた他よりも一回り大きい一匹の大風である。

ピョーン、と天井を蹴って大風は飛び上がったリクに向かって急降下する。が、寄生する前に前足で弾かれ、そのまま凍りついた床に墜落する。しかし、虱とは思えない硬い外皮に包まれているそれにはまだ生存反応があった。

「 絶氷の息吹 」

葵がまたも呟くように指示を出す。本当に小声だが、リクの聴覚は彼女の指示を漏らさず聞き取っていた。自由落下が始まったのと同時にリクは牙の並んだ大口を開け、そこから白い霧状の吐息がまるで光線のように放出された。

大風にそれを避ける暇はない。直撃を受けた大風は、液体窒素を被せられたように瞬間凍結して動かなくなった。その際に大気中の水分も凍り、ダイヤモンドダストとなって美しく輝く。

だがまだ終わってはいない。葵はブレザーの裏側に隠し持っていた短刀を抜き、凍って動かない大風に向けて投擲。短刀は刺さることはなかったが、カイン、と聡明な音を立てて大風の体を崩壊させた。刹那、その大風と周囲で凍っていた他の大風たちが、一斉に紫色の靄となって消え失せた。

しかしそんなことは眼中にないといった感じで短刀を回収する葵に、リクがじやれるように鼻を押しつけてくる。彼女は少し緩んだ表情になって『いい子いい子』とリクの頭を撫でた。

> i 2 1 4 0 6 — 1 7 3 6 <

「うん、やっぱり『親』を殺せば『子供』も消えたね」

と、銀英が地下へ続く階段からそんなことを口にしながら登ってきた。彼は何かの資料と思しき用紙の束を丸めて握っている。葵は

瞬時に今の緩んだ表情を氷結させた。

「銀、説明して」

「あー、はいはい」銀英は面倒そうに、「えーとだね、蠱主が一人でこれだけの数の蠱を操っているとしたら、そいつは超一流か、またはリーダー的存在を間に置いているかのどちらかってことになるのさ。つまりそのリーダーを潰せば、今のように残りも全部消え去るわけだよ」

つまるところ、リーダーである『親』が死なないかぎり『子供』は死骸になっても残るが、『親』が死ねばたとえ生きていたとしても『子供』も消滅してしまうということだ。

「……」

「えーと、葵さん？　今ので理解できた？」

説明を聞いても無反応だった葵に問うと、彼女はコクリと頷いた。「せめて相槌くらい打ってほしいんだけど」

まあそこは『葵だから』という理由で片づけ、銀英は腕時計の間を確認する。

「それにしても参ったね。もう集会始まつてるころだ。蠱の邪魔が入らなければ、もっとスムーズに行つたのになあ。ところでこの巨大冷凍庫なんだけど、非常に寒くない？」

「別に。……それで、どうだった？」

余計な話はするなと言うように、葵が結論を急がせる。銀英は、ふう、と小さく息を漏らしてから報告する。

「予想通りさ。この旧校舎は呪術師の本拠地。地下には改造された研究室みたいな部屋もあったよ。まあもつとも、作りかけや置ききの蠱はなかったけどね。蛻の殻なのは当然として、もう放棄した後って感じだった」

でも、と付け足して銀英は丸めている用紙の束を広げ、それを眺めるように見る。

「この通り、面白いことが判明したよ。——いや、面白くはないか。寧ろ不愉快だね」

彼にしては珍しい嫌悪感に満ちた表情を作る。

「蠱術を人間でやろうとしてるなんてさ」

呪術的実験（9）

「私はですね。巫蠱術を扱う一族に生まれながら、魔力の才がなかったのです」

何の前置きもなく、巳堂は自分の過去について語り始めた。

いや、確かに前置きはなかったが、魁人が無抵抗になったことが話を始めた大きな理由なのかもしれない。

「ぐ……」

魁人は殴りかかった右手を掴まれて捻り上げられ、そのまま弓反になるよう手首や肘の関節を極められていたのだ。

死に体をさらす魁人に抵抗は許されず、ギリギリと軋むような痛みに呻くことしかできない。

骸骨みたいに痩せ細っているからといって巳堂を甘く見ていた。

人を見かけで判断していた。魔術師「体術の達人、というわけでは流石にないだろうが、少なくとも巳堂は自分よりも強い。

（やっぱり俺じゃ、勝てないのか）

歯痒い。自分は非力な一般人だということを思い知らされた。だがそれでも、歯痒いと感じるだけ諦めてはいない。ここで諦めるくらいなら、自分はさつき逃げていた。

「魔術師の一族で魔力がなかったらどおーなるか、わあーかりますか？ 簡単です。追放されたのですよ」

半端な気持ちで魔術師と戦うことを選んだわけじゃない。まずはこの体勢をどうにかして、そして一矢報いてやる。

「ですが、私を追放したのは単に魔力がなかったからだけではありません。私の蠱術に対する考え方を、奴らは危険だと判断したのでしょう。禁忌をあえて犯そおーとする私の考えをねえ」

「き、禁忌？」

耳に入ってきた言葉を、思わず訊き返してしまった。返事があったことに巳堂は愉快そうな顔をする。

「そおう！ 蛇に蛙、犬や猫、狸や狐、蠱術は蟲以外でもできるのです。それはつうーまり、人間や魔獣を使ってもできるということですよねえ」

「——なっ！？」

蠱術というものの説明を受けている魁人は、すぐに巳堂が何をしたいのか理解した。蠱術とは蟲を共食いさせる呪術。それを人間でやるということは、殺し合いをさせるということだ。

「くくく、理解の速い子は好きですよ。そーです。人間を使うのです」

「てめえ、人の命を何だと……」

とつくにしていることだが、こいつはもう『先生』だとは思わない方がいい。

「そもそも、どうやって殺し合いをさせるつもりだ！」

「おやあ？ あなたは私が何の意味もなく生徒に蠱を憑依させたと思っているのですかあ？」

「それってどう——」

どうということだ？ と訊こうとした魁人だが、答えは視覚から入ってきた。

蟲を体内に入れられ、その呪いによって意識を失っていたはずの紗耶が立ち上がったのだ。

「紗耶……！？」

一瞬、彼女が復活したと歓喜したが、そうではないことを、彼女の虚ろで淀んだ瞳を見て思い知る。

光を失い、まるで意思を感じない曇った瞳の紗耶は、ゆっくりと巳堂に捕まっている魁人へと歩み寄ってくる。

場の魔力の高まりがなくなったことで発動が止まっていた魔眼が再び青く染まる。紗耶の中に見える蠱が、活動を始めたかのように強く魔力の光を放っていた。

（——まさか、操られてるのか！？）

そうとしか、いや、絶対にそうだ。あの蜘蛛が、紗耶の意識を乗っ取って体を支配している。巳堂が呪った生徒を殺していないのは、あとで操って殺し合いをさせるためだったのか。

虚ろな紗耶が、魁人の目の前で立ち止まる。と、巳堂が急に間接を決めていた手を放して魁人を開放した。

「さあて、少しテストしてみましよう」

「ッ！？」

なぜ巳堂が自分を放したのかを考える間もなく、魁人の体は真横に吹き飛んだ。体育館の壁に背中を強打し、一瞬麻痺した感覚に激痛の波が押し寄せる。

「——あッ！？」

声にならない悲鳴。思いつ切り叫べば、あるいは体育館の中にいる月夜に届くかもしれない。だが、この位置は体育倉庫などの裏手、多少の物音では気づかれない。あえてこのような場所を選んで犯人捜しをしていたことが仇となってしまった。

ずるり、と魁人は崩れる。全身が痛い。もしかしたら骨が折れているかもしれない。手足に動けと命ずるも、自分の体なのに言うことを聞いてくれない。

落ちかけた臉を開いて前方を見る。そこには、回し蹴りをした後、体勢の紗耶と、嫌らしく、そして愉快そうに嗤っている巳堂が見える。

その巳堂の口が動く。

「あなたには他の生徒会魔術師への連絡係となってもらいましょうか。『私は今日の放課後、この第一体育館にて人間の魔術を行います。阻止したければどおぞ御勝手に』と伝えてくださいねえ」

言つと、巳堂は踵を返して立ち去っていく。朦朧とする意識の中、その彼に付き従うように、操られた紗耶も魁人の視界から消えていった。

「く……そっ……」

ぼやける視界は完全に見えなくなり、魁人の意識は闇へと堕ちる。

間章（3）

あの日。

あの日、幼かった自分は、両親に向かって訊いていた。

「おとうさん、そのひかつてるの、なに？」

幼稚園児の頃の記憶なんてほとんど残っていないが、この光景は間違いなくあの日。幼い自分が自分の眼の異常さを知った日。

「光ってるの？」

父は首を傾げ、隣の母と顔を見合わせた。幼い自分が指差したところに光り物などないことに気づくと、二人とも途端に不安げな顔になった。

「何もない……わよね？」

と母。

「魁人には、見えるのかい？ 父さんの中にある光が」

父は本当に不安そうにしている母に適当なことを言っただけを外させ、幼い自分をまっすぐに見詰めてくる。そして、優しく告げた。

「いいかい、魁人。それは他の誰にも言っではいけないよ。魁人には見えていても、他の人には見えないものなんだ。変な人と思われるのは、嫌だろう？」

幼い自分は大きく何度も頷いた。

「でもね、魁人。他の人とは違うからって、自分の眼を嫌いになっではいけないよ。それは凄い眼なんだ。悪い魔法使いを倒せるほどにね」

幼かった自分には、父の言っていることの意味がわからなくて――

悪魔の視力（1）

温かい光に包まれるような感覚に、魁人の意識は覚醒した。ゆっくりと目を開く。その奥の瞳は、青色のままだった。

ぼんやりとした視界が鮮明になっていく。最初に映ったのは、心配そうに覗き込んでいる生徒会長・月夜詩奈の顔だった。

「あはっ、気がついたみたいね。よかったあ」

安堵の笑顔を満面に、月夜は胸を撫で下ろす。魁人は自分の状況が理解できず、寝ている状態から首だけを動かして見える範囲から情報を得る。

場所は見覚えのあり過ぎる高級マンション的な部屋——生徒会室。そしてどうやら自分はそのソファ―に寝かされていたようだ。

「いやあ、意識がなくても魔眼つて発動するもんなんだねえ」

感心するような声が聞こえたので見ると、ガラステーブルを挟んだ対面のソファ―で、副会長の御門銀英が二ヘラと美形を台無しにしそうな笑みを浮かべていた。彼の隣には会計の藤林葵が座り、彼女の膝の上に子犬化したリクが撫でられながら大人しく眠っている。「魁人、会長には礼を言うべきだよ。付きっきりで治癒魔術をかけてたんだからさ」

「治癒魔術？」

上体を起こしてもっと辺りを見回す。すると、ソファ―の周りを囲うように、ルーンの文字が刻まれたメダルのような金属板が並べられているのが見えた。なるほど、あの温かな感覚はこの魔術によるものらしい。

「えっと、ありがとうございます、月夜先輩」

頭を下げて心から感謝するように礼を言つと、月夜は『どういたしまして』とにこやかに笑ってくれた。

そのままルーンの金属板を片づけ始める月夜に、魔眼の色の消えた魁人は申し訳なさそうに頭を掻く。

「すみません、俺、ちよつと夢を見てました」

「魁人くん、それはどんな夢かな？」

「昔の夢ですよ。たいしたものじゃありません」

今思えば、父はこの眼のこと、見える光のことを知っていたのではないだろうか。確認しようも、父は仕事で海外を飛び回っているためもう何年も会っていない。連絡はなぜかいつも取れず、時々向こうからの手紙が一方的に送られてくるくらいだった。

父が魔術師だとは思えない。それほど強い光ではなかったと記憶している。

「でも、気になることを思い出しました。父さんが言ってたんです。この眼は、『悪い魔法使いを倒せるほど凄い』って……」

「！」

冗談に等しい軽い気持ちで言っただつもりだったが、月夜と銀英は目を丸くして顔を見合せる。魁人は気づかなかったが、実は葵も眉根が少し動いていた。

「葵ちゃん、魔眼の資料持ってきて」

「わかった」

葵が了解した瞬間にリクが飛び起きる。彼女はソファから立ち上がると、ちよちよこと可愛らしい小走りをするリクと共に棚の方へと歩いていく。

「いやそんな過剰に反応されても、その辺の記憶は曖昧ですから本当は違う言葉だったかもしれませんよ」

「でもでも、それが本当だったら凄いよ、魁人くん」

「危険な可能性は跳ね上がったけどね。時に二人とも」

興奮気味の生徒会長に対し、銀英が落ち着いた口調で告げる。

「今は夢や魔眼のことを話している場合じゃないんじゃない？」

「！？」

言われてから魁人は気づく。電撃が走ったように気を失う前のことと思い出す。

それを悟ったように、銀英は真剣な表情になって訊ねてくる。

「さて魁人、体育館裏で何があったのか、紗耶はどこに行ったのか、記憶を失ってないのならその辺の説明をお願いできるかい？」

「……わかりました」

慌てず、叫びたい衝動を無理やり抑えつけて、魁人は情報を整理する。そしてそれが現実だったことを再確認し、必要なところだけを掻い摘んで語り始めた。

悪魔の視力(2)

「……そう、呪術師は巳堂先生だったの」

一通り魁人の説明を聞き終えた月夜は、どこか感慨深げにそう呟いた。彼女にはそれなりの接点があったのかもしれない。

「それに紗耶ちゃんが彼の手に落ちたなんて……信じ難いけど、魁人くんが言うなら間違いないよね」

困ったように頬に手をあて、彼女は小さな溜息を洩らす。何か凄く信頼されているみたいだが、自分が幻覚でも見ていたのでなければそこに嘘はない。

「蟲ではなく、人を使った蠱術。まさか本当にやるつもりだったなんてね。禁忌に手を出すとは、本当にあの人が巫蠱術を扱う一族なのか怪しいところだよ」

「銀先輩、その禁忌ってやつぱり……」

「ああ、そうさ」銀英は少し忌々しげに、「人間は倫理的に問題があり、魔獣は絶対に制御できない。だからその二つは蠱術において禁止事項なんだ」

巳堂は知っていてなおその禁忌に手を出している。一族追放の原因はそれにもあると本人は語っていたが、禁忌と聞いてどうも魁人には腑に落ちない点がある。

「呪術に禁忌って、何か変じゃないですか？ 呪いなんだから、何してもよさそうなのに」

魔獣はまあいいとしても、元から倫理を問うようなものじゃないだろう。すると、銀英は顔の横で右手を軽く振る。

「いやいやそうでもないさ。呪術って言えば悪いイメージがあるかもしれないけど、影響を与えるってことならいい意味にだって使えるんだ。例えば類感呪術。『形の似た物は相互に影響を及ぼし合う』ってやつなんだけど、まあ『丑の刻参り』だよ」

それは確か藁人形に釘を打つやつだ。そのくらいなら魁人だって

知っている。

「それは悪い影響だけど、類感呪術にはいい面の影響もちゃんとある。ライオンとかの強い動物のボディアートをすることで俊足や馬鹿力を得たり、海藻を食べることで髪が黒くなったり。一番わかりやすいところで言えばそうだなあ……てるてる坊主かな。あれは太陽レガリアの象徴だからね」

もちろんやるには魔力がいるけど、と銀英は付け足した。

「じゃあ、蠱術ってのも？」

「蠱はうまくすれば薬になったりするからねえ。まあ、漢方薬みたいな感じと思えばいいさ」

銀英がそこまで説明したところで、葵が大量の本やファイルを塔のように積み重ねて絶妙なバランスを保ちながら戻ってきた。重量にしてもそうとう重いだろうに、細身の彼女は顔色一つ変わっていない。

「詩奈、魔眼の資料」

「あつ、ごめんね、葵ちゃん。えっと、そこに置いとして」

葵はコクリと頷くと、月夜が指した窓際の奥、社長室にでもありそうな机の上に資料を置き、倒れないように整理していく。何も口出してこないが、たぶん彼女はこちらの話もしっかりと聞いていることだろう。

葵が資料を置いたのを認めてから、月夜が魁人に確認するように問う。

「えっと、魁人くん、巳堂先生は魔力がないから追放されたって言ったのよね？」

「はい、まあ一応」

禁忌と魔力、どちらが重大な理由なのかは魁人にはわからないけれど。

「ということは、巳堂先生はこの学園が魔脈の上に立ってるって知ってたのかもしれない。魔脈そのものには興味ない感じだから、魔力を得るために教師として潜り込んだってところかな？ えっと、

確か赴任してきたのって一昨年だったっけ？」

「僕が高等部に入った時にはいたよ。僕的には好きじゃない先生だったね」

それには葵も共感するように向こうで頷いていた。銀英は何かを思い出すように顎に手を持っていく。

「とうか、巳堂って一年前はテニス部の副顧問してなかった？」

「あっ！ そういえば……。じゃあ、最初にテニス部員を呪ったのは顧問いびりの恨みから？」

「だろうねえ。あれは根に持つようなタイプだよ。普段は根暗な先生だったし」

二人が話している過去のことなど、魁人には知ったことではない。「俺はあいつを、『先生』だなんて思ってたません」

巳堂は鈴瀬や関係ない人を大勢、現在進行形で苦しめている。魔力を制御できない一般人が精神を汚染されてやってしまったことではなく、意図的に、それも『実験』モルモットなんて言うて。

巳堂の目は、人を物かそれこそ実験動物くらいにしか思っていない目だった。

彼の授業は何の特徴もない普通なものだった。でもそれは、それは学園に居続けるために作った表の顔だったってことだ。

偽りの教師。最悪だ。

「学園に来た時点では魔術師じゃなかったから、警戒されることもなかったのね。そして、いつからかわからないけど魔力が開花し、ついにこんなことを始めた。魔力に魅了されたって理由も多少はあるだろうけど、魁人くんの話を聞くかぎり、彼は最初からこのことを計画してたみたいね」

「魔力はなくても、魔術の才能はあった。元が魔術師の家系だから知識も豊富。そりゃあ素人とは違うわけだよ。でも、禁忌を犯そうとしてるんだ、プロってわけでもない。ずっと僕らに見つからなかったことだけは驚嘆に値するかな」

巳堂遊作という呪術師を分析していく月夜と銀英。魁人はそれを

黙って聞くしかない。

「とにかく、巳堂先生の蠱術は絶対に阻止しないといけないわ」

「問題は、操られているとはいえ紗耶が向こう側についてることだね。たぶん巳堂は、紗耶を蠱にするつもりだろうし」

「紗耶以外にも、操られてる人はいる」

葵が整理を終えて戻る。やはり話は全部聞いていたようだ。

「そうよね。もし盾なんかに使われたら手が出せなくなっちゃうわあれから増えていなければ、テニス部員六人に今朝の被害者が七人、そこに紗耶を加えて十四人の生徒を巳堂は蠱で操ることが出来る。」

だが、テニス部員は巳堂の手元ではなく病院にしていると聞いている。鈴瀬ら七人も、この生徒会室で保護している。

（そうだ。ここにいるかぎり鈴瀬たちは安心だ。この生徒会室に……？）

月夜たちの言葉と部屋の様子に違和感を覚え、魁人は改めて周囲を見回す。スペースを空けて敷かれている敷布団。そこで寝かされていた鈴瀬を含む七人の生徒たちが……いない！？

「月夜先輩、鈴瀬たちはどこに？」

嫌な予感がした。残念そうな表情になる月夜から答えを聞く前に全身の血の気が引き、ミイラ化するんじゃないかと思うほどの冷や汗が流れる。

月夜は言いづらそうに、そして自分たちの失敗を悔いるように、

「……それがね、集会から戻ってきたら、みんないなくなってたの」

「！？」

魁人は絶句する。思わず叫びたかったが、絶句する。月夜たちだつて、保護していた被害者がいなくなつたのを見て最初はそうなたはずだ。

（じゃあもう、鈴瀬たちは巳堂の手に……）

そう考えた途端、今の今まで頭から抜けていた言葉が蘇ってくる。意識を失いかけていたあの時の巳堂が言った言葉。

——私は今日の放課後、この第一体育館にて人間の蠱術を行います。阻止したければどうぞ御勝手に——

（今日の放課後……！？）

「今何時ですか！？」

「え？」

ハツとし、ほとんど叫ぶ形で訊ねる魁人に、キョトンとした月夜が壁にかけているアンティークな時計を見て答える。

「……、夕方の五時二十分くらいだけど」

「——ッ！？」

驚愕し、勢いよくソファーから立ち上がった魁人を生徒会の面々は訝しげに、そして不安げに見詰める。

「やばい。巳堂が蠱術をするのは今日の放課後なんです！ 場所は、第一体育館」

告げた瞬間、緊迫した空気が場を支配した。常に無表情の葵ですら目を見開いていたのだから大変だ。

笑いごとではない事態に、銀英が冷静に現状を呟いた。

「……それ、今から行って間に合うのかい？」

放課後になって、既に一時間近く経過している。

悪魔の視力（3）

メイザース学園・第一体育館。

照明はつけず、沈みかけた太陽のオレンジ色だけが屋内を不気味に照らしている。普段のこの時間ならバスケット部員やバレー部員たちが忙しくボールを弾ませているはずなのだが、今日にかぎり静寂。まるで妖気が満ちているような異質な空気が体育館全体を覆い、一般人が近づくことを拒絶する一種の結界のような役目を果たしていた。魔術師でなくとも、これほど呪力が濃密に張り巡らされていれば、生物としての生存本能が働いて近づこうとは思わなくなるのだ。

もつともそれは、これから行われる呪術の副作用みたいなものだった。

蠱術を扱う呪術師——巳堂遊作は、スーツの上から白衣を纏い、ステージの中央に立って体育館に集まった者たちを眺めていた。

病院から抜け出してきたような患者服を纏った男女が六人、今朝生徒会に保護されていた者が七人、そして放課後この体育館を使用していた二十人強の生徒にも蠱を仕込んで黙らせている。普通なら顧問の教師もいそのだが、職員会議などで巳堂が来た時にはまだいなかった。

「まあ、このくらい的人数が限度でしょう。あまりおおー過ぎますと完成した蠱を制御できなくなってしまうからねえ。くくく、少々欲張り過ぎた気もしますが、今の私ならこのくらい大丈夫でしょう」

聞く者を陰鬱にさせるような笑い声を発しつつ、巳堂は従者のように隣に立っている生徒会の魔術師——神代紗耶へと体を向ける。体内に入れられた蠱によって体の支配権を奪われている彼女は、この場に集った他の生徒同様、意思のない空っぽな瞳をしている。その手には、彼女の退魔武器である蒼炎龍牙がしっかりと握られている。

た（炎は出てないが）。

「どおーです？ 見えますか？ よおーやく全員の体に蠱が馴染みましたよ」

飛び立つ寸前の鳥のように両腕を大きく広げ、巳堂は虚ろな紗耶へと言葉をかける。しかし、意識のない紗耶に反応はなく、大の大人が等身大の人形遊びをしているようにしか見えない。

そんなことは気にもせず、巳堂はさらに言葉を連ねる。

「しかあーし、まだです！ まだパーツは揃っていませんよ。あなたのお仲間が来るのを、私は待たなくては いけません。最初は思いつきませんでした、魔術師を使えばより強力な蠱が作れそうですからねえ。くくくくく」

巳堂は紗耶の顎に手をやり、自分と目線が合うようクイツと上を向かせる。

「その蠱にはあなたがなるんですよ、神代紗耶さん。術の開始をもつて、あなたはその刀でこの場にいます私以外の人間全てを斬り殺すのです。そおーすれば、殺された者の負の念が呪いとなってあなたに吸収されます。全員分の呪いを得た時、あなたは最高の蠱として生まれ変わります！ くく、はははははははは、素晴らしい！ 素晴らしい！」

高らかに狂笑する巳堂。紗耶が正常であれば、『こいつ壊れてる』とか呟いたことだろう。

巳堂は確かに壊れている。だがそれは彼自身も知悉していること。自覚ある変人。それが巳堂遊作だった。

「私は究極の蠱を作り出し、そおーして私を追放した奴らに思い知らせてあげるのです。倫理なあーどに縛られては進歩しない。至高の作品は完成しないとねえ！」

段々とヒートアップしてくる巳堂は、直立する紗耶の周囲を踊るように回り始める。気持ち悪い、もしこの場に集まった者たちが意識を取り戻したならそう思うだろう変な動き。

「まあーもっとも、思い知るころには生きてはいないでしょうがね。

くくははははっはあ！」

楽しげに、愉しげに嗤う。両腕を広げ、縮め、拳を握り、開き、時にはセクハラ上司よろしく紗耶の肩に手を置いたりして、巳堂はステージの上で妙ちきりんにダンスする。

「いいーですかあ？ 魔術師とは探究を怠ってはいいいーけないのですよ！ たとえ太極や神に到達してもです！ 追求に終わりというものとは存在しなあいんですから！」

姿もそうだが、どこかの研究者みたいな考えを持っている巳堂である。と――

「んー？」

巳堂の変な踊りがピタリと止まる。

顔を体育館の入口に向け、ニイヤリと口元を歪める。

「どおーやら、来たみたいですねえ。意外と遅かったじゃあないですか」

白衣を翻し、巳堂はステージの先端まで歩く。彼の従順なる僕にして殺戮人形となる予定の紗耶が隣に並んだのを認め、巳堂は愉快げに独りごちる。

「さあーて、黄昏の舞踏会を開始しましょうか」

悪魔の視力（4）

体育館の正面玄関の前に立ち、魁人は息を呑んだ。

全身に浴びせられる嫌な感じとその原因——建物全体を覆うように張り巡らされた無色透明の光を見たからだ。

普通は『感じる』ことしかできない魔力を、魁人は『見る』ことができる。だから余計に恐怖を覚えてしまう。寒気を感じるのは、魔力に込められた呪いによるものらしい。

銀英がその魔力を感じ取るように目を閉じる。

「……どうやら、まだ始まってないみたいだね」

「畏？」

ぼそり、と呟くように葵が訊く。銀英は細く目を開き、

「かもね。巳堂の言葉から考えると、余程邪魔されない自信があるのか、それとも僕たちすら蠱術の生贄にしようと企んでいるのか。どちらにせよ、甘く見られたものだ」

「畏でも何でも、行かないことには紗耶や鈴瀬たちを助けられませんよ」

この中に生贄にされる人たちがいる。皆を救えるのは自分たちだけだ。

魁人は今一度魔力の渦巻く体育館を見上げる。

自分にだけ映る恐ろしい風景。体が震え上がりそうになる。しかし、決意は揺るがない。と、横の月夜が心配そうに声をかけてくる。

「魁人くん、ここからは私たち生徒会魔術師の仕事だから、無理してついてこなくてもいいんだよ？」

引き返すなら今のうちだろう。だが、魁人は首を横に振った。

「いえ、俺も行かせてください」

「わかってるのかい？」と銀英。「あそこに一步でも踏み入れたら戦場なんだ。僕たちが魁人を守れるという保証はできない。君はこういうことが一番嫌だったはずだろう？」

魁人は口籠る。だが、それは一瞬だった。

「……嫌ですよ。死ぬのだって怖いですよ。俺が行っても役に立たないかもしれないことだってわかってます。でも、それでも、俺はあの外道に一矢報いたいんです。それに——」

生徒会の三人は黙って魁人に視線を集中させる。

「鈴瀬の中に蜘蛛を見た時、気づいたんです。俺は、この眼を持っている俺は、こっちの世界からは逃げられないんだと。だけどこの魔眼は自分自身、潰してしまいたいほど嫌いになれるわけありませんよ。——逃げられないのなら、立ち向かう。そう決めたんです。幸い、同じ世界にいる先輩たちはいい人ですし」

魁人は三人と一匹の顔を順に見ていく。こんな時に緩んだ表情をしている者は一人としていないが、それは魁人の話を真剣に聞いてくれていたことの証でもある。

「それにここまで関わつといて、俺だけ逃げるなんてできません」
自分がちゃんとしていれば、紗耶だって操られなかったかもしれない。彼女を、彼女たちを助けるのは自分の手でやりたい。何をすればいいかはわからないけれど……。

「自分で決めて命を落とすのなら、まあしょうがないよねえ」
直球の言葉だが、銀英の唇は綻んでいた。理解してくれたのだから。

「死なせない。魁人は仲間」

葵が言った。本当にそう思ってくれているのかどうかは相変わらぬの無表情と感情のない声からはわからないけれど。そして巨大化しているリクが『がうつ』と吠える。それは主人と同じことを言つたように魁人には思えた。

「あははー、じゃあ魁人くんは、今だけ仮生徒会役員つてことにしようか」

一度だけ微笑んだ月夜だが、すぐに表情を引き締めて正面玄関を向く。

「それじゃあみんな、行くわよ」

各々で返事をし、魁人たち生徒会は戦場へと赴く。

悪魔の視力(5)

正面玄関の扉を開けて中に入った。

逃げ出したいくてたまらない自分がいるのに、それよりも圧倒的に強い力を持って敵に立ち向かおうとする自分もいる。RPGの主人公がラストダンジョンに突入する直前はこういう気持ちなのだろうか。

もつとも、ゲームと違って負ければ終わりだし、自分が勇者だとは思わない。そして扉の向こうはダンジョンなどではなく、即行でラスボスだった。

「やあーつと来てくれましたねえ。待ちくたびれましたよう。退屈すぎて一人虚しくお話していたくらいです」

「巳堂……」

ステージの上にいる白衣を睨みつけ、魁人は憎しみの籠ったような低い声で唸った。

「くくく、よあーこそ、生徒会の魔術師諸君。わざわざ賛となりに来てくれたことをかあーんやしますよ！」

マイクなど使っていないのにうるさいくらいのボリュームで喋る巳堂に、銀英がステージまで届くように声を投げかける。

「ということは、僕たちは障害ではなく、魔術の道具としか見ていなかったたつてことかな？」

「ああーたり前のことを訊くんですね、御門銀英君。そおーですよ。あなたたちは所詮その彼らと同じ道具なんです」

魁人たちの前方、体育館の中央辺りに、軽く三十人は超えている生徒たちが城を守る兵士のように並び立っていた。皆、死人のように虚ろな目をしている。

そんな彼らの中に、魁人は見知った顔を見つけた。

「鈴瀬！—— 待ってる、すぐに助けてやるから！」

魁人は叫んだが、やはりその声は届いていない。月夜が患者服を

着た少年少女を指差す。

「見て、あの子たちってテニス部の……やっぱり病院を抜け出して来たみたい」

「今頃病院はパニックかな？ それよりも、どう見ても人数増えるよね。また僕らの失態だよ、これは。まったく、前の生徒会長にでも見られたら殺されるかもね」

自虐的に言いながら、銀英は懷から護符を一枚、中指と人差し指に挟んで取り出す。

「銀くん、葵ちゃん、わかってると思うけど、操られてる人を殺しちゃダメよ」

「そりゃあそうさ。ここで殺したら巳堂の思うつばだからね」

当たり前のことを、とでも言うように銀英は顔の横で護符をヒラヒラさせる。葵も小さく頷いた。蠱術とは、殺し合いをさせる術なのだ。

「それではそれでは、パーツも揃ったことですし、術の開始と行きましょうか！」

両腕を限界まで開き、広い体育館内にもよく響く声で巳堂が宣言する。すると、こちらを向いて並んでいる生徒たちが道を開くように脇に寄り、そこから日本刀を握る黒髪の少女が兵士を束ねる騎士団長のごとく歩いてくる。

言うまでもない、生徒会書記の退魔師——神代紗耶である。

「紗耶ちゃん……」

悲しげな表情で月夜が呟く。紗耶は本当は操られてなどいない、そんな想いを彼女は今の今まで抱いていたのかもしれない。実際に見ていた魁人だって心のどこかにそんな想いがあったのだ。話に聞いただけの月夜たちは強く願っていたことだろう。

だが、紗耶は操られる演技などするような性質じゃないし、演技する意味もない。

魁人は一歩、前に出る。

「紗耶！ 聞こえてんだろ？ 何やってんだよ、お前」

紗耶は無反応。念のための問いかけだったが、現実を知るだけになった。それでもう、割り切るしかない。

「むうーですよ！ あなたの声なんて届きません！ 届くのは、蠱を通しての私の意思だけですからねえ！」

ステージでくつくつと嗤う巳堂を憎々しく思っていると、銀英が操られた生徒たちを見据えながら一つの指示を出してくる。

「魁人、『親』を探すんだ」

「親？」

「そう。魁人にはみんなを操っている蠱が見えているんだろう？」

あれだけの人数だからね。命令は『殺せ』とか『守れ』みたいな単純なものしか出せない。そしてその命令を出すリーダー的存在がいるはずなんだ。巳堂が直接制御している蠱はその一匹だけだから、それを見つけて潰せば全員助かるってことだよ」

「みんな……助かる。本当に」

それは、自分にしかできないこと。この眼が役に立つということ。一抹なんかではない、大きな希望が生まれてくる。

「わかりました。それで、見分け方とかはあるんですか？」

魁人はここに来てからずっと青く煌めいている魔眼に意識を持っていきながら訊くと、銀英は前方から注意を逸らさないままきっぱりと答えた。

「より強い魔力を持っていて、他よりも大きいやつがそうだね。たぶん、巳堂本人が所持してると思うけど」

（——え？）

魁人は、そういうものに見覚えがあった。

——彼女には特別強力な蠱を憑けました——

巳堂の言っていたことが脳内に蘇る。バネで弾いたように、魁人は青煌する魔眼を『彼女』に向ける。

そして——見た。

「……紗耶の、中です」

あのように並んでいるのだから簡単に比較できた。銀英の言う『親』がそういうものなら、間違いなく紗耶に憑いているものがそうだろう。

「そうか、最悪だよ」

「よりによって紗耶ちゃんになんて」

月夜と銀英は一瞬だけ驚いた風を見せたが、予想はしていたのだろう、すぐに冷静さを取り戻している。

「術者、殺すしかない」

葵が巳堂に視線をやる。もう彼女の言った方法しかないのだろうか。

「なあーにをごちゃごちゃと話しているのです？ ああ、いいーんです。いいーんですよ。作戦会議は君たちの必須科目でした。ですが、それは敵前でやることではなあーいでしょう！」

巳堂のやかましい声が場の主導権を握っているかのように響き渡る。

「さあー、まずは魔術師のあなたたちから蠱の糧となあーってもらいましょうか！」

それが開戦の合図となった。

紗耶が蒼炎龍牙を真横に構える。その刀身に蒼い炎が纏う。もう魁人も何度か見たあの炎だ。しかし――

「操られてる状態でも魔術って使えるのかよ」

自分を伸した時は蹴りだったため、魔術は使えないものとはばかり思っていた。ただでさえ厄介だというのに、これで倍以上に辛くなる。

「魔術は使えても、紗耶ちゃんの本来の力全部は出せないと思うのだからといって安心できることじゃないけど。……銀くんは紗耶ちゃんを引きつけて。その間に葵ちゃんは巳堂先生の始末をお願い」

魁人は月夜を振り向いた。今のは、あれだけ殺すことや力ずくの方法を最終手段としていた月夜の指示とは思えなかった。いや、あ

くまで最終手段として残している以上、月夜はただ甘かったり優しかったりするわけではない。

ここではその最終手段しかないのだと彼女は悟った。だから戸惑うことなく指示できたのだ。

了解した銀英に、魁人は押し退けられる形で強制的に下がらされた。

「魁人は会長と一緒にいること。死にたくなければ絶対に前線へは出ないことだね」

振り返らずに言われた。歯痒いが仕方ない。ここからは彼らの戦いだ。非力な自分は下がって見守るしかない。

言われた通り、魁人は月夜の近くで待機する。そこでふと思い、月夜に問う。

「月夜先輩は戦わないんですか？」

「あはは、まさか。そんなことはないよ」

微笑しつつ、月夜は取り出したケースの中から三本の白チヨークを抜いた。指の間に一つずつ挟んだ新品のそれは、彼女がルーンを刻むための道具の一つである。

「私は二人のサポート。私の術式は、直接戦闘にはあまり向いてないからね」

様々な月夜の魔術を魁人は体験しているだけに、それにはどこか納得するものがあつた。

前に出ていく銀英と葵の体内に魔力の高まりである炎を捉えながら、魁人は周囲の動きにも気を配る。

自分にしか見えない何かが起これば、すぐに伝えられるように――

悪魔の視力（6）

紗耶以外の生徒たちも、一斉に行動を始めた。全員が殺し合いを始めるのではなく、巳堂の意思通りに生徒会魔術師から殺すつもりらしい。

まるでゾンビのようにおぼろげな足取りだが、こちらが彼らに殺せない以上、厄介であることには変わらない。

「葵、リクに乗って一気に奴のところへ。こっちは僕が何とかするよ」

「わかった」

承知し、葵は飛び乗るように素早くリクに跨る。リクの脚力ならば、巳堂のところまで一つ飛びで行くことだって容易いだろう。だが――

「そおーはさせませんよ！」

巳堂が眼鏡を煌めかすと、紗耶が蒼炎龍牙を天井へ向けるように翳した。次の瞬間、刀身の炎が膨張し、火山が噴火したような炎の奔流を噴射する。それはあたかも蒼い龍が天へと昇るようにも見えた。

ある程度昇ったところで炎は重力に引つ張られるように弧を描き、ステージの前方に着弾。そのまま横方向へと不自然に燃え広がり、巳堂とこちら側を隔離するように高く炎上する。

破魔の炎である 蒼炎 は、仮にも魔獣であるリクにとって文字通り『越えられない壁』を形成したのだ。

「降魔障壁……。……ここまでの術が使えるのなら、ちょっと僕らまずいかもしれないよ」

「銀、どうする？」

「どうするってそりゃあ――！？」

魔力の流れを感じし、銀英と葵を乗せたリクは左右に飛んだ。ブウオン！ と空間ごと斬ってしまいそうな音を立て、今までいた場

所の空気を紗耶の蒼炎龍牙が薙ぐ。

そのまま彼女は葵とリクを狙って跳躍。刃を振り回し、蒼い炎を乱射する。が、葵たちは素早く複雑に動いてそのことごとくをかわした。外れた炎は床や壁に触れても引火することはなく、焦げ目だけ残して消えていく。

紗耶は明らかに他と動きが違う。これが『親』の力ということか。銀英がそんなことを考えていると、いつの間にか背後に近づいていた男子テニス部員が両手で首を絞めてきた。こちらは紗耶と違って単純な動きだ。

絞める力は強かったが、それで殺される銀英ではない。すぐさま振り解くと、流れるような動きでテニス部員の鳩尾付近に掌底を叩き込む。その際に除霊の護符を貼りつけたが、同じ憑きものでも呪いに対しては効果がないかもしれない。

案の定、吹き飛んだテニス部員は何事もなかったかのように起き上がってきた。——いや、それはおかしい。
「完全に意識を奪うつもりだったんだけどなあ。あー、そうか。最初から意識なんてないんだった」

つまり自分を取り囲もうとしている彼らは、殺されるまで動き続けるということだ。本当にゾンビのようである。

さらに何人が纏わりついてきた生徒たちにも普通なら気絶するほどの打撃をくらわせたが、誰もが何の問題もなく立ち上がった。銀英は小さく舌打ちする。

「さあーてさてさて！ 殺さないで殺されまーすよ？ といつても、この体育館は蠱術における『皿』。私はどおーちらでも構わないんですけどねえ」

炎壁の向こうから高みの見物をかましている巳堂の言葉はとりあえず無視。殺してはいけない、殺されてはいけない。もはや一方的な消耗戦だ。

と、リクが銀英の隣に着地してくる。

「銀、どうする？」

葵からさつきと全く同じ質問。銀英は数瞬だけ考え、首だけで後ろを振り向く。

「魁人！ 君の魔眼であの炎の壁に隙間、もしくは魔力の弱い部分がないか見てほしいんだけど」

「わかりまし——銀先輩ッ!？」

魁人の了解の言葉が悲鳴に変わる。

銀英と葵は同時に魔力の流れを感じてそちらを見る。紗耶が自分の周囲に炎の陣を描き、そこから生まれた無数の火炎球が流星群となつて襲いかかっていた。

今から動けば避けられないわけではない。だが、避ければ後ろの生徒たちが燃えてしまう。

「くっ！」

銀英は対抗するように掴めるだけの発破符を投げた。即行で九字を切り、印を結ぶ。

炎に触れれば先にこちらが燃えてしまったため、その直前で起爆。それで消滅した炎はあるが、全てを消すことはできない。しかし、発破の衝撃で炎の軌道が変わったため、自分たちはもちろん背後の生徒にも被害はなかった。

と――

「！」

爆煙の中を紗耶が突っ込んでくる。刺突に構えられた蒼炎龍牙の刃が残り十数センチで銀英の喉元に届こうかという瞬間、リクが体当たりで紗耶を突き飛ばした。

受け身は取れずに床を転がる紗耶。当然、悲鳴などは上がらない。

「いやあ、助かったよ」

リクと葵、両者ともに銀英は礼を言う。葵は無言だったが、リクは『わうっ』と返事してくれた。

「銀、もう紗耶を殺すしかない？」

疑問形なのは、葵も躊躇っているからだ。確かに意識を失わずことができない以上、術を解くには紗耶を殺さなければならぬ。だ

が――

「ダメだよ、葵。誰か一人でも殺せば呪いがかかってしまう。そう
なったら、いくら僕らでも死ぬか蟲になるかのどちらかしかなくな
るんだ。他の手を考えないと。せめてそれまで、紗耶がおとなしく
してくれると助かるんだけどねえ」

「凍らす」

「いや、たぶんそれは無理……」

と言っているそばから紗耶が立ち上がる。蒼炎龍牙を構え直し、
空虚の瞳がこちらをロックオンする。

その時、彼女の周りに白い粒子が舞った。それはたちまち奇妙な文
字を形成して彼女を囲う陣となる。月夜のルーンの魔術――封滅
の檻だ。

陣の文字が純白に輝く。瞬間、同じ輝きの糸のようなものが彼女
を雁字搦めにした。

悪魔の視力（7）

「やった！ 紗耶ちゃん動くから狙いがつけにくかったけど、タイミングばっちりね」

そんな月夜のガッツポーズでもしてそんな声を横から聞きながら、魁人は銀英に頼まれた『穴』探しをやっていた。

大火事になりそうで、しかしそれ以上燃え広がることのない炎の壁—— 降魔障壁 とか銀英が言っていた—— は、魔術そのものだけに魔力の塊だった。

正直、色のついた光体の中に魔力である透明な輝きを『見る』ことはかなり意識を魔眼に集中する必要がある。見えないわけではないので、ちゃんと意識すればはつきりと映った。

だが、はつきりとしているだけに、探し物の有無もはつきりとわかる。

「……ない」

絶望的な表情で、魁人は呟いた。

「抜けれそうなどこなんて、どこにもないじゃないか」

巳堂のいる側へ行けないことには、この戦いは終わらない。それは銀英たちの戦闘を見ていたら理解できる。終わるとすれば、こちらが消耗して殺される時だけ。紗耶の動きを止めたからといって、そこは変わらない。

この状況を何とかしたいが、魁人には致命傷を与えないように手加減して生徒たちと戦っている銀英たちを眺めることしかできなかった。

「月夜先輩、あの炎の壁、どうにか破ることはできないんですか？」
魁人は訊ねる。返ってくる答えが自分にもやれることだと期待して。方法があればとづくにやっているだろうことも理解した上で、訊ねる。

「私たちには無理かな」

わかっていた。そう返ってくることは何となくわかっていた。

「私の術じゃ弱すぎるし、銀くんの魔術は御札だから、発動前に燃やされちゃう。破魔の炎をリクちゃんが突破することはできない。ついでに言えば、この体育館が魔術の『皿』として機能している以上、外にも出られない。あははー、手の打ちようがないわね」

「笑ってる場合じゃないですよ！」

月夜に余裕があるとは思えない。人間、本当にどうしようもない時にはつい笑いたくなってしまうのだろう。

だが、魁人は諦めない。笑えない。諦めてしまえば、立ち向かうと決めた自分を否定してしまう。

月夜だって諦めてなどいないはずだ。証拠に、彼女はチョークを一本ずつ削って向こうの援護を怠っていない。チョーク一本で一人束縛できるみたいだが、紗耶については三本使っていた。それは本数を増やせば増やすほど術が強固になるということらしい。

あとどれほどストックがあるのかは知らないが、なくなる前に何か策を見つけないければ……。

（何か、何かあるはずだ。魔術だって完璧じゃないんだろ？ だったら、その何かを、俺が見つけるんだ！）

自分にしか見えない世界からそれを探し出す。魁人は炎壁を凝視した。一点でいい、あの壁に一点でも魔力の綻びがあればどうにかなるかもしれない。だが――

「んんー？ はあー柴魁人君！ ああーあなたはその魔眼で何をしようというのですかあ？ 何もできないとは思いますが、とりあえず先に潰しておきましょうかねえ！」

「――ッ！？」

いつの間にか、魁人と月夜は周囲を操られた生徒たちに取り囲まれていた。月夜は銀英たちの援護に集中を割いていたし、魁人は炎壁ばかりに注意が行っていたため彼らの接近に気づかなかったのだ。魁人の首に手が伸びてくる。咄嗟にその手首を掴むと、柔道でもするように相手を投げ倒した。見ると、体操着を着た女子生徒だっ

た。女の子にこんなことするのはいい気分ではないが、やらなければ殺されるので仕方ない。

一時凌ぎに過ぎないことは十分理解しているのだけれど……。

「きやつ!？」

月夜の短い悲鳴が聞こえて魁人は反射的に振り返った。そこでは大柄な男子生徒——恐らくバスケット部員——が、その筋肉質な腕を月夜の背後から首に巻きつけるようにしていた。月夜は巻きついてきた腕と首の間に自分の細腕を入れていて、完全に絞まることだけはどうか防いでいる。

だが、彼女よりも二十センチは背の高い男子にそんなことをされては爪先立ちになる他なく、彼女は完全な死に体をさらしている。そこへ他の生徒たちが動きの鈍い蟻のように群がっていく。

「月夜先輩!」

魁人はまず月夜の首に絡みついていた腕を力づくで引き剥がし、その腕の主をとりあえず蹴り飛ばす。そして群がってきた生徒たちも、投げたり突き飛ばしたり、時には殴ったりして倒していく。もちろんすぐに起き上がってくるが……。

もし彼らが人並みの動きをしていたら二人とも呆気なくやられていたことだろう。

「あ、ありがとう、魁人くん」

「いえ。ていうか、月夜先輩は体術とかできないんですか？」

「あはは、あんまり得意じゃないかな」

意外に思ったがそれが普通なのかもしれない。魔術師はあくまで『魔』術を使うのであって、『体』術を使う者ではないだろうからとなると、弱虫を嫌っていた紗耶がなぜ彼女を慕っているのかと疑問に思わなくもないが、そこは今考えることではない。まあ、彼女は別に『弱虫』ってわけでもないし。

「それよりも、ごめんね。今で紗耶ちゃんを放しちゃった。ほら、チヨークのルーンって簡単に消えちゃうから」

済まなさそうに月夜は打ち明けてきた。見ると、紗耶がまた銀英

たちを襲っている。ルーンは文字そのものを刻むだけで効果があると聞いたが、やはり術者とはリンクしているらしい。

紗耶の火炎を結界のようなもので防ぎ、銀英が言ってくる。

「魁人、どこか抜けられそうなところはあったかい？ あと会長はしつかり紗耶を抑えていてほしいねえ」

彼の声にはまだ余裕があるように思えた。

「まだ見つかってません。でも、絶対に探してみせます！」

力強く言くと、彼は『期待してるよ』と言いながら紗耶の剣閃をかわす。その紗耶に葵を乗せたリクが口から吹雪のようなものを吐き出すが、紗耶の炎がそれを呑み消した。

第三者の位置だったら思わず見入ってしまうだろう戦闘から目を離し、魁人は再度炎の壁ににらめっこを挑む。

（そうだ、俺は早く魔力の『穴』を見つけないと！）

しかし、そんなことさせないように、再び誰かの手が横から魁人の首を絞めようと伸びてくる。

「く、また——！？」

振り返る勢いでその手を弾こうとした魁人だが、そこにいた人物を見て硬直する。

鈴瀬明穂だった。

悪魔の視力（8）

「す、鈴瀬……ぐっ」

その名を呟いた瞬間、彼女の小枝のように細くて白い両手が魁人の喉を圧迫する。独特の違和感と苦しみが襲いかかり、吐き気のよ
うなものが込み上げてきた。

凄い力だった。とても鈴瀬のような弱い少女が出せるようなものでは
ない。これも操られているからだろうか。

「魁人くん！」

月夜は他の生徒を捌くのに必死で、とても助けに来られそうにな
い。

何とか、彼女の両手首を掴んで首から僅かに放すことだけはでき
た。だが、どうしても知っている人だけに暴力的なことをするのは躊躇
ってしまう。代わりに、声が出た。

「鈴瀬、俺がわかるか？ 羽柴だ」

こんな近くに助けたかった少女がいるのだ。黙ってなどいられる
はずがない。

「助けに来たんだ。だから、もうこんなことするなよ」

鈴瀬に反応はない。虚ろな瞳は、虚ろなまま一点の光も取り戻さ
ない。

「おやおやおやあ、あなたは人形に向かって何を真剣に話しかけて
いるのですう？ くくく、私より愉快な人ですねえ！」

ピクリ、と魁人の眉が動く。

「人形……だと？」

これほど凄みの利いた声を放ったことが今までにあっただろうか。
背後の月夜がピクリとするほどの威圧感がそこに込められていた。
しかし、叫んだわけではないので、炎壁を間に置いたステージにい
る巳堂まで届く音量ではなかった。

が、巳堂は魁人が何を言ったのかわかったように続ける。

「そーですよ？ 実際に意識も感情もないのですからソレは人形なあーんですよ。所詮人形、しかあーし、私にとっては大事な大事な生贄です。人間からできた『蠱』という、倫理に縛られ誰も作ろうとしなかった未知の作品を私は作るのですよう！」

「てめえ！ そんなものを作って一体何がしたいんだ！」

今度は叫んでいた。銀英から聞いた話によると蠱は薬になるらしいが、巳堂がそんなものを作るとは思えないし、人間からできた薬なんてふざけている。

「そーですねえ……私を追放した者たちに私の凄さを死をもつて見せつけるつもりですが、私が蠱を作る一番の理由は、見たいからですよ！」

「見たい？ 何がだ!？」

「蠱に決まっているでしょう？ 人間の蠱なんて誰も見たことないんですから、私はそれを是非とも見てみたいのです！ 探究者という者は皆、そーんなものです」

「それだけのために……こいつやっぱり外道だ」

吐き捨てる魁人。

ただ見たいだけ。馬鹿げている。馬鹿げてもうこれ以上奴と口を利きたくない。

魁人はなお力を入れてくる鈴瀬の手首をしっかりと握り、寄ってきた他の生徒を蹴り飛ばしておいてから、彼女をまっすぐに見詰めて言葉をかける。

「なあ、鈴瀬。本当は聞こえてるんだろ？ 俺のこと見えてるんだろ？ こんなことしたいだなんて思っていないんだろ？ なあ！」

次第に声を荒げていく。が、やはり反応はない。

「だあーかあーらあー、無駄だつていいーってるでしょう？ どんなに声をかけても、あなたの声など蟻の触覚ほども届いていませんよう！ 馬鹿なんですかあ？ 馬鹿なんですねえ！」

「うるせえ！ てめえは黙ってるよー!!」

激情に任せて魁人は絶叫する。と、銀英が振り向き、普段よりも

数倍は真剣な声で言うてくる。

「魁人、気持ちわかるけど怒りや憎しみを覚えるのはダメだ。そういう感情は呪いになる。だから巳堂の言葉は聞かない方がいい」
そうは言うが、怒りを抑えることはできても感じないようにするなんて不可能だ。それに巳堂の言葉は嫌でも耳に入ってくる。

「くくく、そーだ！ 一つだけ感情を取り戻せる方法を教えてあげましょうか？ そーれはですねえ、殺してあげることです。殺される寸前に『憎しみ』や『怒り』といった呪いの素となる感情を取り戻してあげられるのですよう！ さあ、早速殺ってみなさいっ！」

殺したいほどム力つくが、無視だ。

「大丈夫。俺は鈴瀬やみんなを殺したりなんかしない。だから安心しろ。そして呪いなんかに負けるな。体の蠱を追いつすんだ。その後は俺が、俺たちが必ず何とかするからさ」

怒りの感情をできるだけ押し殺し、魁人は優しい口調で鈴瀬に言った。

絶対に声は届いていると信じて、言った。

内容は正直月並みな頭の悪いものだと思う。元から用意してきたものではなく、こんな時に咄嗟に出した言葉なのだから仕方がないだろう。だが、その分そこに演技などではなく、魁人の素の想いが込められていた。

鈴瀬の口は動かない。首を絞めようとする力も弱まることはない。瞳も、相変わらず光を失ったままだ。

だが――

彼女の頬を、一滴の雫が伝った。

「！？」

彼女の目には涙が浮かんでいたのだ。まさか自分の言葉に感動したわけではないだろうが、確かに彼女は泣いていた。

いや、彼女だけではない。

見える範囲だが、他の操られた生徒全員にも微かに目の端に水滴が見て取れた。

（何だ、やつぱり聞こえてたんじゃないか）

魁人は静かに俯く。

「おい、巳堂。見えるか？ こいつら泣いてるぞ？」

それはかるうじてステージまで行き渡る声だった。

「苦しいんだ。みんな苦しんでるんだよ。てめえのふざけた実験のせいで、みんな泣くほど苦しい思いをしてるんだ！」

自分の言葉は、彼女たちの『苦しみ』を表面に引き上げることに成功した。それだけでも効果があつたことに、魁人は喜びさえ覚えた。しかし巳堂は、

「泣いてるう？ いいーや見えませんねえ？ 人形が泣くはずないじゃないですかあ？」

見えないのは当然だ。ステージからは距離があるし、何よりあの炎壁が視界の邪魔になる。

だがそれを知った上で、魁人は見えていること前提に問いを投げかける。

「一つ訊く。てめえは仮にも先生だろ？ こいつらが泣いているのを見て、何とも思わないのかよ？」

「だあーから人形は泣かないって言ってるでしょう？ まあ、仮に泣いているとすれば、思うところはあります。それは凄く、実に、絶対に、蠱にしてみたいほど興味深いですねえ！」

——プチン

魁人の中で、何かが切れる音がした。

周りが沈黙する。——違う。魁人の聴覚が音を拾わなくなったのだ。

代わりに聞こえるのは、サァー、という自分の血液の流れでも聞

いているような音。しかし聞いていて心地のよくなる音色は、確実に体のある二点へと集中していく。

——魔眼へ。

頭を上げ、カッ、と目を見開く。

瞬間、周囲の者には青色の光が漏れたように見えたことだろう。そこには、蒼海のごとく深く澄み渡った青の瞳が凜然と煌めいていた。

その魔眼に映るのは、鈴瀬の体内に宿る一匹の蜘蛛。

「——消える」

ぼそりと呟いた瞬間、見えていた蜘蛛の光が歪み、そして爆ぜるように跡形もなく綺麗に霧散した。

続いて鈴瀬の瞼が落ちたかと思うと、彼女はそのまま弛緩し、糸が切れたように魁人の胸の中へと倒れ込んだ。

悪魔の視力（9）

とてつもない魔力の高まりを、月夜は魁人から感じていた。

（——殺した！？）

一瞬、倒れた鈴瀬を見てそう思ってしまったが、魁人が彼女を抱えて体育館の隅へ運んでいるのを見てそれを否定する。

彼女はまだ生きている。だが、月夜には何が起こったのかまだわからなかった。ステージの上では巳堂もあんぐりと口を開けて固まっている。『開いた口が塞がらぬ』という言葉に描いたような姿だ。

すると、紗耶を葵とリクに任せた銀英が他の生徒たちを押し除けながら駆け寄ってきた。

「会長、一体どうしたんだい、魁人は」

「……さあ？」

月夜は首を捻ることしかできない。

魔眼の煌めきが増したことはわかる。まるで本来の力でも開放したような変化だった。

（本来の、力？）

——この眼は悪い魔法使いを倒せるほど凄い——

魁人が夢の中で聞いて思い出したという言葉。あれがそうなのだろうか？ だったら、それはどんな力だろう。

見ただけで殺せる『バロールの邪眼』、見たものを石に変える『石化の魔眼』、相手に不運をもたらす『妬みの眼差し』など、魔眼は強力なものから微妙なものまで様々だが、たったあれだけのことで判断できない。今のところ、『バロールの邪眼』が一番近そうであるが……。

その時、蒼い光が爆発した。

魁人の魔眼からではない。それとは別種の熱を持った輝き——紗耶の炎だ。

その爆発に吹き飛ばされたように、葵とリクが倒れ込んでくる。

「葵ちゃん！？ リクちゃん！？」

彼女たちに直接的な傷はないが、多少炎を浴びたのだろう、ところどころ火傷を負っている。

「……不覚」

葵が紗耶を睨めつつ立ち上がると、リクも同じように唸りながら身を起す。

炎纏う日本刀を右手に、紗耶はゆっくりと月夜たちの方に歩いてくる。彼女の目には、他の生徒たち同様一滴の涙が浮かんでいた。

「そ、そーです！ 神代紗耶さん！ 魔術師たちをさっさと葬ってしまいなさいっ！ まずは、羽柴魁人からです！」

我に返った巳堂が喚いている。その声からは明らかな焦燥が読み取れた。命令通り、紗耶は彼にその焦りを植えつけた張本人である魁人へと進路を変更する。

鈴瀬を体育館の隅に寝かせ終えた魁人は立ち上がり、何を考えているのか紗耶に向かって前進する。

だがすぐに両者とも立ち止まった。その距離約十メートル。

紗耶が蒼炎龍牙を両手持ちし、大上段に構える。その刀身の炎が噴き上がるように天へと昇ったかと思えば、炎自身が刃の形となった。それはまるで、巨大化した蒼炎龍牙そのものみたいだった。

十メートルの距離などないにも等しいリーチ。それを見ても、魁人は逃げようとすらない。

「魁人くん！ まさか紗耶ちゃんと戦う気！？ 無茶だよ！」

「たぶん、大丈夫です」魁人は振り向かず、「俺、何となくですけど、この眼のことがわかったんで。それに、すぐ終わると思いますよ」

彼は言った。操られているとはいえ、あの神代家の至宝を受け継いだ紗耶に対して、『すぐ終わる』と。月夜はもちろん、銀英や葵にだってそんなことは言えないだろう。

当然のように、紗耶が先に動いた。

炎の巨刀がまっすぐに魁人目がけて振り下ろされる。ゴオオ、と暴風でも吹き荒れた時のような戦慄の音が唸りを上げる。

しかし魁人は動じない。微動だにしない。後ろに鈴瀬がいるからという理由もあるだろうが、恐らく、避ける必要がないのだ。月夜には、そんな気がした。

空気を焼き斬り、全てを灰燼に帰す降魔の炎刀が頭上に迫りくる。残り一鼓動で刃が届きそうになった刹那――魔眼が強く煌めいた。途端、紗耶の蒼い炎が捻じれるように歪む。そのまま雑巾を絞りすぎて千切れてしまったように炎刀が分離され、構成していた蒼い炎は蠟燭の火を吹き消すように空気に解ける。

「なっ、なっ、なあーっ!？」

ありえない光景に口をパクつかせる巳堂。月夜たちも、他の操られた生徒たちを相手にしながら声を出すことを禁じられたように絶句していた。

（なん……なの……）

どう考えても、見たものを殺すような力ではない。魔術を打ち消した――にしては少し様子が変な気もする。もの凄い力で引き千切ったような、そんな感じだった。

紗耶は全く怯むことなく（正常なら怯んだらうが）、敵を討ち取れなかったことだけを認識して次の攻撃に移行する。

蒼炎龍牙を顔の横で刺突に構え、刃の切っ先から炎線を射出。蛇が這うような複雑な軌道を持って魁人へと襲いかかる。

「――曲がれ」

魁人が呟いたのを、月夜は聞き逃さなかった。

その呟き通り、炎線は横から暴風にでも煽られたように巳堂のいるステージの方へと進路変更した。いや、させられた。

「ひいっ!？」

情けない悲鳴を上げる巳堂の前で、炎線は炎の壁に吞まれて消失する。

紗耶が次の行動を起こす。跳躍するように床を蹴り、一瞬にして

十メートルの距離を踏破しようとする。遠距離は効かないと蠱が判断したのだろう。だが――

「紗耶、お前もいい加減に目を覚ませよ！」

魔眼が煌めく。途端、力が抜けたように彼女の足がカクンと折れ、縛れ、勢い余って転倒する。彼女が完全に倒れてしまいう前に、魁人がその体を優しく抱き支えた。炎の消えた蒼炎龍牙が手から零れ、乾いた音を体育館に響かせる。

彼女の体から紫色の靄が湯気のように出てくる。数瞬の間を置き、他の生徒たちも脱力したように倒れ、全員から同じ瘴気のようなものが抜けていく。それは、『親』である蠱の完全消滅を意味していた。

フツ、と吹き消したように炎壁も消え去る。その奥には、この世の終わりでも見たような顔をした巳堂が立ったまま震えていた。

「会長、魁人の眼なんだけど、まさか」

「あ、銀くんも気づいた？」

一番近くで倒れた女子生徒の安否を確認している銀英に、月夜は魁人から目を離さずに考えを述べる。

「最初は魔術を打ち消したんじゃないかなって思ったんだけど、違う。魁人くんの眼は、どうも魔力を操作してるみたい」

それもただ術を方向転換させたりするだけではなくて、炎刀を消した時のように、込められた魔力を捻じ切ってバラバラにしたりすることもできるようだ。

月夜は知っていた。あまり詳しいことは載っていなかったが、目を通していた資料の中にそういう魔眼の存在が書かれていた。

見える魔力を、術者の意思を上から書き換えて、操作する魔眼。その名は――

「『デモンズサイト悪魔の視力』。――魁人くんの眼は、きっとそれだよ」

良い悪いはともかくとして、魔術師相手なら最強の部類に入るこ

と間違いない魔眼。

「危険？」

葵が僅かに首を傾げる。

「大丈夫……と思いたいところね」

「『悪魔の視力』ねえ。『バロールの邪眼』みたいなものじゃなくてよかつたんじゃない？」

銀英は立ち上がる。彼が診ていた女子生徒もそうだが、皆多少の怪我はしているも無事のようだった。

月夜は一度皆を見回し、そしてステージの上に立つ白衣を見やる。

「何にしても、魁人くんのおかげで蠱術は失敗したみたいね」

完全に勝ち誇った笑みを、彼女は浮かべていた。

悪魔の視力（10）

ステージの上からの眺めは実に痛快なものだった。

そう、さつきまでは。

「何、なんです……なあーなんですかアレはあ！？」

巳堂は声を荒げるほかなかった。切り札だった神代紗耶が得体の知れない力に敗れ、炎の壁もあの通り焦げ痕だけ残して綺麗になくなっていくのだ。もう自分を守るものがない。

他の操っていた生徒たちも倒れてしまつて動かない。あれが死んでいるのかどうかはここからではわからないが、恐らく死んでいない。

死んでいるのなら、殺した者に呪いがかかつてさらなる殺戮を始めるはずである。何もないということは、全員生きているということだ。

「アレが、あの魔眼の力だというのですかっ！？」

怒りや憎しみの感情を膨らますための言葉が、眠っていた魔眼の本質を目覚めさせてしまった。自業自得とはこのことである。

生徒会魔術師たちと、羽柴魁人がこちらへと向かってくる。今一度、神代紗耶に仕込んだ『親』に意思を送ってみるが、結局は無駄だった。

「本当に、蠱と私のリンクが切れたよーですねえ。やはり、術は失敗……くく、はははははははあ！ 許しません！ 許しませんようー！」

人間の蠱を作るという自分の夢を、奴らはぶち壊しにした。魔術師を蠱術に使うという欲求を出したことが間違이었다。いや、あの場で羽柴魁人を殺すか操り人形にしておくべきだったのだ。そうすれば生徒会魔術師たちには何もできなかったはずだ。

時期を置けば再び人間で蠱術をすることはできる。だが、そのためにはまずここから逃げ出さなくてはいけない。しかし、ステージ

側に外へ続いているような出入り口がないのは痛い。

（このまま逃げる？ 私が？ くく、それもあーりでしょうが、私の受けた屈辱を生徒会の連中に返さなくてはいけません。具体的に一文字で言えば、『死』で）

しかし、もうストックしていた蠱はほとんど使い果たしている現状。残りは、白衣のポケットに忍ばせている小瓶の中に一体のみ。

（できれば、これは出したくない失敗作だったので……この際しようがありませんねえ）

唇がニヤリと歪む。

（どおーせもうこの学園にはいいーられないんですからあ、最後は派手にいきましようかねえ）

眼鏡の奥の瞳に狂気めいた色を宿し、巳堂はポケットの『失敗作』を握り締める。

悪魔の視力（11）

巳堂が何か取り出した。

例の蠱を入れておく小瓶だ。昼間に見たものより少し大き目で、封印の札らしき紙が何重にも巻かれている。

だが、中身までは魁人には映らない。それは今の魔眼の状態でも変わらない。

——不思議な感覚だった。

この眼に見える魔力の光が、何となく思い通りになるような気がしたのだ。まるで魔眼自体に知識があつて、扱い方を脳に直接レクチャーしてくれるような、そんな感覚。

だから、鈴瀬を苦しめている蜘蛛に消えてほしいと思った。そうしたら眼に強い力が感じられ、本当に思い通りになったのだ。

そういえば、一昨日もこんなことがあつた。貝崎に殺されそうになったあの時だ。

魔力が見えるだけと聞いた時の違和感。その正体に今自分は触れている。

——この眼は悪い魔法使いを倒せるほど凄い——

夢で聞いたことを自分の言葉に直したもののだが、確かに凄いと思った。もしかしたらあれは魔眼が見せた夢で、父はそんなこと言つてなかったのかもしれない。

とにかく、今の魁人は魔術師相手に負ける気がしなかった。

「ステージから降りろよ、巳堂。そこは観客席じゃないんだ」

特に巳堂には絶対に負けない。負けられない。傍には先輩たちだつてついている。

「なあーにを言っているんですかあ！ 私はここでいいーんですよ、主役ですから」

「巳堂先生こそ、今さら何を言ってるの？ 蠱術は失敗に終わったのよ？」

月夜は彼をまだ『先生』と呼んでいるが、そこには敬いの気持ちなど欠片も見当たらない。敬語じゃないのがその証拠だろう。寧ろその『先生』には皮肉めいたものを感じる。

「ええーそーですよ！ あなたたちのせいでめちゃくちゃです！ ですが、それはあなたたちを術に組み込もーとした私の責任。よーって、あなたたちを、いえ、もうこの学園ごと殲滅することで責任を取らせてもらいます！」

巳堂は小瓶の蓋代わりになっている札を剥がす——ことはしないで、そのままステージの上から勢いよく投げ捨てた。床に激突し、パリン！ と高い音を立てて小瓶は粉々に砕け散る。その瞬間、毒ガスのような紫色の靄がふわっと噴き上がった。

「！？ みんな、離れるんだ！」

それを見た銀英の叫び。魁人たちは頷くこともせずに従い、体育館の中央線を越えた辺りで足を止めて振り返る。と、そこには塔が建っていた。

否、塔ではない。そう思ってしまうほど、巨大な何かだった。ゆっくりと見上げていく。

まず、茶色い毛に覆われた八本足の土台があった。蜘蛛としか表現できないそれは、その時点でブルドーザーのような巨大さを誇っている。

次に、本来は蜘蛛の頭がある場所から黒いものが垂直に生えているのが見えた。それは心なしか人の形を——いやもう人間の上半身そのものである。ボディービルダーも霞んで見える筋肉質な肉体は、その巨大さと全身が影を物質化させたように真っ黒だったことから人間のものではないことはわかる。

さらに見上げると、二つの血色に鈍く光る目があった。その上の禿頭からは、トリケラトプスのような三本の太い角が突き出している。

一言で表すなら『鬼』だが、下半身は蜘蛛だ。ついでに言えば、背中にカラスみたいな翼が右翼だけ生え、左翼があるはずの場所に

は昨日見たような大百足らしき物体がうねっている。

「何だよ、あれ……やっぱり蠱なのか？」

襲ってくる吐き気や恐怖を抑え込み、魁人は煌々とする魔眼である怪物の魔力をスキャンする。すると、他の蠱と同様に、全身に隈なく行き届いている魔力の光を確認できた。それに、これも他と同じだが、魔力の核と思われる炎や光球は見当たらない。

「あれが魔獣を使った『蠱』だよ。まさかもう手を出していたとは思ってなかったねえ」

怪物を見上げる銀英の頬に冷や汗が伝う。月夜や葵も、ヒーロー物にでも出てきそうな怪獣的存在を前に動けないでいる。それほどまでに危険な気配を——いや、もう見ただけで危険だと判断して脳内が警報を鳴らしている。

「あんなのに暴れられたら、学園どころか街ごと壊滅しちゃう……」
最悪の事態を想像してしまったのか、月夜の声は震えていた。

「ここで倒す」

葵は普段通りだが、そこに余裕は感じられない。

すると、ステージの上の巳堂が堰を切ったように笑い始める。

「く、く、はは、ははははははははははははははははははははははあつ！
！ どおーですどおーですか！ これぞ私の最強の蠱にして最大の失敗作！ 果たしてあなたたちに倒せますかあ？」

「失敗作？ やっぱり制御できなかったってことかい？」

魔獣を使った蠱は絶対に制御できないから禁忌。銀英の言っていたことを魁人は思い出した。巳堂はどれだけの禁忌を破れば気が済むのだろうか。

「そのとおーりです！ しかあーし、そんなことはどおーでもいいんですよ！ この失敗作は、置土産としてあなたたちにプーレゼントする——！？」

その時、魔獣の蠱が動いた。

声を張り上げる巳堂を鬱陶しく思ったのか知らないが、あの怪物は鬼の上半身を捻って血色の目に巳堂を捉える。

巳堂は短く悲鳴を上げて怯えるように後ずさる。

巳堂は、命令を最後まで言うことができなかった。

一瞬だった。巳堂が何かを思う暇すらなかっただろう。

挟り取られたステージに、白衣の姿はない。外まで吹き飛んだのか、粉々になったのか、何にしても生きているとは思えない。

魔獣の蠱にとつては耳元でうるさくする八工を掃つただけだろう。そして、奴にとつての八工は巳堂だけではない。次なる排除対象は目の前にいる魁人たちである。と――

吠えた。空気を吹き飛ばすような超音波が体育館全体を振動させる。音波が衝撃となったのか、音源に近い窓ガラスは次々と割れ、壁や天井からはパラパラと細かな破片が落ちてくる。

目眩がするほど強烈なハウリング。咄嗟に耳を塞いでいなかったら危なかった。意識のない生徒たちは大丈夫だろうか。

「みんな、大丈夫？」

「ま、何とかねえ」

銀英や葵、人間よりも聴覚が発達してそうなりクも問題はなさそうだ。魁人も大丈夫だということを月夜に伝え、銀英に一つ質問す

る。

「銀先輩、巳堂が死んでも蠱は消えないんですか？」

「いや、そんなことはないはず。あのバケモノがまだ残っているのは、制御下に置かれてないものは術者が死んでも消えないってことなんだろうね。もしくは、まだ巳堂が生きている、とか」

「巳堂が、まだ……」

とてもそうは思えないが、生きているとすればありがたい。一発殴ることが出来るから。無論、そのためには眼前の問題をクリアしなければならぬが。

「あれ、倒せるんですか？」

「難しいだろうねえ。あれだけ大きいと、僕らの攻撃が効いたとしても滅ぼすことは無理そうだ。放っておいても、数日は死なないだろうし……」

「銀くん、魁人くん、お喋りしてる暇はないみたいよ」

月夜の深刻な声。あの怪物が、狙いをつけたようにこちらを見下していた。

「来る」

葵が言った途端、八本の足が前進を開始する。背中のカラスの右翼が羽ばたき、百足がぐによぐによとねる。出たばかりで体思うように動かないのか、動きは意外にも鈍い。

（まずい）

それでも、これ以上ここで暴れられると皆が危ない。生徒たち全員を担いで避難させるには、あまりにも人数が多すぎる。

月夜たちではどうも倒せそうにない。ならば――

「俺が、やるしかない！」

意を決し、魁人は怪物と対峙するように一歩前に出る。どれだけバケモノじみても、あれだって『蠱』であることに変わりはないはずだ。だったら、鈴瀬や紗耶に取りついていたら蜘蛛を掃った時のように、この眼で消せる。消してみせる！

月夜たちは魁人の意向を汲んでくれたのだろう、三人とも何も言

わずに見守っている。ただ何があってもいいように、月夜はチョークを、銀英は護符を、葵は短刀をそれぞれ握っている。

意志を強く持ち、魁人はバケモノの巨大な魔力をその眼で捉える。そうしたところで、思う。

（——消える！）

カッと見開くと同時に魔眼が青く煌めく。魔獣の蟲が動きを止める。

しかし——

「!？」

バケモノは、バケモノの姿のままでそこに健在していた。

「き、消える！ 散れ！ 捻じれろっ！」

声に出すことで意思を明確化させるが、言葉を連ねることに魔眼は煌めくものの、どうしても蟲を消滅させることができない。

（まさか、魔眼が元に戻ったのか？ それとも思うだけじゃダメだったのか？——いや違う）

蟲の魔力は間違いなく歪んでいた。それが見えていた。だが、歪んだ箇所はほんの一部、すぐに復元してしまった。

「あいつが……でかすぎるんだ」

巨大且つ強大な魔力の塊を動かすには、魁人の意思や力はちつぱけすぎたのだ。蟲術で魔獣を禁忌としているのは、絶対に制御できないから。つまり、制御できないほど強力なものができてしまうということだ。

自分ではあれを倒せない。消すことができない。せつかく『悪い魔法使いを倒せる力』を手に入れたのに、肝心な時に意味がなくなつた。

どうしようもない絶望感が魁人を襲う。

と、魔獣の蟲が唸り声を上げる。背中の翼を揺らし、百足をくねらせ、まるで今しがた自分の身に起こった些細な違和感を確認するように腕を回す。そして動けることを知った途端、魔獣の蟲は蜘蛛の足を這わせて移動を再開しようとし——

——超特大のルーン陣に取り囲まれた。

次の瞬間には、純白の光糸が無数に陣から飛び出し、魚を網で捕えるようにその巨軀を強く拘束する。

「大丈夫、魁人くん？　もしかして魔眼の調子が悪いの？」

月夜が心配を含んだ優しい声をかけてくる。彼女はあれを囲むほどの巨大な陣を描いたのだから、残りのチョークは全て使い果たしているかもしれない。

魁人は忌々しげに蠱を睨め上げ、

「たぶん、違います。あいつ、でかすぎて俺の魔眼が効かないんです」

「だったら、少し弱らせればいいんじゃない？」

その声と同時に、数枚の札が紙にしてはありえない速度と正確さで宙を駆けた。それが蠱へと貼りつく寸前、札が岩塊の槍へと変化して鬼の上半身に突き刺さった。血のような黒い液体がそこから流れ出る。

悲鳴のような咆哮が上がる。しかし、魔獣の蠱にしてみれば岩塊の槍など爪楊枝にも等しい。そんなもので殺されるはずもなく、拘束を解こうともがき始める。そこへまた護符が飛び、糸に絡まれながらも暴れようとする腕にピタピタと貼りつくと、両腕合わせて計六回の爆発が動きを禁じた。

槍や爆発で輝く糸が切れるのではと思ったが、ルーンの魔術はルーン文字が生きているかぎり有効。糸での拘束も持続されたままである。

「いやあ、動きが鈍いつてのは助かるね。巳堂が失敗作って言ったのはただ制御できないからってわけじゃなかったみたいだ」

いつもの爽やかなのにどこかニヤケたように見える笑みを浮かべる銀英。余裕とは違うが、そこには勝機が見えているようだった。

「リク、　絶氷の息吹」

それを認め、魁人よりも前に出ていた葵は振り向く。

相変わらずの無表情だが、確かに彼女の言う通りだろう。自分はいずれあれを倒せる可能性を秘めた眼を持っているが、強大すぎる力の前では無駄に等しい。生徒会魔術師はあれを滅ぼすことこそできないが、力を削ぐことならできる。

が

凍っていると思われる頭部から再びあの超音波が発せられる。

今度は、耳を塞げなかった。周りの音が何も聞こえなくなり、頭がくらくらして意識が途切れそうになる。たまらず膝をつく。月夜たちも、同じように跪かされていた。

魔獣の壘の頭部は凍ってなどいなかった。それどころか、今の音波の衝撃でルーンが吹き消えて輝く糸が消失し、自由になった腕で突き刺さった岩塊の槍も抜いていく。

(何を――)

するつもりだ、と思いかけた瞬間に答えを知る。魔獣の蠱は、その大きく開いた口から火炎を吐き出したのだ。

迫りくる灼熱の吐息。月夜たちはまだ動けないでいる。

「くそっ！」

思いつ切り目を見開いた。すると、魔眼の煌めきに合わせて火炎放射は根元から四方に爆ぜて消滅する。まだ、あの程度なら魔眼は有効のようだ。

だが、今のは防げても、本体を消せないことには意味がない。

炎は効かないとわかったのか、やはりゆっくりとした、しかし先程よりも速い歩行で魔獣の蠱が迫りくる。

絶体絶命、いや、もう終わりだ。

そんなことを思ってしまった。思ってしまうと、全部諦めてしまふ方向へ思考が走ってしまう。ダメだ、と抑制しても、絶望の念は止まらない。

そんな時だった。

「まったく、うっさいのよアレ。目が覚めちゃったじゃない」

背後から、不機嫌そうな少女の声が聞こえてきたのは。

悪魔の視力（12）

忘れていた。酷い話だが、魁人はすっかり存在を忘れていた。

生徒会の魔術師は月夜たち三人だけじゃなく、もう一人、最高の退魔師がいるということ。

「紗耶」

そう、先程まで蠱に意識を奪われていた神代紗耶である。どちらかといえば、忘れていたというよりはもう戦えないと思い込んでいた。

右手に退魔の日本刀を握り、長い黒髪を左右に揺らしながら凜然と歩み寄ってくる彼女は、迫りくる異形を見て眉を顰めた。

「で？ 何なのアレ？ ていうか今ってどういう状況？」

やはり操られていた時の記憶はないらしい。

「説明は後よ、紗耶ちゃん。とにかく、あれをどうにかできるかな？」

「月夜先輩、あたしは蒼炎龍牙を受け継いだ神代の退魔師ですよ？ あんな魔獣の詰め合わせみたいなやつ、すぐに燃やせなくてどうするんですか」

言うやいなや、蒼炎龍牙に蒼い炎が点火。紗耶はあの怪物目がけて床を蹴り、疾走する。

あんなバケモノを前に全く臆さない自信家な彼女を見ると、何か本当に呆気なく終わってしまいたいような気がしてきた。

疾走する紗耶に向かって巨腕が振るわれる。体育館の壁を紙切れのように破った拳を、彼女は横に跳んでかわす。ドゴォ、と豪快な音を立てて床に爆弾でも落としたような穴が穿たれた。

それによって発生した衝撃波はものともせず、紗耶は蒼炎龍牙から炎線を放つ。まるで生きているように空中を蛇行するそれがパンチを繰り出した巨腕に巻きつく、一瞬のうちに肩まで炎上させた。悲鳴の咆哮を上げ、魔獣の蠱は腕を振って炎を消そうとする。し

かし破魔の力を持った蒼い炎はなかなか消えることはない。その間に紗耶は刀身の炎を極限まで膨張させ、魔獣の蠱とほとんど変わらない刀身の炎刀を形成。操られていた時など比べ物にならないくらい魔力がそこに込められている。

「はあああああああああああつ！！」

気合いと共に巨大炎刀を振るう。全要素を破魔の劫火で構成されているそれは、魔獣で作られた蠱など何の苦もなく一刀両断——することができなかった。

魔獣の蠱が火炎放射を吐き、炎刀の一撃を受け止めたのだ。

炎と炎。物質化されていないプラズマは均衡することなく混ざり合い、互いの性質が違ったためか大爆発を起こす。

流石の紗耶も今度ばかりは爆風に堪えられなかった。顔を腕で庇って多少は踏ん張っていたものの、すぐに『きゃっ』と小さな悲鳴を発して台風の日にくず入れみたいは何メートルも床を滑っていく。その間、彼女は絶対に蒼炎龍牙を手離さなかった。

今の爆発は蠱の方にも影響がありそうだったが、質量が半端ないことと蜘蛛の土台が安定したものだのために転倒はしていない。しかしダメージは負ったらしく、衝撃波が直撃したと思われる顔を両手で押さえて人間みたいに唸っている。

「紗耶、大丈夫か？」

ようやく立つことのできた魁人が彼女に駆け寄る。自分が彼女の下へ行ったところで仕方ないと思うが、もし打ちどころが悪くて気絶でもしていたら大変だ。

まあ、そんな心配は杞憂だったが。

「フン、大丈夫に決まってるでしょ」紗耶は上体を起こし、「それより邪魔よ。何であんたがここにいるのか知らないけど、魔力が見えるだけのやつがいてもしょうが……？」

魁人の顔を見た紗耶は、両眼の異常な煌めきに目を丸くする。

「あんた、何、その眼？」

「ああ、悪い魔法使いを倒せる眼だ」

魔眼の名前をまだ知らない魁人にはそう答えるしかなかったが、紗耶にはどうも気障っぽく聞こえたらしい。

「何よそれ、かっこつけたつもり？　銀英くらいム力つく台詞なんだけど」

今さらだが、いつもの紗耶だということに安心する魁人。もつとも、こんな時でなければこちらも腹を立てていたかもしれない。

「わかりやすく何ができるか言ってやるよ。あのバケモノが弱れば瞬殺できるんだ」

「それ、本当？」

「ああ、俺の眼力舐めんなよ」

つい数十分前までは自分の眼の非力さを嘆き、さつきは覚醒した力が通用せずに絶望しかけていた魁人だが、今は違う。とてつもない力を手に入れた、紗耶の復帰と共にその喜びも蘇っていた。つまり、彼女の存在が自信を取り戻してくれたのだ。

紗耶は笑った。面白そうなものでも見つけたような含みのある笑みだった。

「わかったわ。それじゃあ、あんたの眼力つてのを見せてもらおうじゃない」

すつくと紗耶は立ち上がる。同時に魔獣の蠢も顔面を包んでいた両手を外し、血色の両眼で紗耶と魁人の姿を捉える。

紗耶が燃える刀を携えて怪物へと近づいていく。

そんな彼女を向こうで月夜は不安そうに、銀英は口元に笑みを浮かべ、葵はやっぱり無表情で、リクは静かに、見守っている。

魁人は、全神経を魔眼に集中させて敵の魔力を凝視。あとは紗耶があれを弱めてくれるのを待つだけである。

魔獣の蠢が咆哮する。

紗耶は精神を集中させるように小さく長く息を吐く。そして、狙いをつけるように刀を床と水平に構え、

「火線術式」

刃の切っ先から火炎を射出。蒼く揺らめく線が空中に引かれてい

く。それは疾風のごときスピードで蠱を一周すると、続いて上へ、下へ、左へ、右へ、さらに一周と様々に、そして複雑に軌道を変えて檻のように蠱を取り囲む幻想的な紋様を描き上げた。

周囲を囲った炎線に戸惑っているように魔獣の蠱は首を左右に振る。が、決してそれには触れようとしない。破魔の炎に触れるとどうなるかはさつき腕に受けた一撃で、いや、本能的に思い知っているようだ。

「——えんかじようそつ炎禍浄葬　！！」

炎の紋様が燦然と輝く。刹那、中に封じ込まれた魔獣の蠱の足元から蒼き炎が螺旋を描きながら噴き上がった。天へと昇る蒼い火龍が魔を喰らう、そんな光景だ。

凄まじい熱量が檻の中でのみ爆発する。大概の魔獣はこの一撃で灰も残らないだろうが、相手は幾多の魔獣が融合したような存在だ。苦しみもがきはするも、消滅する気配はまるでない。

恐らく、あの怪物は紗耶の必殺の一撃に堪えるだろう。だが、確実に破魔の炎は敵の魔力を削っていく。

魁人の眼には、その様子がはつきりと映っていた。

徐々に、徐々に、蠱の魔力が弱まっていく。全身に満ちていた透明な光が量を減らし、不安定になっていく。

そして——

「——消え去れ！」

魔眼が、今までで一番強く煌めいた。

蒼い劫火の中にいる魔獣の蠱が、波打つ水面に映ったように歪む。魔力が捻じれ、千切れ、次々と爆ぜていく。

ヴウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

尾を引くような長い断末魔を残し、魔獣の蠱は炎に炙られながら——霧散した。

蠱の最後を見届けた後、魔眼の煌めきが静まった。

無論、紗耶が蒼炎龍牙を灯している以上、まだ魁人の瞳は青いままだったが。

二人の下へ月夜たちが駆け寄ってくる。

「凄い凄い！ 紗耶ちゃんと魁人くん！ 最強コンビ誕生ねっ」

初めて遊園地に連れて行ってもらった子供のようににはしゃぐ月夜。当然のごとく表情は満面の笑顔だった。同感というように、葵もコクリと頷いている。

「いやあ、このまま付き合ったらどうだい？」

「付き合うかつ！？」

どう考えてもからかいとしか取れない言葉を吐く銀英に、頬を赤く染めた紗耶が刃を一閃。居合の達人もビックリのそれを、銀英は軽く後ろに跳んだだけで難なく回避する。

「月夜先輩、凄いのはこいつじゃなくてあたしですよ、あたし。あんな魔獣くらい、あたしなら別に一人でも片づけられましたよ」

紗耶は蒼炎龍牙を左手と同化させつつそんなことをほざく。敬語なのに何かもの凄く偉そうだ。確かに彼女だけでも勝てたのでは、と思わないこともないが――

「お前格好悪く吹き飛んでただろ？ キャーとか聞こえたぞ」

魁人はそう言ってささやかに復讐してみる。殴られる覚悟で。

「い、言ってないわよそんなこと！ ていうか、あんたその眼になつてから態度でかくなつてない？」

「気のせいだ……あれ？」

――何だろうか。今、少しくらりとした。

「魁人、どうかした？」

俯いて額を押さえる魁人に、小首を傾げた葵が心配げに声（無感情だが）をかけてくる。

「いえ、ちよつと目眩が。たぶん、何でも、ない――がつ！？」

瞬間、頭をバットで殴られたような痛みが走った。全ての魔力の高まりが消え、青くなくなつた瞳に映る世界がぐらぐらと揺れる。

「ちょ、ちよつと、ホントに何でもないの？」

紗耶の声が遠くに聞こえる。割れるような頭痛。狭まる視界。だんだんと意識が朦朧としてくる。

「魁人くん？ 魁人くん！」

ついに全身に力が入らなくなり、倒れる。

意識は闇の中。誰のともわからない声が微かに聞こえていたが、それもプツリと途切れてしまった。

魁人は眠る。

使い過ぎた脳を休めるように、
一切の夢も見ることなく、眠る。

エピソード

病院というものはいつ来てもいい気分にはならない。

ここに来るということは、診察だろうが入院だろうがお見舞いだろうが、必ず自分を含めた身近な誰かが健康を害していることになるからだ。知り合いの医者や看護師に会いに行くというなら話は別だが、残念ながら魁人にそんな知り合いはいない。

今日は四月十六日の日曜日。

この日、魁人が学園からほど近い那緑市中央病院へ赴いたのは、診察とかではなく、お見舞いだった。

「ごめんなさい、羽柴君。その、お忙しいのに、私なんかのために……」

白く清潔な病室内のベッドで寝ている鈴瀬が、申し訳なさそうにベッド脇の椅子に座っている魁人を見詰めてくる。彼女が意識を取り戻したのは今朝方らしく、この様子からして呪いは完全に解けているようだった。

「鈴瀬だつて、俺なんかのために一睡もできなかったんだろ？　ああいこだ」

巳堂に壘を憑けられた生徒たちは、全員この病院に運ばれている。『学園の第一体育館で爆発事件が起こり、それに巻き込まれた』という事になっている。当然、鈴瀬たち体育館など行った覚えのない者もいるはずだが、そこは生徒会か学園の魔術師がどうにかしたのだろう、全員その理由で納得していた。

魁人は記憶を弄られていないが、魔獣の壘を倒した後のことは全く覚えていない。というか、あの後倒れて一日中眠っていたようである。昨日が土曜日でよかった。

目覚めた場所は病院でも自宅でもなく生徒会室だったが、そのおかげですぐに事後処理のことを聞くことができた（月夜と、意外にも紗耶が付きつきりで看病してくれたらしい）。

だから今、こうやって鈴瀬のお見舞いに来ている。

「羽柴君……なんだよね、その、私を助けてくれたの」

「え？」

恥ずかしがるように布団で口元を隠した鈴瀬が突然そんなことを言い出し、魁人は戸惑った。彼女は女子バレー部顧問もしている担任の猪井先生に用事があつて体育館に行った、という風に記憶を操作されているみたいだったが、もしかして本当は全部覚えているのではないだろうか。

「ずっと、声が聞こえてたんです。何を言ってるのかはわからなかったけれど、羽柴君の声が。だから私、返事なくちゃって思っても、できなかった」

口元を隠したまま悲しそうな瞳をする鈴瀬。返事できなかったと言っているが、魁人はしつかりと貰っている。涙という形で。

どうやら全部覚えているというわけではなさそうなので、魁人はそのことについて何も言えなかった。

「……えっと、ごめんなさい、変なこと言つて。たぶん、私の夢だから、その、気にしないで」

「うん、わかった。気にしない」

紅潮した顔をさらに布団で隠す彼女を可愛く思いながら、魁人はできるだけ優しい口調でそう言った。彼女はその言葉にほっとしたのか、布団から顔を出して上半身を起こす。

「起きて平気なのか？」

「あ、はい、大丈夫。明日には退院できるみたいなので」

「そつか。なら、すぐに学園で会えるってことだな。その時はまあ、もつというんなこと話そうぜ。あ、梶川も入れてな」

微妙に恥ずかしいことを言つたような気がするので、親友を使つた軽減作戦を実行。たぶん成功。

「はい」

鈴瀬は、まだ薄らと朱が差した顔に輝くような満面の笑みを咲かせた。

鈴瀬の両親らしき人が面会に来たので、魁人は入れ替わりに病室を出た。

すると、そこには待ち構えていたかのように紗耶が腕を組んで壁に凭れかかっていた。思いつ切り私服の魁人と違って、彼女は学園の制服を着たままだ。

「何でお前がいるんだ？」

素朴な疑問。紗耶は『別にいいでしょ』と言ってプイッと顔を背ける。被害者の中に親しい知り合いでもいて、お見舞いついでに自分を待っていたのだろうか？ …… ありえない。

とりあえず、このまま立ち話をしても迷惑なので二人並んで病院の外を目指す。

「で？ どうだったの、あの子？」

歩きながら、彼女はそう訊いてきた。被害者が心配だということ間違いではないようだ。

「ああ、明日には退院できるって。呪いに後遺症とかなくてよかったよ」

「巳堂が呪い殺すつもりで蠱を使ったら助からなかったかもね」
あたしも含めてだけど、と彼女は魁人にも聞こえない声で付け足した。

「そうだ。まだ聞いてなかったけど、その巳堂はどうなったんだ？
やっぱり死んだのか？」

言うところ、紗耶はゆっくり首を横に振った。どうやらあれで生きているらしい。なんとしぶといやつだろう。でも、これで一発と言わず三十発は殴れる。こっちの手が死ぬだろうけど。

だが、魁人のそんな希望は叶いそうになかった。

「あいつは、あいつを追放した巫蠱術の一族に引き渡したわ。既に九割ほど死んでたけど、残り一割を向こうで処分するんでしょうね」
巳堂は禁忌を二つも破っていたのだ。その一族とやらも生かして

おくことはしないだろう。

自分の呪術で作り出したものに殺されかけた巳堂。人を呪わば穴二つとはこのことだ。

「そういえば、紗耶は検査入院とかしなくてもよかったのか？一番強いのを入れられてただろ？」

「フン、あたしを誰だと思ってんのよ。一般ピーポーと一緒にしないでほしいわね」

まあ確かに、この様子だと全然問題なさそうだ。

「それもそうか。つーか、この病院もよく黙って四十人近くも受け入れたよな。やっぱり生徒会が何かしたのか？」

「あんた、やっぱり何にも知らないのね」

「？」

「いい？世の中の偉い人にとって、オカルトってのは常識の範囲内なの。風水とか気にする社長ってけっこういるでしょ？この病院もそう。学園と連携を取って、今回みたいなことがあった時のために備えてるのよ。まあ、呪いはすぐに対処できなかったみたいだけど」

なるほど、だからここは学園から目と鼻の先にあるのか。

知らなかった裏世界の事情がまた一つ。もう後戻りはできないだろう。

もつとも、立ち向かうと決めた以上、戻る気はないのだが……。

鈴瀬の病室は五階だったので、階段を使わずエレベーターで降りる。一階のボタンを押すと扉が閉まり、密室となった空間で魁人と紗耶は二人きり。

「……一つ、確認していい？」

エレベーター独特の落ちていく違和感を覚え始めた時、気まぐしくなりかけた空気を壊すように紗耶がそう言ってきた。

魁人は脳内に疑問符を浮かべて首を捻る。彼女が自分に確認するようなことなどあっただろうか？

「月夜先輩から全部聞いたんだけど……、あたしを『蟲』の呪縛か

ら解放してくれたのって、間違いなくあんなのよね？」

紗耶は魁人を見ていない。顔を背け、というより体ごと後ろを向いている。艶やかな黒髪の隙間から覗く耳が、心なしか赤く染まっているように見えた。

「まあ、そうなるな。『悪魔の視力』だっけ？ この眼があつたからこそなんだけど」

自分があの後ぶっ倒れたのも、力を使った代償のようなものだと聞いた。魔力を操作するということは、込められている術者の意思を上から書き換えるということで、脳への負担がとんでもないらしい。まだ偏頭痛がするも、一日寝込むだけで済んだのは月夜と紗耶の看病のおかげだろう。一応礼は言つたが、もう一度言うべきかもしれない。

「そ、そうよね。あんたの眼が凄いのよね。今は魔力操作できないみたいだけど」

そうだ。目が覚めてから月夜たちに実験的な感じで魔眼を試されたが、いつも通り、ただ『見える』だけだった。あの時みたいに思い通りになりそうな感覚はしなかった。

月夜曰く、あの時のように感情が異常に高ぶっていたり、危機的状況だったり、特殊な状況下でないと発動しないのではないかとのこと。危機的状況にさせられてまでテストすることは流石になかったが、実際、自分でもそうじゃないかと思っている。

「魔眼は凄い。でも力は使えない。弱いあんなのまま。……それでも」

「？」

紗耶が妙にもじもじしている。その姿は何か彼女らしくない。トイレにでも行きたいのだろうか、と魁人はベタなことを適当に考えて浮かんできそうだった妄想を排除する。

「あり——」

紗耶が小声で何か言いかけた時、ピンポーン、とドアホンのような音が鳴る。見ると、回数表示の『1』が点滅していた。静かな音

を立てて扉が左右に開く。

「それでも、何だよ？」

エレベーターを降りる前に問いかけると、彼女は一人さっさと早足で歩き出した。慌てて後を追う魁人。

自動ドアを潜り、病院の外へと出る。すぐそこは短い階段とスロ―プになっていた。

「おい、紗耶」

「それでも！」

階段の前で紗耶は立ち止まると、振り向かず強い口調で、言う。

「礼は言わないわよ！」

「……いや言えよ。ていうかそれ文章繋がってるのか？」

少しムカつときたが、あまり怒鳴ると偏頭痛が発動してしまう。

前にもこんなことがあったような気もするが、まあ、この方が紗耶らしいと言えばそうだろう。

「あーもう！ うっさい！ ごちゃごちゃ言っていないで行くわよ、魁人」

「そっちから言い出したんだろ？ それに行くってどこに——ん？」

今初めて紗耶に『あんた』ではなく名前を呼ばれたような気が……

否、絶対に呼んだ。それはつまり、少しは自分の存在を認めてくれたってことなのだろうか。と――

「いやあ、何かもうアレだねえ。うん、お熱いつてやつ」

聞き覚えのある男性の声。視線を紗耶からずらすと、階段の下に見知った顔が三人と一匹。

午後の日差しの下、生徒会魔術師の面々がそこに揃っていた。

月夜はにこやかに笑いながら手を振り、銀英はニヤニヤとしながら魁人と紗耶を眺め、無表情の葵は子犬リクをぬいぐるみのように抱いている。三人とも、紗耶と同じく制服姿だった。

日曜でも生徒会は活動しているのだろう。創立者際も近いことだ

し。

「えーと、先輩たちが何でここに？ 誰かのお見舞いですか？」

とりあえず銀英の冷やかしのような言葉は置いといて魁人は訊いた。そうすると月夜が手を振るのをやめ、

「あははー、違う違う。私たちは魁人くんに用があるのよ」

「俺に？」

魁人が自分を指差すと、月夜は首を傾げた。

「あれ？ 紗耶ちゃんから何も聞いてないの？」

魁人は紗耶を見る。しかし、彼女は目を合わそうとせず階段を駆け下りていく。仕方なく、魁人も月夜たちの前まで下りていった。

「話はしましたけど、何のことですか？」

巳堂のことか、魔眼のことか、それとも紗耶がエレベーターで言おうとしたことか……。

「私たちはね、改めて魁人くんを生徒会に誘いに来たの」

どれも違った。だが一番納得できることだった。

少し前の魁人なら『お断りします』と即答していただろうが、今回はそうしなかった。

「僕らは諦めないって言っただろう？ 簡単に発動できなくとも、

『悪魔の視力』なんて力を野放しにはできないからねえ。というか、魁人が入ってくれば僕の仕事が楽にな——いたたた、痛い痛い葵さん耳引つ張らないで取れるから！？」

「銀、サボるな」

葵の無表情から放たれる無感情な声は、なかなか恐怖するものがあった。ついでにリクも吠える。そんな彼らのやり取りはさておき、月夜が説得するように言ってくる。

「今回のことでわかったと思うけど、魁人くんの力は魔力操作じゃなくても役に立つの。寧ろ魔力操作は負担が大きいから使えなくてよかったのかな」

メイザース学園の生徒会ならこの眼を誰かのために使える。生まれて十五年、何の役にも立たなかったこの眼が、だ。

前に銀英から聞いた話が本当なら、学費免除に加えて給料も多少出るらしい。丁度、アルバイトを探したいと思っていたところでもある。

「どう、魁人くん？ 生徒会に、入ってくれないかな？」

「俺は——」

自分は魔術の世界から逃げられない。だから立ち向かうと決めた魁人。その答えは——

「生徒会には入りません」

月夜の笑顔が固まった。銀英と葵の動きも止まる。

「はあ！？ あんた今さら何言ってるのよ！？ ここまで来たんだつたら空気読んで入りなさいよ！」

紗耶は振り向いたかと思えば眉を吊り上げて怒鳴ってきた。彼女は反対派だったはずではなかったのか。——ああ、だから言い出せなかったのか。

唾を飛ばす勢いでまだ何か叫んでいる紗耶は黙殺し、魁人は頬を掻きながら月夜に告げる。

「いや、えっと、生徒会には入りませんが、協力はするつもりです」

「だったら何で入らないの？」

「ほら、生徒会って表の仕事があるじゃないですか？ 俺、流石にそこまでやるつもりはないんで」

生徒会はいくまで生徒会なのだ。忘れてはならない。

学費免除は魅力的だが、自分の時間というものが極端に減ってしまつのは御免である。それは彼女たちの姿を見れば一目瞭然。土日はもちろん、夏休みだって削られる。

「いやあ、わかってるねえ、魁人君。普段の仕事は僕もついサボりたくなっちゃうからねえ」

銀英が共感するように何度も頷く。紗耶が『馬鹿じゃないの？』

というような目をする。

「そんなの片手間でできることじゃない」

「それが僕ら凡人には億劫なのさ」

銀英が凡人かどうかは知らないが、部活にすら入る気のない魁人にとつては確かに億劫以外の何物でもない。

「魁人くん、本当に入らないの？」

「はい」

真剣な表情で確認してくる月夜を、魁人はまっすぐに見る。彼女はしばらく魁人の目を見詰めると、にらめっこに負けたように笑った。

「あははー、それじゃあしょうがないか。でも、生徒会魔術師の仕事は手伝ってはくれるんだよね？」

「はい、一応。あ、できれば魔術のことをいろいろと教えてくれると助かります」

何の知識がないまま、そんなところにいるわけにもいかないだろう。

「うんうん。じゃあ、魁人くんは仮生徒会役員のままってことね。

だから生徒会室は自由に使っていいわよ。魔術のことは、そこで手取り足取り教えてあげるね」

天使のような微笑みを浮かべる月夜に、魁人は照れたように頭を掻いた。彼女の言い方が何かアレだった箇所もあるが、ここは気にしない。

と、何に対してか不服そうな顔をした紗耶が間に割って入り、キツと魁人の顔を睨め上げてくる。そして――

「魔眼の力が使えないあんたはただの雑魚なんだから、足手纏いにならないようあたしが鍛えてあげるわ！」

「は？ 鍛えるって――痛あつ！？」

呆けたような顔をする魁人は弁慶の泣き所――向う脛を爪先で蹴られて悲鳴を上げる。紗耶はそのまま、フン、と鼻から息を吐いて立ち去っていく。向う脛を両手で押さえて蹲る魁人は、何なんだよ、

と揺れる黒髪を涙目で睨みつけた。

そこへ、先輩たちが気の毒そうに言葉をかけてくる。

「おやおや、紗耶先生による愛と炎のトレーニング開始ですかねえ。こりゃ魁人も大変だ」

「魁人、死ぬかも」

「あははー、魁人くん頑張ってね」

「ちよっ！先輩それどういうことですかっ!？」

急激に不安が込み上げてくる。紗耶が具体的にどう鍛えてくれるのかは知らないが、危険度を示す信号機の色は間違いなく赤色だろう。

明日からの自分は果して無事でいられるのだろうか。いろんな意味で。

協力すると言ったことを、今少しだけ後悔する魁人だった。

エピローグ（後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございます。そしてお疲れ様です。昔とあるラノベ新人賞に投稿して一次選考も通らなかった駄作ですが、是非とも感想をお聞かせください。

これでたぶん文庫本一冊くらいです。一巻目完結ということですが、続きを書く気は今のところありません（要望が強ければ話は別ですがw）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4731q/>

魔術的生徒会

2011年5月21日10時25分発行